

山岳時報

時 報

No. 12

1994年9月

京都大学学士山岳会

梅里雪山隊と医学隊

酒井 敏明

目次

AACKの動き—梅里雪山隊と医学隊	酒井 敏明	1
ヒマラヤ医学から Ecological Medicine へ		
— 京都大学ヒマラヤ医学研究計画1991—1993—	松林 公藏	5
梅里雪山学術登山	酒井 敏明	19
ブータンその後	栗田 靖之・月原 敏博	65
Climbing to Giant Castle 23rd-30th December, 1989	K. SAKAMOTO	75
南アフリカの山事情について	阪本 公一	78
キリマンジャロ登山旅行メモ	井上 潤	79
中国での登山食糧見聞	斎藤 惇生	82

この表紙の“AACK”の文字はカスティラオによってイタリア語に訳され、セビアにて1503年に出版されたマルコ・ポーロ著『東方見聞録』より採写したものである (京都大学付属図書館蔵)

1. 梅里雪山計画前史

日中国交が回復してからAACK会員有志が中国雲南省への遠征を夢み、さまざまな準備を始めたとしても、それは至極当然のことであろう。京大理学部の実験者グループとAACK有志で、植物、昆虫、魚類、霊長類の調査と登山を組み合わせた総合的学術調査隊を中国との合同でおこないたいとして、1980年には中国科学院と交渉をはじめたが、中国側が規模の大きさや入域の困難を理由として、断ってきたこともある。その後休眠状態におちいった雲南計画はふとしたことから息を吹き返すことになった。

京都大学探検部では1984年以来中国登山協会(CMA)に梅里雪山峰の登山許可を申請していて、同部が85年夏に青藏高原の各拉丹冬雪山へ遠征隊を送って以来CMAとの接触を保っていた。同隊隊員倉智清司(国際交流協会)が87年10月に申請した梅里雪山の許可が88年1月に下り、京大探検部は種々検討の結果梅里雪山へ遠征隊を派遣することはできないと判断し、AACKに梅里雪山許可の委譲を提案してきたのである。

AACKは88年5月の理事会において梅里雪山遠征計画を採り上げることを決定し、以後雲南小委員会を設置して、具体的にこの計画の実行案を細部に至るまで作成させることになる。この山には上越山岳協会が87年5月に偵察隊を派遣、同年8月に登山隊を送って試登しているため、同会に照会して情報を得るとともに、横山宏太郎を隊長とする先遣隊を88年秋に派遣することに

なった。ナムナニ方式による日中合同隊を編成する必要があったので、中国登山協会および、雲南省登山協会と計画の細部にわたる協議をする必要があり、折衝のため関係者がたびたび訪中することになった。

2. 先遣隊と科学隊

88年10月から11月にかけて、横山ほか4名がCMAの王振華ほか5名とともに雲南省迪慶族自治州徳欽県に初めて入り、梅里雪山の登路偵察をおこなうとともに種々の情報収集につとめた。梅里雪山は6740mの主峰を中心に、北に奶日頂卡(ナイリティンカ、6379m)、南に太子雪山(6000m)をおこす約10kmの稜線がたなり、東側を流れる瀾滄江の河面の高度2000mまで大きな落差をもってそびえている。主稜線の背後を流れるサルウィン河(怒江)峡谷まで西側も同じくらい落ちていると思われるが、こちらはチベット自治区領になるので、西面に登路をうかがうことはできない。

梅里の主峰から瀾滄江へ落ちる2本の氷河のうち、正面の氷河(奶諾戈汝=ナイノゴル、別名明永氷河)は圧倒的なアイスフォールをおとしているのでここに登攀路は見出しがたいが、北寄りの氷河(森層堡=シェンチェンバオ)は登れそうだと判断されたので、先遣隊はこの氷河の末端まで登り、氷河上流部を見るために氷河北側の支尾根(支拉というチベット族の小村があるのでズラ山稜と呼ぶ)を登って、登路の見当をつけてきた。

先遣隊は以上の偵察活動を終え、気象のデータをも入手して帰国したので、ヒマラヤ委員会および雲南小委員会は遠征隊の規模、時期、隊の構成を決定し、装備・食糧の種類や数量のリスト作成と調達入手方法を研究し、準備が精力的に進められた。北京と昆明との協議のために交渉団をおくり、また中国からも使節団が京都を訪れるなど、合同遠征隊ならではの煩雑で多忙な日々が続くことになる。

あとに記すように、ヒマラヤ医学学術登山計画が同時並行のかたちで進められたので、この時期は直接準備にたずさわるものだけではなく、募金や渉外の仕事で飛び回る大勢の会員がルームを出入りして、従来の遠征のときにもまして臨戦状態が長く続いたのである。

学術登山隊編成と並んで、昆明の諸学術団体との提携により、雲南へテレビ取材陣を伴う科学隊を栗田靖之を隊長として派遣することになった。この隊は89年5月から7月にかけて迪慶西蔵族自治州と怒江リ族自治州の各地を踏査することができたが、雲南省のカウンターパートとの折衝に手間取り、昆明出発がおくれるなど、合同計画の困難さを身をもって経験することになった。

3. 梅里第1次登山隊と偵察隊

1989年9月に先遣隊が京都を立ち、10月初旬本隊が出発した。日本側は左右田健次隊長以下14人、中国側は楊必育総隊長以下9人、昆明を10月9日に立ち、斯農のベースハウスには14日に着いた。シェンチェンバオ氷河末端近くにBC(3850m)を建設、同氷河下部の落差1000mのアイスフォールの左岸側をまいて上部氷原にC1(4660m)を作るまでに15日を要した。その上で落差400mの上部アイスフォールの突破を試みたが、氷の状況が悪く、雪崩の危険が大で、

なかなかルートのをばすことができない。予想よりも天気が悪く、3日連続の降雪に二度も見舞われた。滞在日数をのばすことができないので、ついにこのルートからの登攀を断念することに決定した。

87年夏の上越隊はナイノゴル氷河南側の支尾根を登り、同氷河上部氷原を見おろす地点まで達したのだが、そこからは氷原上に下りることができない。もし他のルートによってこの上部氷原に到達することが可能ならば、その先は登路を見出すことができそうであった。

第1次隊は登路開拓活動の最終期に東北尾根上のコルに登り、そこから問題のナイノゴル氷河上部氷原と主稜線から落ちる3本の支尾根のようすを充分観察して、ここに登攀路を見出し得るだろうとの判断に到達したのである。

帰国後反省会や報告会を開くなかで、もう一度登路偵察隊を出したいという機運が高まり、中国側の同意を得られたので、90年2月から4月にかけて、井上治郎隊長以下日本側4人、中国側6人の偵察隊が現地入りした。井上治郎は蘭州氷川凍土研究所との共同調査のため、中山茂樹はムズターグアタ医学隊参加のため、偵察活動には一部しか参加できなかったが、同隊は予期以上の成果をあげることができた。

明永川の一つ南で瀾滄江に注ぐ雨崩川の源頭には笑農という放牧地がある。この少し上に三股に分かれる小氷河があり、その右股氷河を登るとナイノゴル氷河上部氷原の右岸を限る支尾根上のコルに着く。ここから梅里雪山主峰の左肩から落ちる3本の雪稜の麓まで下りるのは容易であり、中央の雪稜は登攀可能と思われる。太子雪山寄りの主稜線の鞍部の一つに登って、今まで目にすることができなかった西尾根の上部も見えたし、頂上直下の主稜線のようすもくわしく見ることができた。

ベースキャンプに好適な場所、各高所キャンプ予定位置なども決め、必要な固定ロープの数量についてもデータを仕入れてきた。登攀時期を考える一つの要素は高度4200mの白馬山口が雪で閉鎖される時期とその迂回路の有無なのだが、瀾滄江下流の維西をまわる道路がいざというときには使えることがわかった。

徳欽気象站で入手した資料により、登攀の時期としては一番雨や雪が少ないと考えられる12月を中心として考えるべきであるとわかった。

4. 梅里第2次登山隊

1990年5月のAACK理事会はその年11月から91年1月に総隊長左右田健次、学術登山隊長井上治郎他10人をもって第2次梅里雪山隊を派遣することを決定した。中国側は楊必育総隊長他8人、徳欽県出身の高所協力員8人と炊事や輸送を担当する人がこれに加わる。

本隊は12月1日標高3470mのBCに入り、登高は次の日から始められた。日本側5人、中国側5人の隊員はすでに梅里と取り組んだことのある経験者であり、先遣隊と偵察隊と合わせて今回が3度目、4度目のものもある。登高は順調に進められ、C1からC3までの高所キャンプはそれぞれ予定された場所に建設された。

第2バットレスと呼ばれることになった中央の雪稜には4日間の登攀とルート工作のあとついに道ができあがり、26日に第2バットレス最上部にC4ができて4隊員が入った。主稜線まで登り、27日と28日に、上部ルートの偵察をしたのち、予想された大雪をやりすごすため最前線の隊員達はいったんC3に下りた。もっぱらBCで後方支援を受け持っていた佐々木秘書長をも含め日本隊員11人と中国隊員4人、高所協力員2人が12月30日夕方までにC3に集結し

た。こうして万全の登頂態勢を作った次の好天気を待っていたC3に正月3日夜から4日早朝にかけて発生した雪崩が襲いかかり、全員がテントもろとも埋められるという悲劇が起こったと考えられる。

悲報はBCから昆明、北京を経由して京都に伝えられ、斎藤惇生を隊長とする救援隊が急遽派遣され、北京およびラサから急派されたCMA救援隊と合同でC3現場到達のため苦闘を続けたが、数年に一度という悪天候のために無人のC2を雪中から掘り出すことができただけで、17名の遭難死を受け入れざるを得ない最悪の結果に終わったのである。

5. 捜索調査隊と事故調査活動

AACKは91年3月に事故調査委員会を設置し、精力的な調査をおこなう一方で、CMAとの合同捜索調査隊を4月～6月に派遣した。この時期にも悪天候が続き、右股氷河が頻発する雪崩のためにC1まで登ることができず、捜索調査活動はほとんどできないまま撤収せざるを得なくなった。事故調査委員会は気象、雪氷・雪崩、登攀タクティクスなど6グループに分かれて事実確認や情報収集の作業をし、その結果を全体の委員会に持ち寄り、10月までに8回の会合を重ねて検討を加えた。委員会はその調査の結果をまとめ、92年1月末に『梅里雪山事故調査報告書』を公刊して、業務を終了した。

AACKは日本側遭難隊員の家族から成る梅里家族訪中団を編成した。ご家族は91年4月～5月に徳欽県を訪問し、瀾滄江をへだてて梅里雪山を望見できる公路の峠に作られた追悼記念碑のもとで合同慰霊祭をおこなった。また、事故調査活動が一段落してから本会は隊員ご家族と相談し、記念事業として合同追悼文集の編集と記念碑の建立をすることになった。前者については

ご家族をはじめ各方面の協力を得て、『梅里雪山』（A5判471ページ）を92年11月30日付けで刊行した。後者については以前からご親交を得ていた前天台座主山田恵諦師のご厚意で比叡山延暦寺山内横川の地に石碑を建ててお許しを得、93年4月25日同師に「鎮嶺」碑の開眼法要を執行していただくことができた。

6. 京都大学ヒマラヤ研究会とシシャパンマ医学学術調査

戦後ネパール、カラコルム、中国などの各地に送り出されたAACKの遠征隊には医師が隊員の一人として参加するのが通例であった。各隊において隊員達の健康管理に当たるだけでなく、低温、低酸素環境下における医学、生理学的知見が増し、情報が集積されるにつれて、高所医学の領域においてAACKおよびその周辺には専門家集団が形成されたわけである。松沢哲郎と松林公蔵を中心とする会員たちはこれをさらに一歩進めて、登山をしながら医学研究をするのではなく、高所の低酸素環境下における生理的適応過程の研究をはじめ医学の周辺領域である心理学、社会学、環境科学などの研究者を含め、ヒマラヤの高峰で医学を前面に立てた学術調査をおこなうことを目的として京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊を編成する構想が生まれた。その母体となる組織として1989年秋に京都大学ヒマラヤ研究会（ASH）が結成された。ASHは資金面や人材の面で計画を独自に実行できるか論議を重ねた末88年5月に計画をAACKに委譲することを決し、理事会はこれを受けてこの計画をAACKの主催でおこなうことを決定したのである。

松沢、松林らの実行部隊は堀了平会長、斎藤惇生、中島道郎などの熟年会員に同隊への参加を要請し、林一彦、近藤良夫前会長らの協力を得て、京大医学部附属病院院

長戸部隆吉教授に総隊長を引き受けてくださるようお願いし、ご承諾を得ることができた。同医学学術登山隊は文部省科学研究費を申請するとともに、中国登山協会にシシャパンマ峰の登山許可申請を出し、中国側の共同研究組織との折衝を始めるなどさまざまな難問と取り組む日々が続いた。その詳細をここで述べることはできないが、困難視された中国登山協会の許可は1990年春の本隊と89年春の予備調査の許可という望ましい結果を得ることができた。ところが89年3月ラサに戒厳令発布の事変があり、予備調査は急遽フィールドを新疆のムズタグアタに変更して実施されることになった。

結局、AACKは1988年秋に梅里雪山先遣隊、89年春にはムズタグアタ予備調査隊と、梅里雪山科学隊、同年秋に梅里雪山第1次学術登山隊、90年春に梅里雪山偵察隊とシシャパンマ医学学術登山隊を相次いで送り出すという超繁忙の時期を迎えたのである。

その最後が90年11月に大阪空港を出発した梅里雪山第2次隊であった。

ヒマラヤ医学から Ecological Medicine へ — 京都大学ヒマラヤ医学研究計画1991-1993 —

松林公蔵

はじめに

高齢化とエコロジーの問題は、21世紀の人類にとって、最も重要な課題となるだろう。

近代医学研究の主流は、人間全体に共通する純粹生物学的現象を重視して進歩してきた。したがってそこには、“personality”の概念が入る余地は少なく、“個”をとりまく環境や背景に関する配慮も乏しかった。しかし加齢現象では、個体差こそが問題であり、個体差に影響をもたらす環境が重要である。個の病態を、環境要因との関連で探ろうとする生態学的アプローチを、今仮に、Ecological Medicineと呼ぶとすれば、老年医学には、この視点が重要である。

エコロジーと医学

「生態学」ということばが、今ほど一般的でなかった時代、生物の研究は、死物の研究でもあった。標本を採集し、整理し、分類する。薄暗い研究室のひんやりとした戸棚に、整然と並べられた標本箱・・・このような古典的生物学にあきたりず、自然の中の生き物の世界をあるがままに描き出そうと試みた一群の若き研究者たちによって、生態学=エコロジーという新しい学問分野が創始されることとなる。同様にかつて病気は、病院や研究室の中だけで考究されてきた。しかし、病気のために生活の場を離れ病院を訪れる患者はいわば仮の姿である。加齢の本態を捉えようとするならば、医療スタッフが生活の場に出て行って、老年者を取り囲む自然環境や生活習慣といったわくぐみの中で今一度、老化を捉えなおす契機が必要である。

垂直への Ecological Medicine

第3の極地といわれるヒマラヤ、地球の最高点であるエベレスト征服にいたる過程で、イギリス人によって繰り広げられた偉大なるドラマにはすさまじいものがある。1953年エリザベス女王の戴冠式の前日、ロンドンにもたらされた「英国隊エベレスト初登頂」の報は全世界を熱狂させた。以後、ヒマラヤの未踏峰は次々と人類の到達するところとなり、8000メートル峰初登頂に対する人類の挑戦はついに幕を閉じたのである。しかし、ヒマラヤ登山が人体にいかなる影響をもたらすのかについては明らかでなかった。幕が下りたのはあくまで地理的な探検であって、ヒマラヤ医学はようやく緒についたばかりであった。

1964年、生理学は、人間が無酸素でエベレスト頂上（8848m）に達することは不可能であると結論した¹⁾。しかしながら1978年、ラインホルト・メスナーとピーター・ハーベラーは無酸素でエベレスト頂上に達してしまったのである。この事実の生理学的うらづけを実証するために、1981年 American Medical Research Expedition to Everest (AMREE)が組織され、6300メートルのキャンプで行った低圧下運動負荷試験の結果、計算上ではあるが、無酸素エベレスト登頂の生理学的可能性が算出された。すなわち、人類によるエベレスト無酸素登頂という生理学上の特定の問題を解決するために、AMREEという医学学術隊が組織され、みずからの学説の問題点を身を挺して実験にうつしたのである²⁾。

呼吸生理学的に、無酸素ヒマラヤ登山の可能性は実証されたものの、低酸素の影響が、

人間の脳にいかなる影響をもたらすのかについては明らかでなかった。脳にはおそらく非可逆的な悪影響を与えるであろうとする論文³⁾があいついだ。そこで私たちは、1990年、医学研究者自身が自らを被検者として、チベットヒマラヤ・シシヤパンマ峰(8027m)登頂の過程で、人間の低酸素に対する順化機構を、循環、脳・神経、行動生理の面から解明することを目的とした京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊⁴⁾を組織し、2名の登頂者の登山前後における脳代謝をPETによって検討した。その結果、高所登山後は、脳血流は著明に減少するが、酸素摂取率は亢進状態を維持すること、そして、高所登山前後でも脳のぶどう糖代謝率は変化しないことが判明した。

時間軸への Ecological Medicine

時間の推移とともに、加齢のあり方は変わらないであろうか？

図1は、心係数と年齢との関係を検討した2つの結果である。1955年に米国NIHのグループが発表した成績では、心係数は加齢とともに減少するというものであった(図1左)。一方、同じNIHが、30年後に再調査したデータ(図1右)では、心係数は加齢に

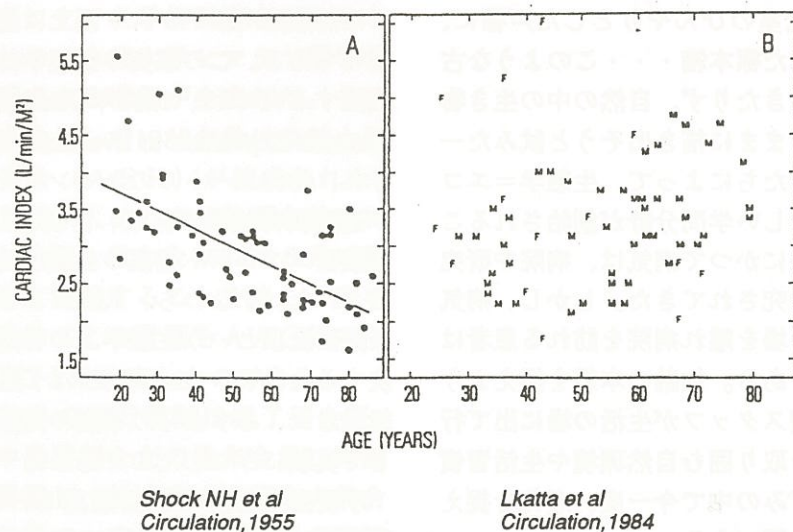


図1

よって変化していなかった。どうして、このように成績の乖離がおこったのか。その理由として、1955年調査時の老年者が老人ホームに住む老人であるのに対し、1984年調査時の対象は地域在住老年者であって、この老年者のライフスタイルの違いが、成績の乖離をもたらした可能性は十分考えられる。しかし、そればかりではなく、老年者の生理あるいは老化の様態が、30年間で変化しと考えられないであろうか。少なくともここ30年間で、高齢者の外見や健康度が著明に変化したことは明らかである。

私たちは、高知県の香北町(人口:6000人、高齢化率:32%)において、毎年、老年者を対象に、機能検診と機能劣化予防に関する啓蒙活動を展開している。図2は、香北町における65歳以上の老年者の、ADL自立度に関する経年的変化を示したものである。1991年度から1993年度の2年間の間に、ADL完全自立者の割合は71%から74%へと有意に増加した。ちなみに香北町では1991年から1993年の間に、高齢化率は29→32%へと急速な高齢化が進み、じつに65歳以上の老年者は130人の増加をみている。この事実は、高齢化現象とは、必ずしも虚弱老人(frail elderly)ばか

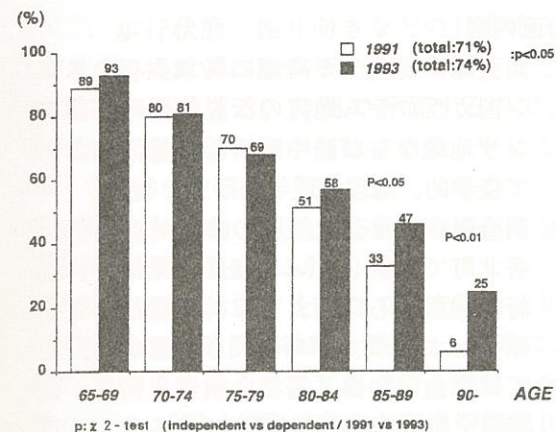


図2. ADL完全自立者の年齢階層別頻度の経年変化

りが増加するわけではなく、時代の推移とともに、自立老年者の方が増加していることを物語っている。しかし、そればかりでなく、毎年の検診・啓蒙活動が、老年者住民の健康意識を向上させ、完全自立者の加齢ともなう低下の傾向を抑制することに貢献したとも解釈できる。

水平への Ecological Medicine

地球上には、多くの民族が分布している。自然環境や文明が異なれば、人間の健康や加齢の様態も大きな影響をうけるだろう。今までの、生理学的知見は、純粋生物学的視点に偏し、生態学的視点が欠けていた観がある。例えば、血圧の国際比較に関する研究から、多くの文明圏では、収縮期血圧は加齢とともに上昇することが知られている。血圧が年齢と相関しない地域としては、少数の未開地域が知られているのみで、その原因として食塩の摂取が極端に少ないことが指摘されてきた。私たちは、ヒマラヤ地域4カ村における住民の血圧と年齢との関係を調査した結果、両者が相関しない地域が4カ村中2カ村に認められた。しかし、この地域でとくに食塩摂取が少ないという事実はない。加齢と血圧の

問題は、食塩以外の要因をも考慮する必要があるだろう。

治療医学やリハビリ学が、病院を中心とする“復権の医学”として位置づけられるのに対して、老年医学は本来的に、フィールドを重視した“予防の医学”として位置づけるべきであろう。その一つの方法として、生態学的視点に基づいた、Ecological Medicine(フィールド医学)という概念を提唱した。

1990年のシシヤパンマ医学学術登山隊の派遣以後も、ヒマラヤ地域をフィールドとする医学調査は、絶え間なく、毎年継続されている。これらの調査は、正式には文部省国際学術研究、京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画(KUMREH)として位置づけられるが、実質的には、メンバーの主力は高知医科大学の教官や学生が中心となり、世界中の各地域における老年者の健康度を医学的・文化人類学的観点から調査研究したものである。

以下、その概要を述べてみたい。

参考文献

- 1) Pugh LGCE et al: Muscular exercise at great altitudes. J Appl Physiol. 19:431-440, 1964.
- 2) West JB: Human Physiology at Extreme Altitudes on Mount Everest. Science 22 3:784-788, 1984. Science on Everest, 1981.
- 3) Regard M et al: Persistent cognitive impairment in climbers after repeated exposure to extreme altitude. Neurology 39: 210-213, 1989.
- 4) 松林公蔵: 京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画(KUMREH). ヒマラヤ学誌 2:3-42, 1991.

第1次フンザ・カラコラム 医学学術調査隊

期間：1991年7月29日～9月3日

隊員構成：

隊長：松林 公蔵 (40歳)
高知医科大学老年病科講師・医博
(老年病学、神経内科学、高所医学)

秘書長：足立みなみ (34歳)
京都大学精神科技官
(神経病理学、一般臨床生理学)

隊員：奥宮 清人 (30歳)
住友病院神経内科医師
高知医科大学老年病科研究生
(神経内科学、老年病学)

曾根 哲寛 (28歳)
島田市民病院麻酔科医師
(麻酔学、呼吸器病学)

野田 智子
高知医科大学老年病科医員
(循環器病学、老年病学)

内田 一茂 (24歳)
高知医科大学第6年次学生
宮本 寛 (28歳)

高知医科大学第4年次学生
江本 博文 (21歳)
高知医科大学第3年次学生

報道隊員：宮田 速雄 (40歳)
高知新聞社会部記者

隊付通訳：遠山 仁 (39歳)
高知新聞論説委員

研究目的

伝説的に世界の長寿部落として知られるパキスタン国カラコラム地方、フンザ地域において“老人検診”を実施し、さらにその背景となるライフスタイルや生活習慣、社会的背景、自然環境などを調査し、それらが老化に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

計画内容

1. 調査隊はヒマラヤ高地に属するパキスタン国カラコラム地方の伝説的長寿部落フンザ地域ならびに中国新疆自治区において疫学的、地理病理学的研究を行う。
2. 調査隊が行う老人検診の内容は、高知県香北町で継続している血圧、脈拍、神経行動機能、心電図、自律神経機能などを原則とするが、その他にも希望者に対しては採血等のより精密な検索を行う。同時に、必要に応じて施療を行う。
3. パキスタン国医療衛生機関の協力のもとに実施する本医学調査を通じて、当該地域に居住する老人との友好関係を深める。

研究の概要

フンザならびに中国新疆自治区における医学調査は、1991年8月3日から9月3日にかけて実施した。フンザにおける老年者健康度調査地域は、グルミット、カリマバード、パス、シムシャールの4カ村である。

受診者は、20歳以上の成人613名、うち60歳以上の老年者110名であった。そのほかに、下記の検診からは除外したが、施療にあたった20歳未満の小児ならびに学童は約500名である。

検診項目は以下の通り。

1. 身長、体重、皮下脂肪の厚さ、握力
2. 血圧測定

マニュアル血圧測定：座位
自動血圧測定：座位
臥位
立位

(それぞれにつき、各2回ずつ測定し平均をとった)

3. 神経行動機能検査

- 1) 歩行、姿勢反射 ("Up and Go" テスト)
(肘かけ椅子から立ち上がり、3メートル歩いてもどり、ふたたび椅子に座るまでの時間を測定—立ち上がり、

歩行状態、振り向きなどの日常的立居振舞いに関する全体的な安定度が評価できる。時間で評価するので、点数が低い方が優れていることになる)

- 2) 視空間認知・運動協応動作能力 (コンピュータゲーム)
(コンピュータを用いて、空間的認知力と運動反射神経を測定し、同時に、簡単なルールを理解できる理解力をテスト。点数が高い方が視空間認知能力や運動反射神経は優れていることになる)

- 3) ボタン付けテスト
(指先の細かい運動能力を評価する。時間点数が低い方が、優れている)

4. 動脈血液中酸素飽和度
(動脈血の中の酸素の濃度)

5. 採血 (赤血球濃度、肝臓・腎臓機能、コレステロール、など)

6. 心電図、心臓エコー検査

7. 主観的な幸福度の調査
(20センチの線分の、左端は最大の不幸(マイナス100%)、右端を最も幸福(プラス100%)、中間を普通(0%)として、現在の自分のおかれた境遇、生活程度、心理的環境など、いっさいがっさいを総合して、現在自分は、どの程度の幸福状態にあるかを、印してもらおう。印の付いた点の距離を定規で測り、プラス、マイナスをつけて、その人の幸福度指数とした)

研究の趣旨

周知のように、最も医療のうでで先進国である日本は、これから30年後には間違いなく、人類史上かつて経験したことのない超高齢化社会に突入する。しかし、この明らかに到来するはずの状況に対応しうる医学的視点は、未だ確立されておらず、老年病学に関する方

法論的模索がようやく緒についたばかりといっても過言ではない。

これまで日本においては、2回の疾病構造の大転換を経験している。最初は、今世紀中葉から1965年後半にかけて、高かった乳児死亡率と結核を始めとする感染症などの急性期疾患の克服が成功し、医学が「疾病を治し、寿命を延ばす」ことにおおいなる自信をもった時期である。事実、わが国の平均寿命は、今世紀初頭に30歳代に到達し、老年医学が問題にされはじめた1910年代でもようやく40歳を越えたばかりであった。1942年に、50歳の関門を越えて以後、加速度的な伸びを示し、現在では男子は75歳を、女子は81歳を越えている。その結果、医療の対象は、急性期疾患から慢性疾患へと移行し、現在、老年病学に限らず内科領域が対応する疾患の多くは老人性痴呆、脳梗塞、虚血性心疾患、多臓器病変による寝たきり老人といった慢性疾患である。これら老人の慢性疾患に対しては、急性期疾患に成功した時代の発想である「疾病を治し、寿命を延ばす」という哲学は、必ずしもあてはまらなくなっているのが現状であろう。

いま一つの第2の転換期は、75歳以上の老人が確実に増加しており、「寿命の延長」よりも「長寿の内容」こそが、重要な問題となってきた現在の変化である。近年、臨床老年学では、「通常の老化」(usual aging)と「理想的な老化」(successful aging)という概念が提唱されている。前者は主として、生物学的機能衰退自体を意味するのに対して、後者はおもに生命の終わりまで何ができたかといった価値の概念を内包している。平均寿命が高度に伸びた現在、老年学の目標はsuccessful agingの達成にあるといっても過言ではない。言い替えば、今後重要なのは「寿命」(life span)の延長ではなく、「健康期間」(health span)の増大であるといえよう。そしてそのためには、老年者の「健康」を総

合的な機能の面から客観的に評価する方法を確立し、かつそれを、ライフスタイル、すなわち生活習慣、自然環境、心理的、社会的背景の中で捉えてゆく視点が重要である。従来の「成人病検診」が、潜在病変を検出し治療することによって寿命を延長させることを目的としたのに対し、「老人検診」の目標は、老年者の機能を包括的に評価することによって、老年者の「健康」な期間を可能な限り延長させることにある。

かつて病気は、病院を訪れてくる患者を中心に、病院や研究室の中でのみ研究されていた。しかし、医学が本当に健康な老後を目指すためには、障害と慢性疾患をかかえながら人生の最後の過程を完成させている老人たちの、生活の場での問題点や実態を明らかにする必要がある。そのためには、医師や医学研究者が直接、地域に出てゆき、そこで生活するありのままの老人と医学的な対応をしてゆく中で、おのおの異なる生活習慣、心理的、社会的背景、自然環境などという枠の中でそれらが老化に及ぼす影響をもう一度捉えなおしてゆくという、文化人類学的視点が重要である。

以上の趣旨にもとづいて、私たちは、高知県香北町の地域在住老年者を対象に“老人検診”を開始し、老人の健康度の実態を明らかにしてきた。その結果、香北町では75歳以上の約3割、85歳を越えると半数以上の人、人の手を借りなければ日常生活が営めない状態にあることが判明した。

一方、世界には古くから長寿部落と言いつけられる地域が3カ所知られている。カラコラムのフンザ地域、アンデス山脈のヴィルカバンバ地方、それにソ連領コーカサスであり、不思議なことにこれらの地域はすべて標高1000メートル以上の高地にある。

とりわけフンザは、パキスタンの北東部、インダス川の源流をおりなすフンザ溪谷の北部一帯をさし、その豊饒な地帯に古くから農

業が発達し、アレキサンダー遠征軍の末裔が数個村に分かれて住み着いて隆盛したとも伝えられている。標高2500メートル、ヒマラヤ山脈の西端、真っ白な氷河を抱いた7000メートル級のカラコラム山群に囲まれ、緑豊かな畑とポプラが群生し、春ともなれば桜を思わせる杏の花が一面に咲きほこる里、夏にはその甘い実がたわわに実る桃源境として、古くから探検家達の憧れの地でもあった。豊かな流れをたたえたフンザ溪谷から水を得、ヒマラヤの高峰を背に南面に開けているために日当たりもよく、土地は肥沃で、古来より世界でも稀な不老長寿の里として語り継がれてきている。

最近、これらの地域の戸籍が不十分であることから、長寿そのものは疑問視されているが、フンザに住む老年者の実態は明らかでない。

本調査の目的は、現在の日本の老人の実状を視点の基礎に据え、また香北町の老人検診で得られた実績をもとに、医師および医学研究者をカラコラムに派遣し、健康の背景となる生活様式、食習慣、文化的側面の実態を明らかにしようとするものである。

考 察

本調査で得られた成果については、隊員が分担して、『ヒマラヤ学誌第3号』に報告したとおりである。

約1カ月にわたる調査行は、私たちにとって、一つの学問的探検であった。「老化」という、一種捉えどころのない大きな問題をかかえて、私たちは、フンザ・カラコラムから中国の西域にかけての辺境を旅してきた。この地域は、地理的には辺境といっても、現在では、多くの外国人旅行者が入っている。彼らが、名所を眺め、旧跡を訪ねている間に、私たちは、地域の住民との医学的な触れ合いを通じて、「老化」を考え続けてきた。

フンザには、古来「長寿の地域である」と

いう伝説が伝わっているだけで、その実態については、ほとんど知られていない。フンザの老年者が実際にどのような生活を営み、何を考え、どれほど健康であるのか、これら具体的なことはすべて空白であった。何をもち「長寿」というのかという定義すら曖昧なままに、伝説は語り継がれてきた。私たちがはるばるフンザを訪れたのは、フンザの老人が「長寿であるか否か」を性急に検証するためでない。私たちが目指したものは、実際の老人と医学的な交わりをしてゆく過程で、長寿伝説が生まれた背景を探り、それらが、実際に生活している個々の老年者の「老化」といかに関連し合っているかということである。すなわち、私たちの仮説は、「老化」には、生物学的現象とはまた別に、その集団もしくは個人のおかれている文化の背景や価値観、自然環境などが大きく関連しているはずである、というものであった。

フンザはまことに美しい風土に恵まれた地である。真っ青な空のもと、白銀の山々にかこまれた、緑なすオアシス、たわわに実る麦畑で、住民たちはのびのびと刈入れの作業にいそしんでいた。自給自足の農業を営んでいる彼らは、たしかに平和そうにみえる。ほとんどの老人が実際に元気に働いており、同年輩の日本人老年者に較べると、足腰や運動能力は格段に優れていた。まだ西洋的金銭経済の波が押し寄せてはいない、パスやシムシャルの村ではとりわけ、人々は平和で幸福そうにみえた。近代文明の開花は、「豊かな老後」の、むしろアンチテーゼのようにさえ思われた。

この調査行を通じて、私たちはさまざまなことを体験し、多くのことを教えられた。「老化」というテーマをもって、異なる文化と接してきた私たちが、いま痛切に感じていることは、「現代医学」という一つのパラダイム（基本的な学問の枠組み）に対する根元的な疑問である。

現代の医学は、全人類に普遍的な原理、すなわち遺伝子や細胞内のメカニズムという共通の因子で、人類の病気を解決しようという方向に向かっている。人間の老化についても、同じ現代医学のパラダイムの中で、主として生物学的側面から位置づけようとする傾向が大勢をしめている。人間の老化の形態は、すでに遺伝子の中にあらかじめプログラムされている、といった老化説がこのような系譜に属している。個人の老化も、身体的な面のみが語られ、民族の差や文化の影響はあまり取り上げられていない。たとえ文化が問題にされる場合があっても、それは決まって、衛生環境や医療の整備、環境の汚染といったように、直接に目に見える形で身体に影響する面のみが取り上げられ、考察されてきたに過ぎなかった。

しかし、地球上の人類は、すべてが単一の集団として生きているのではない。それは、数多くの民族に分かれて生活している。その民族を特徴づけるものが、民族固有の価値観であり、それは文化とよばれている。文化は、世代から世代へと学習という形をとりながら伝承されていくのであって、遺伝子の法則によって継承されるものではない。

「古い」というもののあり方が豊かなものであるか、そうでないかは、おそらくこの文化と密接な関連をもっている。何故ならば、「老化のありかた」は、純粋に生物学的老化現象であるのと同時に、人間が営む文化の中のひとつの価値観の現れともいえるからである。この頃、老化を語る場合、必ず「生きがい」やQuality of Life（生活の質）が問題にされる。これらは、まさに価値観の問題である。

文化という、人間の価値の体系は、全人類に普遍的に共通しているのではない。それは集団ごとに違っているものである。しかも、この価値観の相違は、なにも民族間だけでなく、地域共同体や各家庭、あるいは個人によっても異なるであろう。

それでは、この価値の体系は、身体的な面とは別個のものであるかといえそうではない。人間は、自分の身体的病気を苦にして、自らの価値体系を否定し自殺する場合もある。あるいは、長年連れ添った老妻に死なれて、それまでは健康だった夫が、急速に弱って寝たきりとなることも、現代社会では珍しいことではない。文化や環境が、「老い」の価値観に投影し、さらに個人の身体にも影響を与える。すなわち、文化の相違やそれを取りまく自然環境は、身体的老化現象にも多大な影響を与えているのである。

西洋合理主義の系譜を汲む現在の分析医学的パラダイムだけでは、「老化」の問題は解決できないだろう。現在の科学的手法の上で、新たな医学の「パラダイム」を創り出す必要がある。その一つの試みが、文化人類学的視点にもとづいたフィールド医学である。しかし、それはまだ緒についたばかりである。

「老化」を探求してゆく道は、まだまだ果てしなく続くであろう。若い学徒たちは、今回の調査行を通じて、文化と老化に関する結論的知識を学んだのではない。未知なる知識の獲得の仕方を学んだのである。未知への探求は、これからもまだ不安と苦難の連続であろう。しかし、その探求があくまで未知な領域だからこそ、それは科学的探検であり、そのような営為こそ本当の人間の喜びがあるのではなかろうか。

第2次フンザ・カラコラム 医学学術調査隊

期 間：1992年8月7日～9月7日

隊員構成：

隊長：奥宮 清人 (32歳)
高知医科大学老年病科医員
(老年病学、神経内科学)

秘書長：宮本 寛 (29歳)
高知医科大学第5年次学生
隊 員：日上 耕司 (32歳)
京都大学霊長類研究所
心理部門研究員 (心理学)
杉江 知治 (30歳)
京都大学医学部大学院生
(外科学)
月原 敏博 (29歳)
京都大学文学部大学院生
(人文地理学)
宮本 千草 (26歳)
内田 一茂 (25歳)
高知医科大学第一内科医員
利岡ひとみ (24歳)
元兵庫県立塚口病院看護婦
松本 一宏 (23歳)
高知医科大学第5年次学生
和田 泰三 (22歳)
高知医科大学第4年次学生
辻 有子 (24歳)
高知医科大学第4年次学生
石根 昌幸 (22歳)
高知医科大学第1年次学生

趣 旨

私たちは高齢化社会において、寿命の延長よりも寿命の内容つまり健康期間の増大の方が重要であり、更に、生活の場と老化の関わりを見直すため文化人類学的研究が必要であるという観点にたち、1991年に世界3大長寿地域の一つといわれるフンザの老人検診をはじめとする調査、研究を行ってきた(詳細は第1次カラコラム医学学術調査隊報告書高知新聞社刊「長寿伝説の里」を参照されたし)。前回の調査において私たちは、フンザ地方の(1)カリマバード(2)グルミット(3)パス(4)シムシャールの4カ村にて老人検診を実施した。結果は、下肢の運動機能、姿勢反射、手指の巧緻運動などは、上の(1)カリマバード

から(4)シムシャールに行くに従って成績が優れていた。逆に成人病の敵と考えられている脂肪は(4)から(1)に向かって高くなる事実を明らかにした。私たちは、この原因の一つは西洋文明の浸透度ではないかという結論に達した。私たちの目からみて西洋文明の浸透度は(1)カリマバードにてもっとも高く、(4)シムシャールに行くに従って低くなる。またおもしろいことに主観的幸福度については、労働環境が悪いはずのシムシャールの方が高く、西洋文明が浸透し肉体的労働が減りつつあるはずのカリマバードの方が低いのである。

以上のことより西洋文明の浸透度が深くなれば、肉体的労働は減り身体に脂肪を蓄積させるが、運動能力など日常生活に関する基本的な能力は低下させると考えられる。

また血圧と年齢の相関関係をみると、カリマバード、グルミットでは相関がみられるが、パス、シムシャールでは相関がみられない。現在地球上で血圧と年齢が相関しない地域は、食塩摂取量が著しく低い一部の未開地域だけしか報告されていない。しかしシムシャールが特に塩分摂取量が著しく低いということもないのである。そこでもし西洋文明の浸透度に影響されると仮定するならば、西洋文明が浸透するに従って様々な道具や器械を利用するようになり運動量が減ったためと考えられた。しかしこの事実、西洋文明の浸透度という一つの言葉だけで片付けられてしまう問題ではなく、いずれより具体的な一因を示さなければならぬであろう。

今回の調査は前年度の疑問点に答えるべく組織されたものであり、一つには上の仮説が正しいのかどうかを解明すべく前年度の調査では不十分であった検査、24時間血圧計、採血、蓄尿、施療を行い、より多くのデータを集め一層深い医学的アプローチを試みた。第2には前年度の調査では上部消化管の不定愁訴を訴えるものが圧倒的に多かったのに対

し、これが本当に器質的疾患に關与しているものなのか否かを明らかにすることにあつた。第3に私たちが前年度測定した主観的幸福度について、私たちの幸福感とどの様な差異が存在するのか。第4にできるだけ1カ所に定住し、より多くの人的交流をはかるよう家庭訪問、面接、往診などを通じて、彼らの生活習慣をはじめとする彼らを取り巻く環境因子はどうなっているのか、生活の場をより深く調査し、老化や幸福との関係を解き明かしたい、さらには2名の隊員を1年間滞在させ、短期滞在では解決できない生活に密着した問題をも観察することとした。

研究目的

パキスタン国カラコラム地方にて、前年度にひき続き住民の健康度の調査を行い、疫学的かつ地理病理学的に調査するとともに、前回不十分であった彼らの生活環境やライフスタイル、社会的背景などの老化に及ぼす環境因子を人文科学的にさらに深く解明することを目的とした。

計画内容

1. 調査隊はヒマラヤ高地に属するパキスタン国カラコラム地方のグルミットにおいて、前年度の老人検診でできなかった希望者に対する採血、検尿、運動量の測定を行い、前年度の結果とあわせて老化という問題により深い医学的アプローチを行う。
2. 前年度の調査で最も多かった上部消化器に対する不定愁訴が、本当に器質的疾患によるものなのかを、希望者に対して胃カメラを用いて解明する。
3. 家庭訪問などを通じ、彼らのライフスタイルなど医学以外の老化に与える影響を考察する。
4. パキスタン国医療衛生機関、アガ・カーン財団等の協力のもとに実施する本医学

調査を通じて、当該地域に居住する老人との友好関係を深める。

5. 上述の調査ののち、宮本 寛、宮本千草 2名の隊員を1年間カラコラム地方へ定住させることにより、彼らの幸福感、生活習慣、社会的背景など短期間の調査では明らかにできない環境因子の解明を行う。

南米・アンデス地域医学調査

期 間：1992年12月6日～1993年1月10日

隊員構成：

隊長：松林 公蔵

高知医大老年病科・講師

副隊長：瀬戸 嗣郎

島根医大小児科・講師

秘書長：足立みなみ

京大精神科・技官

隊 員：木村 茂昭

高知医大老年病科大学院生

牛田 美幸

高知医大小児科大学院生

福崎 賢治

鹿児島短大・講師

古川 彰

中京大学・助教授

高井 正成

京都大学霊長類研究所

特別研究員

中平真理子

近森病院薬剤部長

濱田 和子

近森病院集中治療部主任看護婦

細川 公子

高知医大栄養管理室主任

和田 泰三

高知医大4年次学生

中野 令恵

高知医大4年次学生

石根 昌幸

高知医大2年次学生

報道隊員：依光 隆明

高知新聞社会部記者

背 景

ヴィルカバンバとは、インカの言葉ケチュア語で“聖なる谷”という意味である。標高は1500メートル、アンデス山脈の一峡谷をなしている。気温は、年間を通して20度前後で、緑豊かな穏和で美しい土地である。

1970年に、エクアドル国立統計研究所と心臓学者サルバドル博士が協力して実施した国勢調査によると、ヴィルカバンバの総人口は819人、そのうち100歳以上の老人が、実に9人存在していたという。人口が少ないので、単純計算にはやや問題はあるものの、標準化して考えてみると、ヴィルカバンバでは、人口10万人に対して、1100人の百歳老人がいることになる。ちなみに、日本の長寿県とされる沖縄では、百歳老人の割合は、人口10万人に対して14.6人、高知では8.3人である（平成2年度）。いかに、ヴィルカバンバに百歳老人が多いとされているかがわかる。サルバドル博士たちの人口調査は、教会の洗礼記録と係累からの聞き取りであるが、年齢の絶対値については正確でない可能性があるという博士自身も述べており、年齢調査の困難性を物語っている。

その後の、いくつかの調査によっても、厳正な絶対年齢には問題を残すものの、ヴィルカバンバは他の地域に較べて、格段に元気な高齢者が多いという事実は否定されていないようである。

しかし、これらの報告は、主として年齢とライフスタイルに関する聞き取り調査、それに医学的観察からなっており、ヴィルカバン

バの高齢者たちの、具体的な健康度に関しては明らかにされていない。

今回の調査の目的は、今までに何度も試みられてきた長寿の検証ではなく、長寿伝説の伝わるヴィルカバンバの老人を実際に診察し、かつ、客観的な機能を評価し、その結果をライフスタイルとの関連で比較検討することにあつた。

成人班受診者の概要

成人班の検診受診者総数は348名で、男：女=119：229と女性が男性を上回っていた。申告年齢は17歳から120歳におよび、平均年齢は57±19歳である。申告年齢階層別受診者の数と、その割合を表1に示した。ヴィルカバンバ地区の総人口は、だいたい1000人ぐらいと考えられるので、おおよそ成人の半数以上は受診しているものと推定される。そのうち60歳以上の受診者は183名（54%）であり、半数以上を占めている。年齢階層別では、60歳代が最も多く、ついで70歳代、50歳代の順で、80歳代も8%におよんでいる。自称100歳以上は3名受診しており、すべて男性であった。この事実からも、ヴィルカバンバでは現在なお、少なくとも高齢者の占める割合は少なくない。

75歳以上の老人の体質

75歳以上の老人の体質について、肥満度と収縮期血圧（高い方の血圧）、拡張期血圧（低い方の血圧）を男女別に平均をとり、ヴィルカバンバと高知県香北町で比較したのが表2である。

ヴィルカバンバと香北町に共通していることは、女性の方が血圧が高く、また肥満度が大きいという点である。肥満度は、男性では、ヴィルカバンバと香北町で差がないが、女性では、ヴィルカバンバの方が、香北町の老年女性よりも肥満している。

血圧については、男性では香北町とヴィル

表1. ヴィルカバンバ検診受診者の申告年齢別の頻度

年齢階層	人数	割合
総 員	348	(100%)

- 19 歳	7	(2%)
20 - 29 歳	32	(9%)
30 - 39 歳	30	(9%)
40 - 49 歳	40	(11%)
50 - 59 歳	55	(16%)
60 - 69 歳	85	(24%)
70 - 79 歳	62	(18%)
80 - 89 歳	27	(8%)
90 - 99 歳	8	(3%)
100 歳 -	3	(1%)

カバンバで差がなく、女性ではヴィルカバンバの方が高い。しかし、香北町では約1/3の人が降圧剤を服用しており、ヴィルカバンバで降圧剤を服用している人は皆無なので、降圧剤の影響を考慮する必要がある。

神経行動機能の評価

神経行動機能とは、諸種の作業や歩行、手足を使った運動などが、どれほど俊敏であるか、あるいは安定しているかなどの、主として運動機能を評価するものである。

老年者の“機能”の評価は、香北町健康長寿検診と同じ方法を用いて実施した。機能評価には、以下の4種類の方法を用いた。

- (1) コンピュータテスト：視空間認知能力と反射神経を評価（数値が高い方が優れている）
- (2) ボタンテスト：指先の細かい運動機能を評価（数値が低い方が優れている）
- (3) Up & Goテスト：立居ふるまいの安定

表2. 75歳以上の老年者の男女比較
—ヴィルカバンバ地域と高知県香北町—

75歳以上の老年者の男女比較(ヴィルカバンバ地域)			
	男 (41)	女 (39)	P-value
年齢	84.0±10.1	81.4±8.3	NS
BMI	21.6±3.2	23.7±3.9	<0.01
収縮期血圧	139±25	158±23	<0.01
拡張期血圧	78±12	87±11	<0.01

75歳以上の老年者の男女比較(香北町)			
	男 (140)	女 (196)	P-value
年齢	79.4±5.6	78.6±4.8	NS
BMI	21.5±2.9	22.4±4.3	<0.05
収縮期血圧	141±22	149±21	<0.01
拡張期血圧	79±11	83±12	<0.01

BMI : Body Mass Index (肥満度)

度と歩行の俊敏性を評価 (数値が低い方が優れている)

(4) Functional Reach : 姿勢の安定度とからだの柔軟性を評価 (数値が高い方が優れている)

ヴィルカバンバと香北町の75歳以上の老年者で、各種神経行動機能の結果を比較したのが表3である。

ヴィルカバンバと香北町で共通していることは、ボタンは女性がうまく、Up & Goは男性が優れていることである。一方、ヴィルカバンバと香北町との比較では、コンピュータ、ボタン、Up & Goは、香北町の老人の方が優れている。身体の柔軟性と、姿勢の安定度

表3. 75歳以上の老年者の神経行動機能に関する男女比較
—ヴィルカバンバ地域と高知県香北町—

75歳以上の老年者の男女比較(ヴィルカバンバ地域)			
	男 (41)	女 (39)	P-value
コンピュータ	842±590	1047±495	NS
ボタンテスト	32.3±17.7	22.4±9.5	<0.01
Up & Go	15.1±6.4	17.2±13.4	NS
F. Reach	15.1±7.9	13.7±5.5	NS

75歳以上の老年者の男女比較(香北町)			
	男 (140)	女 (196)	P-value
コンピュータ	1830±615	1958±564	<0.05
ボタンテスト	21.8±15.7	16.1±9.1	<0.01
Up & Go	14.1±4.4	16.0±6.1	<0.01
F. Reach	12.1±12.6	10.5±10.9	NS

表4. 75歳以上の老年者の男女比較(フンザ)

	男 (21)	女 (8)	P-value
コンピュータ	373±597	71±159	<0.05
ボタンテスト	8.2±2.0	11.4±3.8	<0.01
Up & Go	10.0±2.0	10.3±1.4	<0.01

は、ヴィルカバンバの方が優れていた。

ちなみに、1991年度に調査したフンザ地域の75歳以上の神経行動機能を表4に示してみ

よう。

フンザでは、コンピュータは別として、手先の細かい運動や立居ふるまい、歩行の俊敏性では、圧倒的に香北町の老年者よりも優れていることがわかる。

すなわち、今回調査した神経行動機能の結果だけから見ると、フンザがとびぬけて成績がよく、ついで香北町、そしてヴィルカバンバの順になる。

時代の変化

今回の機能検診の結果だけから判断すると、ヴィルカバンバの老人たちの健康度は、香北町のそれよりも低かった。伝説的に長寿とされているヴィルカバンバの結果は、私たちの予想とは異なっていた。前回のフンザの老年者の成績があまりにも優れていたために、ヴィルカバンバでもそうであろうと予測していたからである。この事実は、いったい何を物語っているのだろう。

ヴィルカバンバが長寿地域として有名になったのは1960年代である。それまでは、インカの時代からずっとヴィルカバンバは隔絶された地域であった。車が通る道路とてなく、村人は日用品を購入するために、山道をロハまで徒歩で通っていたのであろう。

1970年代になって、多くの外国人がその地を訪れるようになる。桃源郷にあこがれて、ヴィルカバンバに住み着いた外国人も少なくなかったであろう。事実、私たちが世話になった、通訳のジョイ、ホテルの主人、教会の神父さん、デル・ポゾ先生などもみな、この地にあこがれ、近年になって移り住んできた人ばかりである。1970年、リーフ教授たちがヴィルカバンバを訪れたときも、ほこり深いでこぼこ道を車で3時間ほどかけてやってきている。しかし時代がくだるにつれ、道路は次第に拡張され、現在では、ロハ市までバスが通うアスファルトの道路が続いている。これら、近代文明の流入が、ヴィルカバンバの

住人たちのライフスタイルを変えていったことは想像にかたくない。

百歳老人が話題となりいろいろな調査が行われた1970年の時点では、現在75歳の老人もまだ50歳であった。彼らは、その初老期の過程で、近代文明の影響を受けているにちがいない。1970年においてすでに75歳の人は、現在生きていれば百歳になろうとしていることになる。

私たちが検診の過程で、80歳や90歳以上の老人と、60歳代あるいは中・壮年者では、あたかも人種が違つように、体格が異なっていることに気付いた。90歳以上の超高齢者は体格もしまつてそれなりにかくしゃくとしているが、中・壮年から初老期の人は肥満傾向がめだつことである。受診者の年齢階層別の高コレステロール血症者の頻度をみても、40歳代から60歳代にかけて、コレステロールが高い人の頻度が高く、70歳-80歳代では15%前後、90歳以上ではコレステロールの高い人は皆無である。

ここ30年程のあいだの近代文明の流入とともに、車の普及によって運動量が減り、外国人と対比することによっての貧困感とストレスの増加、ゆるやかに変化してゆく食生活など、これらの要因が、かつて、うるわしい環境に閉ざされて自給自足の生活がはぐくんだ長寿地域の実態を、徐々ながらも、確実に変えていっている可能性も否定できない。

もうひとつの見方—“のんびり元気”

人文班の古川隊員が、おもしろいことをいっていた。

「ヴィルカバンバの老人たちは“のんびり元気”なのではないか」

私たちが、「ヴィルカバンバの老人たちは、思ったほど元気ではなかった」と結論をくだした「健康度」の評価法は、コンピュータゲーム、ボタンテスト、Up & Goテストのいずれもが、時間を測定する評価法である。もし

梅里雪山学術登山

酒井敏明

も彼らに、“急ぐ”という概念がとほしいとすれば、この方法は「健康度」の評価法としてふさわしくないことになる。事実、時間の制限がないFunctional Reachでは、ヴィルカバンバの高齢者は優れた成績を示している。

確かに、私たちの検診中の印象で、高齢者とりわけ超高齢者は、動作はゆったりしているが、動きは確実にかくしゃくとしている。

「やはり、元気だなあ」といい合ったものだった。

小児検診においても、時間を競う運動能力評価法が、なかなか理解されなかったという。学童の運動能力を測るための方法も、多くの場合、動作の俊敏性という時間の要素を加味した評価法が用いられている。

ヴィルカバンバのような所では、速さを競うという方法自体が、問題かもしれない。生活のうえで、競う、という必要がないのだ。ある動作の時間を測定するということが自体が、意味をなさない可能性もある。

産業革命以来、「より速く、より多くのことを成し遂げる」ということが、私たちを含めた西欧近代合理主義の価値観の一つではあったが、迅速大量生産という概念自体が近年みなおされてきている。

「時間がかかっても、より確実に」という概念も重要な価値である。

ひよっとすると、ヴィルカバンバの老人たちは、私たちの「健康度」評価法では、評価しきれなかった“のんびり元気”であった可能性もある。

フンザとの対比

ヴィルカバンバとフンザは、世界の伝説的長寿郷としてよく知られている。同じように、長寿郷とよばれるこの二つの地域の老年者の「健康度」が、なぜこれほどちがうのであろうか。

フンザは、6000メートル級の山々と氷河の

おりなす断崖絶壁にかこまれた、標高2500メートルのオアシスである。オアシスといっても、牧草地を含めた生活圏内をつなぐ農道は、時には険しい谷に降り、がけを高巻いて続いている。人々は日々の生活のために、これらを日に何度も通ることを余儀なくされているだろう。足腰の動きは、必然的に俊敏さを要求される。

またフンザは、秋から冬にかけては厳しい雪の季節で、農作業や遊牧は季節めぐりに追われている。田舎では万年一日のごとく、年単位の生活はのんびりしているものの、四季のめぐりには敏感であろう。当然、“急ぐ”という感覚にはなじんでいるものと思われる。フンザの老人たちが、時間を測定する「健康度」の指標において、抜群の成績を示した背景には、このような事情があるのかもしれない。

一方、ヴィルカバンバは、標高1500メートルの高原平野といってもよいだろう。老人たちの働く場所は、この平原圏内が中心と考えられる。生活圏はきわめて狭い。より遠出をするときは、バスを利用するだろう。ゆっくりと確実に歩ける限り、さほどの俊敏性は生活上要求されない。

また、ヴィルカバンバは一年中20度前後の穏和な気候帯にある。農作業についても、季節や時間に追われるということが少ないかもしれない。

また、キリスト教の陰に深く底流するインカの太陽信仰という文化のありかたが、闘争的なイスラム文化とはちがった生活形態、価値観をはぐくんできたのかもしれない。

たとえ、同じ健康で長寿な老人でも、ひとたび環境や文化が異なれば、その「健康度」のありかたもおのずから異なっている可能性を痛感した。

はじめに

梅里雪山計画は1988年秋に先遣隊を現地に送り出してから91年春の捜索調査隊帰国までに2年10カ月の日時を要した。第2次学術登山隊の悲劇の遭難のあと、ただちに事故調査委員会を作って事故原因の解明に努めたが、残念ながら調査はまだ完結するに至っていない。その意味では、この計画はまだ終了したわけではない。しかし、これまでの事実経過を『時報』の誌上に記録することは必要であり、その時期も到来しているものと考えられる。

すでに、『梅里雪山事故調査報告書』(92年1月30日刊行)と『日中合同梅里雪山学術登山隊報告書』(92年10月31日刊行)に同種の記述があるので、本稿もこの両書との重複は免れないところである。以下の各章は両報告書に発表された文章から適切なものを選び出して配列し、これに若干手直しを加えたものが多く、今回新たに書き下ろしたものは一部に留まることを、あらかじめお断りしておかねばならない。

1. 計画の発端からAACKが実施を決定するまで

社団法人京都大学学士山岳会(以下AACKと略す)が梅里雪山への遠征を最初に計画したのは、1980年のことといってよい。当時、京都大学では理学部の植物や魚類の研究者グループが個別に雲南省に学術代表団を派遣するなど、主に動物や植物の研究者間に雲南省での日中共同学術研究の機運が高まりつつあった。また、京大探検部内には以前から雲南への遠征を志すグループがあったが、まだ計

画実現の可能性を探っている段階であった。そこへ、学術代表団派遣の世話役をした日中友好協会会員の呼びかけがあり、理学部の研究者グループとAACKが合同で本格的学術調査隊を雲南へ派遣しようという計画がもちあがった。そして、1980年の10月には、その派遣母体となる京都日中学術交流懇談会が結成され、横断山脈の未踏峰登頂を含めた学術調査をおこなうための、具体的計画が立案されることになる。その結果、AACKの元会長四手井綱英を隊長とする、植物班、昆虫班、魚類班、霊長類班の各数名、および登山班約10名の日本側隊員に、中国側隊員を加えた日中共同雲南学術調査計画ができ上がり、中国科学院との交渉が進められた。

この調査計画のなかで、AACKは主に登山班を担当し、横断山脈の最高峰である梅里雪山の登頂と、頂上へ至る経路での学術調査をおこなうことになっていた。当時、この山域に関する情報は非常に少なく、登攀計画はほとんどキングドン・ウォードの『青いケシの国』とJ・F・ロックの*The ancient Na-Ki kingdom of South West China*にある、写真と記述だけを頼りに立案せねばならなかった。梅里雪山という山名はまだ知られておらず、ウォードやロックの書中にある「カ・グループ」または「カワ・カルポ」という名で呼んでいた。登攀ルートも現在のメコン河側のルートではなく、ウォードやロックの記述にあるドラカラ峠を越えて、サルウィン河側の氷河を登るルートを予定していた。

中国科学院との交渉は、秋に来日した中国科学院外事局副局长や、その後訪中した理学部植物学教室の岩槻氏などを通じておこなわ

れたが、1981年1月に、中国側から、この計画は規模が大きすぎて対応する中国側研究者がそろわないこと、昆明と大理周辺以外はまだ外国人の受け入れ体制がないことなどの理由から、計画の早期実現は困難であるとの連絡が入り、この計画は頓挫することになる。京都日中学術交流懇談会の活動は、その後も研究者を中心にして続けられ、数次にわたる調査団が派遣されたが、登山班が計画していた徳欽周辺の横断山脈は、まだ当分外国人の入域は困難であろうとのことで、AACKの梅里雪山登山計画は、この時点から長い休眠に入るようになった。

その後の紆余曲折を整理して年表にまとめると、次のようになる。

年表 [梅里雪山学術登山計画の発端から実施決定まで]

1984年2月26日 京都大学探検部部長高谷好一、広瀬顕連名で梅里雪山峰の登山許可申請を中国登山協会に提出する。

[計画内容] 隊長広瀬 顕、隊員9名、期間1984年10月1日～11月30日 この時点では、玉龍雪山までが開放されており、梅里雪山は未開放地区に入っていた。

1985年7月～9月 京都大学探検部・九州青藏高原登山研究会合同の青藏高原揚子江源流域・丹古拉山脈学術登山隊が各拉丹冬雪山(6621m)へ遠征。同峰の初登頂。長江源流域を初踏査し、多くの学術調査活動をおこなう。

このとき、次の目標として梅里雪山峰が話題になった。

1986年8月 日本ヒマラヤ協会柴田金之助氏同峰の登山許可申請を中国登山協会へ提出。

[計画内容] 隊長山森欽一、隊員8名、期間1986年9月29日～11月17日許可下りず。

1987年4月 国際交流協会吉田與和氏・松原英夫・倉智清司らが梅里雪山登山の具体的打ち合せを活発におこなう。

5月 上越山岳協会、梅里雪山峰に偵察隊を派遣。

1987年8月～9月 上越山岳協会、同峰に本隊を派遣。明永氷河側から取り付いて約5100m付近に達したが、登頂断念。

1987年10月 とりあえず「国際交流協会倉智清司」の名前で、梅里雪山峰の登山許可申請を中国登山協会に提出。

[計画内容] 1988年春 偵察

1988年9月～11月 本隊

1987年10月 探検部が主体となって推進することで検討を開始する。

1988年1月30日 国際交流協会吉田與和、倉智清司宛に中国登山協会より許可が下りる。期間1988年9月～11月

1988年3月 明治学院大学も中国国際体育旅游公司より同峰の許可を取得する。

1988年3月22日 京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊交渉団・日中友好街道記念植樹訪中団(四手井綱英・岩坪五郎・吉田與和)らと倉智清司が訪中。

北京にて、日中友好梅里雪山登山隊実行委員会・雲南省登山協会・中国登山協会の三者で、ナムナニに続く第2次日中合同登山として実行する方向で協議し、「備忘録」に調印。

1988年4月 前年10月より探検部が主体となって推進するとして検討を進めてきたが、それを断念することになった。

1988年5月 探検部は主催を断念し、その後AACKに引き継ぎたいと提案した。両者が協議した結果、AACKが中心になり主催することになる。この時の出席者は、AACK:岩坪五郎・中島暢太郎・能田 成・佐々木哲男・吹田啓一郎他、京大探検部:松原正毅・広瀬 顕・小林正寛・舟川晋也他、

国際交流協会:吉田與和・倉智清司などであった。

1988年5月22日 AACK理事会および総会において梅里雪山計画の実施を決定する。

1988年5月24日 AACKヒマラヤ委員会において、計画の推進機関として雲南小委員会の設置を決定する。

この経過に見られるように、AACKは1988年5月、別に進めていたヒマラヤ医学学術調査計画と同時並行のかたちで、梅里の登山を日中合同プロジェクトとして実施すると決定したのである。

2. 1988年の先遣隊によるルート偵察と踏査について

2.1. 先遣隊出発までの状況

AACKでは、理事会および総会で日中合同梅里計画の実施を決定するとただちに雲南小委員会(岩坪五郎委員長)を発足させた。実行計画を練り上げるために、1988年6月早々から井上治郎らを中心に計画の推進役を務める人物(登攀隊長)の人選をはじめ。井上は甲斐邦男と森本陸世に打診するが二人ともに参加困難との返事で、横山宏太郎に登攀隊長を引き受けるよう要請した。横山は勤務先の事情もあって容易に同意できる状況にはなかったが参加に向けて努力することになった。

隊の構成は最終的には次のとおりとなり、同年10月中旬から11月上旬にかけて現地を踏査し、道路輸送事情を調査、登攀可能なルートを探ることになった。

この地域についてはすでにかなり文献による調査がおこなわれていたが、梅里雪山峰と周辺の地形についてはなお未解明なところが多かった。また現地の事情もはっきりしなかった。そこで上越山岳協会隊の関係者から写真や情報を提供していただく一方、衛星画像

の解析などにより地形、氷河に関する情報を得て、これらをもとに計画立案を進めた。先遣隊の構成は次のとおりである。

[日本側]

隊長 横山宏太郎 (41歳)
秘書長 倉智 清司 (39歳)
隊員 米谷 佳晃 (30歳)
広瀬 顕 (25歳)
児玉 裕介 (21歳)

[中国側]

隊長 王 振華 (53歳)
秘書長 張 俊 (31歳)
隊員 金 俊喜 (33歳)
孫 維琦 (28歳)
李 之雲 (32歳)

通 訊 王 建華 (35歳)

(他に会員松原英夫が産経新聞社より報道の資格で派遣されて同行した)

2.2. 先遣隊の行動概要

先遣隊の中国における行動日程を次に示す。横山は勤務先の都合で皆より遅れて出発し、現地で合流後早い日に梅里を去らねばならなかったもので、別記してある。

10月13日 昆明発 → 大理着
14日 大理発 → 中甸着 (横山)
15日 中甸発 → 徳欽着 大阪 → 北京
16日 徳欽滞在 北京 → 昆明
17日 〃 情報収集、斯農視察など 昆明 → 大理
18日 〃 大理 → 中甸
19日 〃 中甸 → 徳欽
20日 〃 徳欽
21日 徳欽発 → 捕村着 徳欽 → 捕村
22日 捕村発 → 斯農着 捕村 → 徳欽
23日 支拉山稜の3750m地点にBC建設 徳欽 → 中甸
24日 支拉山稜の4140m地点にC1設営 中甸 → 大理
25日～ 支拉山稜からの偵察活動
27日 最高到達高度は4350m 大理

28日 斯農滞在 昆明→北京
 30日 斯農発 徳欽へ 北京→東京
 11月1日～3日 白馬山口にて雲南側隊員の雪上訓練をおこなう
 11月 5日 徳欽発→中甸着
 9日 昆明着
 12日 昆明発 北京へ
 16日 北京発 大阪着

2. 3. 踏査の結果

先遣隊は当初、斯農方面と西当方面の両方から梅里雪山の登路の偵察をする予定であった。しかし、斯農村から森層堡氷河の谷に入って偵察した結果、同ルートがきわめて有望であるとの判断をもつにいたり、西当方面の偵察は中止し、氷雪技術の経験が浅い雲南隊員に対して白馬山口付近で雪上訓練をおこなひ、昆明に戻った。

偵察の結果、斯農よりシェンチェンバオ(森層堡)氷河末端付近にある放牧地(3800m)までは道があること、またこの放牧地はベースキャンプの場所として適することがわかった。

氷河上部の状態および氷河源流部から頂上へ続く山稜の偵察はズラ(支拉)山稜上からおこなった。シェンチェンバオ氷河から北東稜の稜線上に到達するのは比較的簡単にできるように見えた。

横山は現地滞在の日数が不足、実際の偵察行動には参加できなかった。

3. 登攀計画の策定と科学隊ヤルツァンポー大屈曲点踏査計画の推移について

1988年11月に帰国した先遣隊の報告を受けて、本格的な登山隊派遣の準備が始まった。中国側との協議を進めるうち、関西テレビ後援による学術考察隊の計画が浮上する。同時に京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊の本格的な準備が始まり、その第1次隊に参加する会員も大勢いる。三つの計画が同時に進行したので、AACK事務所は種々様々の事務を処

理し、会合に集まる会員たちで、活気にあふれた。物資の発注・調達・梱包・発送などに多忙をきわめる日々が続いた。

梅里雪山の登攀計画を中国側と協議しながら練り上げていたこの時期は、同時にAACKのヒマラヤ医学学術登山隊の先遣隊が目標をチベットから崑崙のムスターグ・アタに変更して出かけた時期であり、学術考察隊が中国の提携先を模索しながら、活動地域や経路について研究を続けた時期であった。CMAと雲南省の訪日代表団を迎えるなど、京都と北京および昆明との往来もすこぶる盛んであった。

この間の経緯の概略を表の形で示す。

1989年1月8日～15日、昆明にて学術考察隊(ヤルツァンポー大屈曲点の踏査)についての交渉をおこなう(佐々木、吉田)。

1989年1月 8月隊荷発送、9月先発出発、10月本隊出発として準備のスケジュールをたてる。

1989年2月 計画書の作成について登攀計画の素案を検討した。キャンプの配置案は次の通り。

BH	BC	C1	C2	
2250m	3800m	4500m	5000m	5200m
	C3	C4/C4	Summit	
	5800m	6000m	6740m	
	6000m	6400m		

日程は、BC以上55日、実働30日、行動予備10日、天気予備15日に、BCまでの往復24日を加え合計79日。

日本出発は先発9月上旬、本隊9月下旬を予定する。

先行荷揚げ隊を出すかどうか懸案となっていた。中国側と高所協力員で10～15人、日本側2人程度で、本隊に先行してBC-C1間の荷揚げをするという案が中国側から提示されていた。

日本側は基本的には合意していた。登頂予定ルートについて日中の合意が必要。

頂上付近の地形、特に北東稜と主稜線(瀾滄江・怒江分水嶺)のジャンクションについて日中の認識が異なっていた。日本側は頂上がジャンクションであると考えていたが、中国側は頂上から一段下がそれであると考えていた。このため日本側は北東稜に出て頂上へ至るルートを、中国側は主稜線のコルに出て頂上へ至るルートを考えていた。

1989年3月 科学隊の交渉のため、佐々木、倉智、福井氏(関西テレビ)北京および昆明を訪れる。

1989年4月 隊構成の中核をなすべき横山、倉智が京都付近在住でないため、米谷、近藤、中山が“中間管理職”として準備作業を推進することになった。先行荷揚げ隊について王振華案として、9月1日CMA隊現地入り、2週間協力員訓練、20日日本先発隊合流、10月1日C1建設の案が中国側から示された。隊荷の発送が1カ月前倒しになる、天候が悪いなど問題あり。

隊員訓練登山が話題になったが、時間的な余裕がなく結局実施されなかった。装備、食糧、梱包・輸送など、具体的に検討が進められた。

1989年4月15日～22日 CMA代表団(史占春、王鳳桐、王振華、汪鉄銘、趙建軍の5氏)訪日する。4月20日、日中合同梅里雪山峰学術登山隊合意書の調印式をおこなう。

4月29日～6月9日 京都大学第1次ヒマラヤ医学学術登山隊が崑崙西部のムスターグ・アタ山域で活動(松沢哲郎、瀬戸嗣郎、出水 明、中山茂樹、富永浩三、白沢あずみ、藤田耕史が参加)。ムスターグ・アタ峰(7546m)登頂。

1989年5月8日～7月5日 梅里雪山科学隊が雲南省北西部、四川省南部で活動。日本側は栗田靖之隊長、福井澄郎副隊長以下12名、中国側は王義昭隊長、陳尚仁連絡官以下7名。

1989年5月 学術登山隊の日本側隊員は決まる。

日程について検討。登山期間を9月から12月までの時期で設定する場合、遅いほど天候がよいが、12月に入ると白馬山口が雪で閉ざされることが多い。この時は帰路の確保を優先することになり、全員がBC以上で活動する時期を10月12日から11月15日とする案が作られた。

気象関係は近藤が中心になって資料整理、検討を進めていた。8月19日付資料によると「9、10月はモンスーンの影響が残るが、11月以降の天候は安定する。一方、気温は12月に入るまで下降を続ける。モンスーンが完全にあけて気温が下がりきる前の登山に有利な時期は、11月である」としている。徳欽の地上データ、1983年～88年の月別値、1930年～60年の平年値を用いて一般的な特性を見ている。日別値から9、10月の悪天の継続は2～3日から1週間と考えた。また、高層データと地上データの対比もおこなっている。

登攀ルートについては米谷が中心になって検討を進めていた。8月19日付資料では、問題になるところとして以下をあげている。

- (1) BC-C1間の下部アイスフォールを通過するルートの選定
- (2) C1のテント地の選定(偵察では確認できなかった)
- (3) C1-C2間の上部アイスフォールは支拉(ズラ)山稜からの遠望では通過可能とみていた。

(4)北東稜上の起伏が大きいこと、雪庇が複雑であることから、かなり時間がかかることを予想した。

(5)頂上直下の急傾斜部については、ルートは確認されておらず、近づいて可能性を探ることとしていた。

また、C2以上のルートの選定は、地形、北東稜の状態、氷河の状態をみて現地判断することとした。

7月24日～29日 雲南調印団(楊必育、陶文礼、李崇礼、取扎、楊荆舟、寸心維、孫蘭蘭、王鳳桐、王燕の9氏)京都を訪問、7月25日議定書調印式をおこなう。

1989年8月 張俊、王建華の両氏、細目打ち合せのため京都を訪問。

1989年8月 横山の日本出発が遅れることが確実となった。やむをえず、横山が隊に合流する予定の10月中旬までの間登攀隊長は近藤が代行することになった。

1989年9月 準備は全体に遅れ気味であったが、9月9日中国側先発隊が北京発、12日には日本側先発隊が大阪を発って海路、上海へ向かった。

1989年10月4日 本隊出発、14日横山出発。
11月25日横山帰国、30日本隊帰国。

4. 日中合同梅里雪山峰学術登山隊科学隊について

この科学隊(考察隊)は、第1次、第2次の学術登山隊とは、目的も、性格も、活動地域も異なるのであるが、AACKも中国側も、梅里雪山計画の一部を成す遠征隊と考えている。以下には、隊の構成と行動概要などについて、簡潔に記しておきたい。

4. 1. 交渉の経緯

この科学考察隊のアイデアは1988年の夏に生まれた。中国側との交渉は一進一退したが、議定書が調印されるまでの経緯は次のとおり

であった。

1988年8月 関西テレビ株式会社が本計画のスポンサーとなること決定。

1988年10月6日～17日 左右田総隊長、岩坪雲南委員長、吉田顧問、木下関西テレビ部長、栗田科学隊隊長が、昆明を訪れる。雲南省長および関係方面に協力を要請。

1988年10月18日 関西テレビ山口社長、大阪にて中国登山協会史占春主席に協力を依頼。

1988年10月21日 中国登山協会王鳳桐秘書長に協力依頼。

1988年11月11日 科学隊の計画書を中国登山協会と雲南省体育運動委員会に提出。この計画では、雲南省内では、独竜江、チベット自治区内ではヤルツァンポの屈曲点、墨脱、昌都を含む全行程96日間の計画であった。

1989年1月8日～15日 吉田、栗田、関西テレビの木下、福井(科学隊副隊長)の両氏、中国登山協会の王鳳桐氏と同道、昆明に行く。雲南省体育運動委員会が窓口となって、地質鉱山局、科学技術委員会、民族委員会、西南民族学院などの関係機関と協議。雲南省内の活動は保証するが、西藏自治区内での活動は、北京において交渉してもらいたいということとなった。

1989年2月3日 隊が調査活動において使用するパジェロ4台、マイクロバス1台が、天津港に陸揚げされた。

1989年3月5日 チベットにおいて、青年僧侶のデモが発生。騒乱事件となりラサに戒厳令発令。

1989年3月19日～31日 雲南省体育運動委員会から、中国側の協議はほぼまとまったから、最終打合わせのために要員の派遣が要請された。AACKは、福井、佐々木(AACK理事)、倉智(登山隊

秘書長)を昆明に派遣した。彼らは、北京において、チベット自治区のヤルツァンポ流域および墨脱への入域が困難になったと説明をうけた。しかし昌都への入域は可能とのことであった。昆明では、交渉も順調に推移し、彼らの帰国送別会が開かれた。その宴が終了したとき、中国側から、実は科学技術委員会が、植物の研究は認められないという態度を示しており、雲南省政府は許可が出せない状況であるという情報もたらされた。佐々木は、旅程の関係もあって22日、倉智は27日に帰国したが、福井は昆明に残り交渉にあたった。雲南側は、近日中に議定書の原稿を送ると約束したので、福井は、31日帰国した。

1989年4月7日～13日 吉田、王鳳桐の両氏が昆明を訪問した。二人は、科学委員会と接触し、雲南省外事弁公室主任の馮樹森氏とも接触して、科学技術委員会からは、今回の調査には参加しないが、反対はしないという了解をとりつけた。

1989年4月20日 京都において来日中の中国登山協会史占春主席らの一行との間で、梅里雪山の科学隊、登山隊に対する基本的合意書についての調印式がおこなわれた。本来、この合意書への調印は、雲南側の代表を交えておこなわれる予定であったが、雲南側が関係機関の間で合意ができていない事情もあって、雲南代表とは現地において、合意書を作ることとし、まずは中国登山協会との合意書に調印した。この結果、科学隊は、5月1日先発隊出発、5月8日本隊出発と決定された。

4. 2. 隊の構成

[日本側]

隊長 栗田 靖之 (49歳)
国立民族学博物館助教授

副隊長 福井 澄郎 (41歳)
関西テレビ第2報道部
秘書長 松原 秀夫 (36歳)
産経新聞社社会部記者
医師 山口 寿雄 (56歳)
大阪赤十字病院精神神経科医師
隊員 光田 重幸 (37歳)
同志社大学工学部講師
船原 尚武 (28歳)
神戸大学大学院自然科学研究科学生
月原 敏博 (26歳)
京都大学大学院文学研究科学生
石浜 宣夫 (25歳)
北海道大学大学院農学研究科学生
報道班 高岡 淳二 (44歳)
関西テレビ
老邑 俊男 (36歳)
関西テレビ
尾谷 牧夫 (31歳)
関西テレビ
梯 考春 (40歳)
産経新聞社写真部

[中国側]

隊長 王 義昭 (53歳)
雲南省地区地質調査隊副総工務師
連絡官 陳 尚仁 (51歳)
中国登山協会常務委員
張 俊 (33歳)
雲南省体育運動委員会
通訳 王 建華 (36歳)
雲南省昆明医学院講師
隊員 劉 剛 (32歳)
雲南省民族研究所助理研究員
尹 紹亭 (45歳)
雲南省民族博物館助理研究員
謝 沫華 (38歳)
雲南省民族博物館助理研究員
協力隊員 6名 (運転手)

4. 3. 行動概要

1989年5月8日から7月5日までの科学隊の中

国における行動の主なものを以下に記す。

- 5月 8日 大阪発 → 北京着
- 9日 故宮博物館見学
- 10日 北京発 → 昆明着
- 11日～25日 昆明に滞在、雲南省の関係各機関と協議をおこなう。地質関係、民族関係専門家や研究機関と会合をもち、その間に石林などを見学する。
北京では天安門で学生のハンストやデモがおこなわれ、20日には戒厳令が發布された。
- 26日 昆明発 → 大理着
- 27日 大理発 → 六庫着
- 28日 六庫滞在、歓迎宴
- 29日 六庫発 → 福貢着
- 30日 福貢発 → 貢山着
- 31日 県長よりレクチャー
- 6月 1日 弓の試合 バスケット 民族舞踊
- 2日～3日 培里村 交歓会 (同心酒で歓迎される)
- 4日 貢山帰着
- 5日 貢山発 → 福貢着
- 6日 ロープの橋 リス族民族舞踊撮影 県長招宴
- 7日 リス族家づくり見学
- 8日 ヌ族のムクジャ村訪問
別動隊 (船原、王、梯、石浜) 福貢発 → 六庫着
- 9日 カジ屋撮影 交歓会
別動隊 六庫発 → 永平着
- 10日 ムクジャ村発 → 福貢着
別動隊 永平滞在 (14日まで)
- 11日 福貢発 → 六庫着 土砂崩れ
- 12日 六庫発 → 下関着
- 13日 下関滞在
- 14日 下関発 → 麗江着
- 15日 麗江発 → 虎跳峡 → 麗江着
別動隊 永平発 → 下関着
- 16日 別動隊と合流

- 別動隊 下関発 → 麗江着
- 17日 麗江に滞在
- 18日 麗江発 → 中甸着
- 19日 中甸発 → 徳欽着
- 20日 チベット族の家族訪問
- 21日 チベット自治区との境界へ
別動隊 (王、船原) 徳欽発 → 中甸着
- 22日 徳欽発 → 白芒山口着
別動隊 中甸発 → 下関着
- 23日 白芒山口発 → 徳欽着 交歓会
別動隊 下関発 → 天申堂着
- 24日 徳欽発 → 中甸着
別動隊 天申堂発 → 南華着
- 25日 中甸発 → 大理着
別動隊 南華滞在
- 26日 大理滞在
別動隊 南華発 → 楚雄着
- 27日 大理 海東村白族
別動隊 楚雄発 → 禄豊着
- 28日 大理発 → 昆明着 別動隊と合流
別動隊 禄豊発 → 昆明着
- 29日～30日 昆明に滞在
- 7月 1日 昆明発 → 北京着
- 2日～4日 北京に滞在
- 5日 北京発 → 大阪着

この隊は本来梅里雪山峰学術合同登山隊学術考察隊として構想され、スポンサーに関西テレビがついたのである。その計画書には「昆明を出発、大理を経て、怒江に沿って北上し、怒族、独龍族を訪問する。そのあと再び大理から徳欽へ向かう。そして、チベット自治区に入り、ヤルツァンボ河の大湾曲を踏破し、ショーワから墨脱に入って少数民族の文化・生活調査をおこなう。帰途にカンパ族を訪ね、最後は徳欽を基地に3江が並流する地域を調査する」とうたわれていた。
ところが、北京および昆明で折衝を重ねるうちに中国側のカウンターパートや、収集す

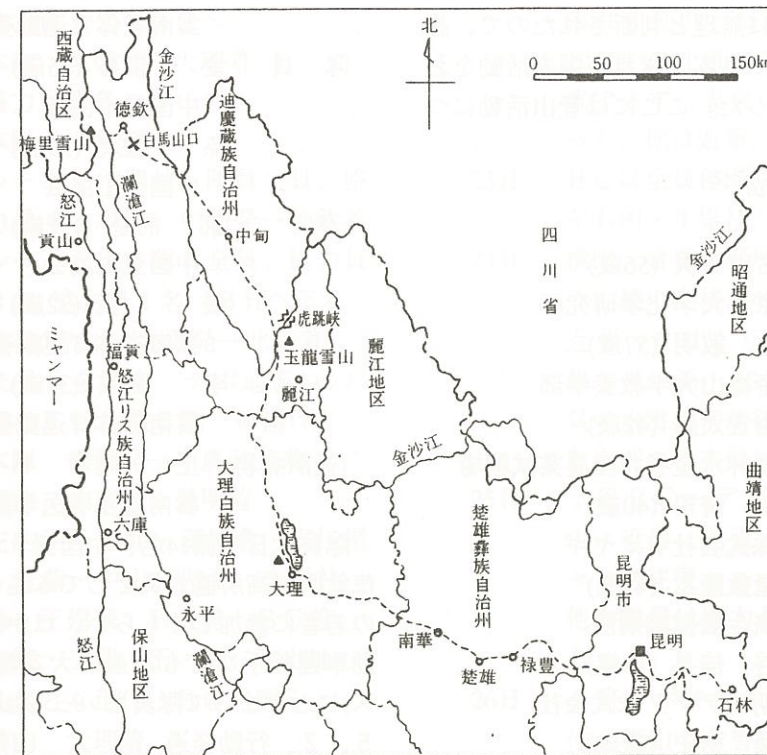


図1 昆明から梅里雪山まで

る調査資料の国外持ち出しについての規制など、難問が次から次へと出てきて、入域範囲が狭くなり、チベット自治区に入れなくなってしまった。怒江 (サルウィン河) の溪谷に入り、六庫、福貢、貢山などの地を初めて訪れて調査し得たのは幸いであったが、当初に構想された広大な踏査範囲からすればそのごく一部に過ぎない地域の許可しか得ることができず、残念なことである。

5. 日中合同梅里雪山峰学術登山隊 (第1次隊)

AACKは前年秋の先遣隊の偵察結果をもとに、本隊の規模、編成、登攀のルート、タクティクスなどを決定した。合同計画の相手方は、北京の中華人民共和国登山協会と雲南省体育運動委員会の中にできた雲南省登山協会であり、登山に関しては三者が対等の資格

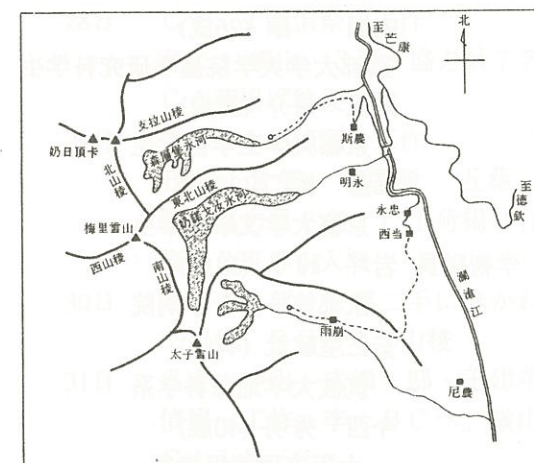


図2 梅里雪山峰東面概略図

で合同隊を編成する。学術班は春の科学隊の経験から見ても、中国側の行政・研究機関と如何に協力関係を結ぶかが難問であり、調整

するのが時間的に無理と判断されたので、許可される範囲内で日本人隊員が調査活動をおこなうことになった。ここには登山活動について報告する。

5. 1. 隊の構成

[日本側]

総隊長 左右田健次 (56歳)
京都大学化学研究所
副総隊長 酒井 敏明 (57歳)
帝塚山大学教養学部
登攀隊長 横山宏太郎 (42歳)
農林水産省北陸農業試験場
秘書長 倉智 清司 (40歳)
株式会社アオヤギ
医師 蔵屋敷隆二 (47歳)
済生会前橋病院
登攀隊員 米谷 佳晃 (31歳)
朝日テクノ株式会社
近藤 裕史 (31歳)
財団法人日本気象協会
中山 茂樹 (27歳)
京都大学学士山岳会
広瀬 顕 (26歳)
京都大学大学院農学研究科学生
児玉 裕介 (22歳)
京都大学工学部学生
工藤 俊二 (20歳)
京都大学文学部学生
学術隊員 岩坪 吟子 (53歳)
京都第一赤十字病院
安仁屋政武 (44歳)
筑波大学地球科学系
今西 秀明 (40歳)
大阪府環境保健部

[中国側]

総隊長 楊 必育 (56歳)
雲南省体育運動委員会
登攀隊長 王 振華 (54歳)
中国登山協会
秘書長 李 崇礼 (55歳)

雲南省体育運動委員会
隊員 金 俊喜 (35歳)
中国登山協会
孫 維琦 (29歳)
中国登山協会
鄔 前星 (32歳)
中国登山協会
張 俊 (32歳)
雲南省体育運動委員会
李 之雲 (33歳)
雲南省体育運動委員会
(通訳兼務) 王 建華 (36歳)
雲南省昆明医学院

隊員は日本側14名、中国側9名であったが、徳欽県で高所協力員として6名のチベット族の若者に参加してもらい、ほかに炊事員、自動車運転手などもス農の大本営(ベースハウス)にとどまって隊員といっしょに行動した。

5. 2. 行動経過

この隊の中国における行動は1989年9月4日から11月30日までであった。

9月 4日 中国側先発 北京発→昆明着
12日 中国先発隊 徳欽着
日本先発隊(米谷・広瀬・工藤)
フェリーで大阪発
14日 日本先発隊 上海着
16日 昆明着
26日 下関着
27日 中甸着
28日 日中両先発隊 徳欽で合流
30日 徳欽発→ス農着 BH建設
10月 4日 BC建設(3850m)広瀬・工藤・
金・鄔・李・協力員8名 BC
入り
日本側本隊(左右田以下10名)
大阪発→北京着 孫と合流
5日 米谷・王振華 BC入り
6日 本隊 北京発→昆明着
雲南の李、張、王の3名と合流
7日 協力員4名 BHへ

8日 協力員2名 BCへ
9日 本隊 昆明発→大理着
10日 協力員2名 BCへ
11日 本隊 中甸着
12日 ルート工作開始 隊員全員、協力員4名本隊 中甸発→徳欽着
13日 ルート工作 隊員全員、協力員3名 協力員1名 BHへ下る。
後発(横山) 大阪発→北京着
14日 米谷・金・李 デポ地仮キャンプ入り、協力員5名 荷揚げ
本隊 徳欽発→ス農BH着
横山 北京発→昆明着
15日 左右田・酒井・蔵屋敷・安仁屋・近藤・中山・児玉・李崇礼・孫・王建華 BH発 BC着
広瀬・工藤・王・鄔 デポ地の3名とも工作、BCへ戻る。
横山 大理着
16日 左右田・酒井・安仁屋・李崇礼 BC発、ス農BHに戻る。
横山 中甸着
17日 BCは全員停滞 横山BH着
18日 全員停滞
19日 全員停滞
20日 蔵屋敷・近藤・中山・児玉・工藤・孫・鄔・王建華 サイドモレーンの乗越し点まで状況偵察
左右田・李崇礼
ス農BH発→徳欽着
21日 横山・倉智 ス農BH発 BC着
22日 蔵屋敷・近藤・米谷・中山・広瀬・児玉・工藤・金・李・王建華 サイドモレーンの乗越し点まで往復。
◎登攀要員を3班に分け、班単位の行動を基本とする。
1班:米谷・広瀬・金・李
2班:中山・工藤・鄔・王建華
3班:近藤・児玉・孫

張は3班の一員に予定したが、BHでの仕事が多く、BCに合流できず、実質はこの3名となった。他は遊軍。
23日 BCは全員停滞
左右田・李崇礼 昆明着
24日 横山・倉智・蔵屋敷・米谷 ブラ山稜の支稜を400m登る
近藤・中山・広瀬・児玉・工藤・王・孫・鄔・王建華 協力員の氷雪技術訓練
左右田 日本帰国
25日 1班BC-デポキャンプ、横山・近藤・児玉 BC-デポキャンプ往復
他の隊員は協力員の訓練にあたる
26日 1班デポキャンプより上部工作。横山・倉智・2・3班 協力員訓練、ブラ山稜に上る
27日 2・3班・協力員7名 荷揚げ、C1建設(4660m)。1班 C1入り
28日 C1:1班偵察・工作
BC:横山・3班・協力員7名 C1荷揚げ往復
29日 C1:1班偵察・工作
BC:倉智・蔵屋敷・近藤・孫・協力員7名、C1荷揚げ往復。2班C1入り
30日 C1:上部、下部二手に分かれて工作 BC:ブラ山稜
31日 C1:中山・広瀬・鄔・王建華 偵察・工作。李 BCへ。横山 C1入り
BC:近藤・児玉・協力員7名 C1荷揚げ往復。安仁屋 BC訪問
11月 1日 C1:横山・中山・工藤・王建華 偵察とトレース付け、4760mまで。BCは停滞

2日 C1: 全員偵察、5000mデポまで。第3氷河へは氷のデブリを横断する必要あり。
BC: 孫・協力員7名
C1荷揚げ往復

3日 C1: 横山・広瀬・2班は第4氷河偵察。全体にセラックが積み重なったような状態。
BC: 蔵屋敷・近藤・児玉・協力員7名 C1荷揚げ往復

4日 BC・C1とも雪で停滞

5日 BC・C1とも雪で停滞

6日 BC・C1とも雪で停滞

7日 C1: 鄔を除く7名偵察に出るが、天候悪化、途中までで戻る。

8日 C1: 全員 偵察、第4氷河の右側迂回ルートを探る。行き詰まる。
BC: 3班・李・協力員3名 デポ地荷揚げ往復。安仁屋・今西 BCへ

9日 C1: 偵察。第4氷河、米谷・広瀬・工藤・王で正面突破ルートの氷壁、横山・中山で右側迂回ルート。いずれも突破口開けず。3班 C1入り。鄔 BCへ。協力員7名 C1へ荷揚げ。李 デポ地往復

10日 C1: 金・横山・工藤以外 第3氷河の観察・検討に向かう。
BC: 倉智・今西 ズラ山稜へ。晩にC1の全員で協議し、BHの酒井、BCの倉智、王振華とも連絡の上、悪天候と氷河の状態が悪く危険なため、撤退することに決定

11日 C1: 全員休養。協力員7名 BCより荷下ろしにC1往復
酒井・岩坪・張・李南(中英通訳兼ドライバー) BCへ

12日 C1: 米谷・児玉・金・孫 第

1氷河へ偵察行、北東稜のコルよりナインゴル氷河を観察
他は上部のデポ回収
BC: 岩坪・今西・張・李南 BHへ

13日 C1: 近藤・中山・広瀬・工藤・王 第1氷河へ偵察行
横山・米谷・児玉 氷サンプリングに5000mまで登る

14日 C1撤収。協力員7名 BCより荷下ろしにC1往復
BC: 蔵屋敷・安仁屋 BHへ

15日 酒井・王振華・鄔・協力員4名 BHへ下る
斯農-捕村の道路開通

16日 斯農-徳欽間の道路開通、BH撤収開始。協力員4名 BCへ戻る
BCから横山・中山・広瀬・工藤・李・王建華・協力員3名 BHへ下る

17日 BC撤収

18日 全員徳欽へ撤収完了

19日~20日 全員徳欽滞在

21日 徳欽発→中甸→大理着

22日 大理滞在

23日 大理発→安寧着

24日 安寧発→昆明着

25日 昆明滞在
横山 昆明発→上海→大阪着

26日 横山以外 昆明滞在

27日 昆明発→北京着

28日~29日 北京滞在

30日 北京発→大阪着

5. 3. 降雪が多く行動日数限られ、登路開拓はならず
登山隊は前年の先遣隊による偵察をもとに、ルートをシェンチェンバオ(森層堡)氷河に取ることにし、先発隊は9月初めに、本隊は10月初めに日本を発った。登山期間として、

モンsoonがあけて天候がよくなる時期と、標高4300mの白馬山口(峠)が雪に閉ざされる時期との兼ね合いから、10月と11月の2カ月を選んだ。

登山活動の初期は悪天候、特に降雪に悩まされた。ルートは降雪後は雪崩の危険があり、雪が落ちつくまで行動できない。したがって行動できる日数が予想よりもかなり少なかった。後半はかなり晴れる日も多くなったが、なお悪天日は予想よりも多かった。

隊は昆明から大理、中甸、徳欽を経由して瀾滄江(メコン河)を渡って斯農まで、車両によって人員、物資を輸送した。斯農に一軒の家を借りてベースハウス(BH)とした。中国では大本営と呼ぶ。さらに標高3850mの放牧地にベースキャンプ(BC)を設けた。斯農・BC間は村人、家畜(馬)による物資輸送となった。ここでは放牧用の小屋を借用し、さらにテントを加え、炊事、食事、居住、物資集積のための空間とした。

シェンチェンバオ氷河のルートは、二つのアイスフォールが問題とされていた。一番目(下部)のアイスフォールは標高約4600mから一気に1000m近い標高差を落ちる大規模なもので、始終セラックの崩壊が起き、BCにその轟音がひびく。氷河はこのアイスフォールでいったん途切れ、その下でまた再生氷河となっている。まず左岸側のアブレーション・ヴァレーを登って標高約4200mでラテラルモレーンを越え、氷河に入って、左岸側の端、岩壁のすぐきわにロープを固定してルートが作られた。

第1キャンプはその上の、氷河の傾斜が緩い部分の左岸寄りに作られた。この辺りも岸近くを除けばほぼ全面がクレバス帯である。さらに遡ると氷河は大小5本の流れに分れる。これを上流に向かって左から順に、第1、第2、・・・第5氷河と称した。本流は第4氷河である。

二番目(上部)のアイスフォールは標高約

4700mから5100mに至るものである。全体がセラックが積み重なったように見える。そして最上部はほぼ氷河の幅いっぱいになる高さ20m前後の氷壁になっている。ここはまず左側、第3氷河寄りにルートを開き、約5000m地点まで達して登攀用具等をデポした。第4氷河をそのまま登るか、それとも第3氷河を使って早く北東稜に出るか、両方の可能性があった。

第4氷河は、正面の氷壁を突破するか、右手寄りを迂回するルートが発見できるか、二つの方向を試みた。氷壁突破は、下部は梯子を利用し、アイスハーケンを連打して少しずつルートを伸ばしたが、上端付近の雪の状態が悪く結局抜け出すことができず失敗し、技術的にかなり困難と判断せざるを得なかった。またその上もクレバス帯が続き、ルート確保にはかなり苦勞すると予想された。右寄り迂回ルートは何度も偵察を重ねたが、氷河中央より右へ行くほど氷河の状態が悪く、セラックの崩壊が激しく、荷揚げルートとして使うことは無理と判断した。

11月10日、ルートの観察・検討に向かった隊員が、デポより上のルートが相当の幅にわたり、前日午後隊員がそこを通過した後、氷雪崩に襲われたことがわかった。全体にこの氷河はかなり流動が速いため、このようなセラックの崩壊も頻繁に起こり、登攀には条件が悪いと考えられる。

第3氷河を検討したが、左岸を限る岩壁の上にセラックが押し出してきており、崩落の危険が大きかった。氷河上には氷塊が散在し、新たに崩落したらしいものも認められる。さらに第4氷河から第3氷河に入るならばルートになると考えられるところが上部からの氷雪崩に覆われた。したがって第3氷河もルートとするには危険がきわめて大きい。

以上のような状況から、この氷河をルートとするのは危険性が大きすぎると判断し、撤退することに決定した。なお、第2氷河は全

体がクレバス帯でとうていルートには使えない。第1氷河は唯一ルートとなるが、これを経て北東稜に出たとしてもそこから北東稜をたどることは技術的に難度が高く、しかも相当の日数を要するので現実的には無理と考えた。

われわれがこれまでに検討したもう一つのルートは、ナイノゴル氷河(別称明永氷河)の5100mあたりの平坦部に達し、急な側稜(バットレス)を使って東南稜に上り、東南稜をたどって頂上に至るものであった。このルートはナイノゴル氷河の平坦部に出るルートがあるか不明であった。ナイノゴル氷河正面のアイスフォールは通過不可能、右岸側の小氷河は上越山岳協会隊が試みたが5100m付近で撤退を余儀なくされている。残るのは、氷河源頭から逆に下ってくることである。源頭へはずっと南を回り、雨崩の谷から登ることができるかも知れない。

若手隊員はこのルートの可能性をできるだけ探るため、第1氷河を登って北東稜のコルに達し、ナイノゴル氷河側を偵察することを希望した。このために2日間を充てることになった。長時間の行動を要したが、11月12日に4人、13日に5人がコルに立ち、ナイノゴル氷河上は平坦で特に問題はない、側稜もかなり急傾斜ではあるが登攀できると、このルートの可能性を確認した。

隊の入山後、大雨が降り続いたために徳欽-斯農間の道路が土砂崩れなどで寸断されていた。隊の下山予定日が迫り、その日に合わせてもっぱら村人たちの人力を動員して急がれていた復旧工事のおかげでようやく四輪駆動車が通れるようになった。しかしいつ何時また崩壊するかわからないような状態であったので、できるだけ速やかにBC、BHを撤収することが必要であった。そのため、雨崩の谷からナイノゴル氷河に至るルートの偵察をするのにあてる時間的余裕がなくなってしまった。

道路開通後4日間でBH以上はすべて撤収し、徳欽に戻った。白馬山口を越える道は、すでに日陰には雪が積もり、水流が厚い氷となって路面を覆い、冬の厳しさがしのばれた。中旬、大理を経て陸路昆明へ、その後は空路帰国した。

隊員の実施した学術調査は、時間的にも、物資も、行動範囲も限られていたにもかかわらず、各分野で大きな成果を挙げた。

二人の歯科医師は全期間滞在した斯農BHで臨時の診療所を開設し、付近住民に医療奉仕活動や保健衛生面の指導を行ない、大いに感謝されたことは、日中友好の上からも大きな意味があった。

5. 4. 新ルートからの登高計画へ転換をはかる

第1次隊は、予想をはるかに上まわる悪天候のために行動可能な日数が限られ、さらに、シェンチェンバオ氷河の上部アイスフォールに安全な荷揚げルートを見いだせなかったために、登高を中止することになった。しかし、撤退前の僅かな時間を利用して、北東稜上のコルに登り、シェンチェンバオ氷河の南側を流れるナイノゴル氷河の上部雪原を上から観察し、この上部雪原と主分水嶺尾根から下がるバットレスがルートとして使えそうなようすを見ることができた。

1989年12月初めから、遠征隊の記録を整理し、反省会や報告会を開くなかで、なるべく早く偵察隊を出したいという機運が盛り上がっていった。ナイノゴル氷河の下流部が明永村の谷の奥に比高1000m以上の険悪なアイスフォールを落としていることは、先遣隊の時からよくわかっていた。瀾滄江を明永村よりさらに下流へ下り、尼農村の近くに注ぐ支流の谷がある。この谷をつめてゆくと、ナイノゴル氷河の上部雪原への近道を発見できそうに考えられるのだ。徳欽県の県長取扎さんも、この意見のようであった。第1次隊はこの道を是非とも踏査しておきたいと思っていた。

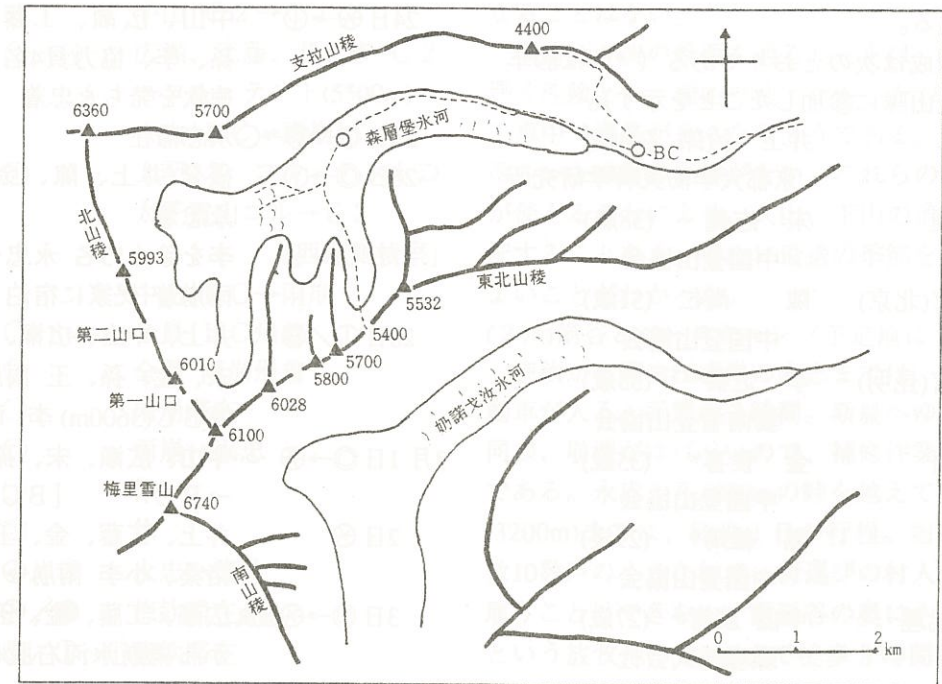


図3 第1次登山隊の登路

しかし、時間がそれを許さなかった。徳欽から公路を南へ走ったところにあるラマ寺飛來寺のあたりから険しい瀾滄江の峡谷に作られた斯農までの車道が豪雨のために寸断され、沿道の村人たちの人海戦術のおかげで四輪駆動車がやっと通れるようになったので、隊はかろうじて車で徳欽まで戻ることができたのである。あと1週間も斯農BHの滞在を延長していたら、道路が再び崩壊して、徳欽までの撤収にたいへん難儀する恐れが大きかったのである。

あと一つ知りたいことは、頂上から南へ伸びる主分水嶺の東面にはい上がる急峻な雪稜が登高可能かどうかであった。北東稜のコルから観察した3本のバットレスを、違う方向から、できればもっと接近した位置から調べることが望ましかった。

1990年1月になると、CMAおよび雲南省登山協会と協議を重ね、日中合同で偵察隊を

出す計画をつめることになった。

6. 偵察隊が明永氷河のルートを探る

6. 1. 隊の構成

森層堡(シェンチェンバオ)氷河から登頂を試みた第1次登山隊は登路を発見できず、撤退せざるを得なくなった。帰国後、報告反省会を開き、そのあと理事会では対応策を議論した結果、AACKは中国側と協議を重ね、奶諾戈汝(ナイノゴル)氷河上部雪原に入り込む登路があるかどうかを調査するために、偵察隊を送ることを決定した。本隊隊長を務める予定であった井上治郎は勤務先の都合上日程の一部しか参加はできなかったが、核心部の偵察にはなるべく同行できるように、日程を組んだ。

なお、1988年の先遣隊を第1次偵察隊とすれば、この隊は第2次偵察隊と呼ぶべきであるが、ここでは煩雑を避けるため88年隊は先遣隊と呼び、90年春のこの隊を偵察隊と呼ぶ

ことにする。

隊の構成は次のとおりである (*印は89年第1次登山隊に参加したことを示す)。

隊長 井上 治郎 (44歳)
 京都大学防災科学研究所

副隊長 宋 志義 (38歳)
 中国登山協会

連絡官(北京) 陳 尚仁 (51歳)
 中国登山協会

連絡官(昆明) 李 之雲* (33歳)
 雲南省登山協会

隊員 金 俊喜* (35歳)
 中国登山協会
 孫 維琦* (29歳)
 中国登山協会

隊長代理 中山 茂樹* (27歳)
 蝶理株式会社
 広瀬 顕* (27歳)
 京都大学大学院農学研究科学生
 工藤 俊二* (20歳)
 京都大学文学部学生

通訳兼務 王 建華* (36歳)
 雲南省登山協会

高所協力員 洛桑 都吉
 施 頂
 李 三 哥 (老三)
 李 永 華 (小李)

6. 2. 行動概要

時期 1990年2月11日~4月13日

2月11日 日本側先発(中山、広瀬、工藤)大阪発 東京を経て北京着

14日 宋、孫、中山、広瀬、工藤 北京発 昆明着

17日 上記5名と李 昆明発 下関着 途中交通事故で4輪駆動車破損

20日 下関発 中甸着

21日 中甸発 白馬山口(峠) 徳欽着

24日 ⊗→① 中山、広瀬、工藤、宋、孫、李、協力員4名 車で徳欽を発ち永忠着

25日 ①→①→○ 永忠滞在

26日 ①→① 後発(井上、陳、金、王) 永忠着

27日 ①→⊗ 李を除く13名 永忠を發ち雨崩着 民家に宿泊

28日 ①/① 井上、中山、広瀬、工藤、宋、金、孫、王 雨崩で笑農BC(3600m) 李 雨崩着

3月1日 ①→⊗ 中山、広瀬、宋、孫 雨崩→BC [BC建設]

2日 ⊗ 井上、工藤、金、王、李、洛桑、小李 雨崩→BC

3日 ①→⊗強風 広瀬、工藤、金、王 BCから雨崩氷河右股にルート工作

4日 ①/① 広瀬、工藤、宋、孫 BC→デポキャンプ(4300m) 第1段フィックス工作(4550mまで)

5日 ①+ガレ多し 上記4名 デポキャンプでC1予定地 後BCへ 井上、王 BC→雨崩

6日 ⊗→夜① 休

7日 ○→⊗+ガレ 休

8日 ○/⊗ 中山、広瀬、工藤、宋、孫、李 BC→C1(4600m) [C1建設]

9日 ○→⊗ 上記6名 C1でC2予定地(5300m)フィックス工作

10日 ①→⊗ 金、施頂、洛桑 BC→C1 宋 C1→BC

11日 ①→⊗ 中山、広瀬、金、孫 C1→C2 [C2建設]

12日 ○→⊗ 上記4名 C2 バットレス下(5100m)

13日 ⊗ 休

14日 ①→①→⊗ 李、工藤 C1→C2

中山 C2→C1

15日 ○→⊗ 広瀬、工藤、孫、李 C2→コル・テント(5500m)
 中山 BC→雨崩

16日 ① 上記4名 コル・テントで太子雪山コル→C2 [西藏側偵察]

中山 BC→雨崩

17日 ○+ガレ多し 全員 BC帰着

18日 ○ 全員 雨崩帰着

19日 ○ 雨崩滞在

20日 ○ 雨崩→永忠

21日 ○ 休

22日 ① 休

23日 ①/① 永忠→徳欽

24日 ⊗/● 徳欽滞在

25日 ①/①→① 徳欽滞在

26日~30日 徳欽にて待機

31日 徳欽→芒康 瀾滄江沿いに北上 新ルート

4月1日 芒康→中甸 新ルート

2日 中甸→大理

4日 大理→温泉

7日 温泉→昆明

11日 昆明発 北京着

13日 北京発 大阪着

6. 3. 偵察結果の概要

(1)アプローチについて

白馬山口(4200m)が積雪のために不通になっても、別ルートにより中甸まで戻ることができる。この冬峠は3回閉鎖され、中山が下山した直後にも不通となった。本隊が帰るときには悪天候が続いて開通のめどがたたなかったため、瀾滄江をさかのぼり、西藏自治区領の芒康にゆき、長江上流に入って南下し、奔子欄でいつもの道に合するルートを使った。徳欽-芒康は7~8時間、芒康-中甸は約16時間であった。途中4200mの峠を越えるが、積雪はほとんどなく、四川省内の道路はせまいが、白馬山口ほどはひんぱんに不通に

なることはない。

瀾滄江下流の維西を通るルートは、道路が悪く危険という理由で使えなかったが、現在工事中で道路が良くなるそうである。この維西ルートは雪の影響がない。これらのルートが使えることにより、入山、下山の道路を心配することなく、登山に最適の季節を選べばよいことがわかった。

(2)雨崩谷とベースキャンプ予定地について

徳欽から瀾滄江西岸の永忠までは、4輪駆動車が入る。所要約3時間。斯農へゆく道と同様、崩壊がはげしいので、補修作業は必要である。永忠から3800mの峠を越えて雨崩村(3200m)までは、徒歩1日の行程。雨崩は戸数10数戸の小さな村で、荷運びの村人を多数雇うことはできない。雨崩谷の奥にある笑農という放牧地(3600m)まで徒歩3時間。ここにBCを建設することができる。牧夫用の夏小屋が3軒あり、使用可能である。川は雪に埋まっているので、水は雪からとった。

(3)登攀ルートについて

偵察隊は、笑農から右股氷河を登り、右股氷河の鞍部に達し、鞍部から明永氷河上流部を横断して、頂上から南方へのびる主稜線の途中から東方へ張り出した支尾根の基部に達した。これとは別に、右股氷河鞍部から太子雪山北西鞍部に達し、西藏側の地形の観察を行った。

①笑農→右股氷河：標高にして3600mから4200m、最初堆石地帯(サイドモレーン)をたどって4000m付近まで達し、ここから右股氷河下部にあたる雪面を右斜上する。氷河直下に台地状の地点あり。ここに工作キャンプを臨時に設営し、C1までの懸垂氷河の右端にあたるルンゼのルート工作を行った。このルンゼの下部からC1まで、連続して450mのフィックス工作。偵察活動の終盤に、懸垂氷河右端が崩壊し、この450mのフィックスのうち下部200mが氷崩によって切断され、工作キャンプにデポしてあった装備が流失した。

②右股氷河：末端の懸垂氷河の右端をルートとして登り、この懸垂氷河の上端部の平坦地にC1を設営。約4550m。ここから4750mあたりまで平坦な雪面。下から見て左側は氷河の本流をなし、クレバスが多いが、右側は積雪のため一様な雪面で、危険はない。

4750mから5300mの鞍部まで、一気に高度を上げる急斜面である。左右に氷塊を残すが、中央部は鞍部まで雪面が続く。約4900mの中間部に、クレバスを一つ越える部分があり、ここに100m、鞍部へ達する最上部に連続して300mのフィックスを固定。

3月10日に中間部右側の氷塊が崩壊して、中間部のフィックス100mが流失した。上部300mのフィックス地帯は急斜面のため、新雪雪崩が頻発するが、規模は小さい。この間クレバスが二、三箇所存在するが、規模は小さく、今回の偵察ではすべて乗り越えることができた。鞍部からはそれより先のルートが一望でき、ABCとして適地。

③鞍部→支尾根：約4～5時間で横断できる。常に雪が深いと考えられ、クレバスは深く埋められている。平坦で雪崩の心配もない。ただし、視界がきかないと迷う。

④支尾根：全体に岩稜に氷化した雪が付着して、下部2/3の部分はすなおな一様な傾斜である。下部2/3の部分に限っては、規模は大きくなるが、第1尾根の方が傾斜は緩く、雪も適当についていて、第2尾根よりも登りやすそうである。第1尾根、第2尾根どちらも尾根の基部にはクレバスがあり、両側はそれぞれ上部からの雪崩や、氷塊の崩壊があるので、設営の位置は充分注意しなければならない。

第1尾根、第2尾根をまたいで下から約2/3のあたりに、帯状の懸垂した氷塊がついており、この部分の年による変化はあり得る。この部分の突破を考えた場合、第1尾根は氷塊が常に巨大であると思われる。第2尾根は部分的に氷塊が懸垂していない部分がある。

あるいは、全体に懸垂しているとしても、規模は小さく、通過可能である。昨年、今年と観察した限り、上述のとおり、第2尾根は部分的に困難な箇所は存在するが、最も困難度は小さく通行可能であり、登頂ルートとして最適と考える。

⑤太子雪山北西コルよりの観察結果：頂上直下南稜は、東側には巨大な雪庇が張り出し、いくつものギャップが続いている。梅里雪山峰頂上の南部(西藏側)には、主稜線(南稜)と西稜に囲まれるかたちで雪原が広がっている。標高は6200m程度か。この雪原の南稜側は急な雪壁になっており、雪壁基部と雪原の間には、クレバスや段差が見られる。雪原は東南端がなだらかに南稜肩まで続いている。

西稜は頂上直下よりやや急に高度を落とし、一度肩状になる。肩の高度は、標高6400m程度と思われる。この肩の直下が雪原の西北端にあたる。雪原から肩にかけては、やや急な雪の斜面となっており、多少の段差が見られる。西稜はここより急激に高度を落とし、一度やや平坦になるものの、末端は標高差1000m以上の壁となる。西稜南面も急峻な壁にまわられている。雪原の南西側、南稜と西稜の間の部分は垂直に近い岩壁になっており、雪原の押し出しでブロックが岩壁上を落下していくのが見られた。

南稜は雪庇が発達し、またギャップが連続しており、特に頂上直下のギャップは大きく、通過不能と思われる。雪原を横断して西稜に取り付き、頂上に至るルートが有力。このルートについては、以下のような問題・対処が考えられる。

- ・雪原上で視界がきかないと迷う危険がある。・・・旗を立てるなどの対策
- ・頂上までの距離、ラッセルを考えるとC5建設の可能性あり
- ・西稜肩直下雪崩の危険・・・気象・雪の状態の慎重な判断
- ・頂上直下急斜面・・・確実なフィックス

ス工作
結論として、雪崩に注意さえすれば、十分なルート工作によって通行可能なルートである。

西藏側・西南面は、氷河が発達しておらず、壁に囲まれており絶望的。

以上のように、雨崩→ナイノゴル氷河(明永氷河)上部雪原→主稜線東面バットレス→頂上のルートは、充分登頂ルートとして採用できることがわかった。中国側と協議した想定ルートとキャンプ予定地は、次のとおりである。

基地(雨崩村)	3200m	
BC(笑農)	3600m	夏の放牧地 まわりは針葉樹林
C1	4600m	雨崩氷河右股のアイスフォールの上
C2	5200m	雨崩氷河右股源頭

のコル
C3 5100m 明永氷河上部雪原上、バットレス取付
C4 6100～6200m 主稜線肩 西藏側雪原

頂上 6740m
ルートは全般に急で、困難である。問題点は以下のとおりであった。

- (1)BCからC1へ
C1直下の氷河は左岸岩壁直下のルンゼを直登したが、降雪後上部岩壁からの雪崩がこのルンゼに集中する。日の当たる昼間の登攀は危険である。早朝および夕方の、短時間での通過が必要である。また、氷河表面のブロック崩壊にともなう雪崩も発生し、ルンゼ直下の台地に設営したデポ地は流失した。サイドモレーン上(4000m)からC1までの間に工作キャンプを設けるのは不可能である。
- (2)C1からC2へ

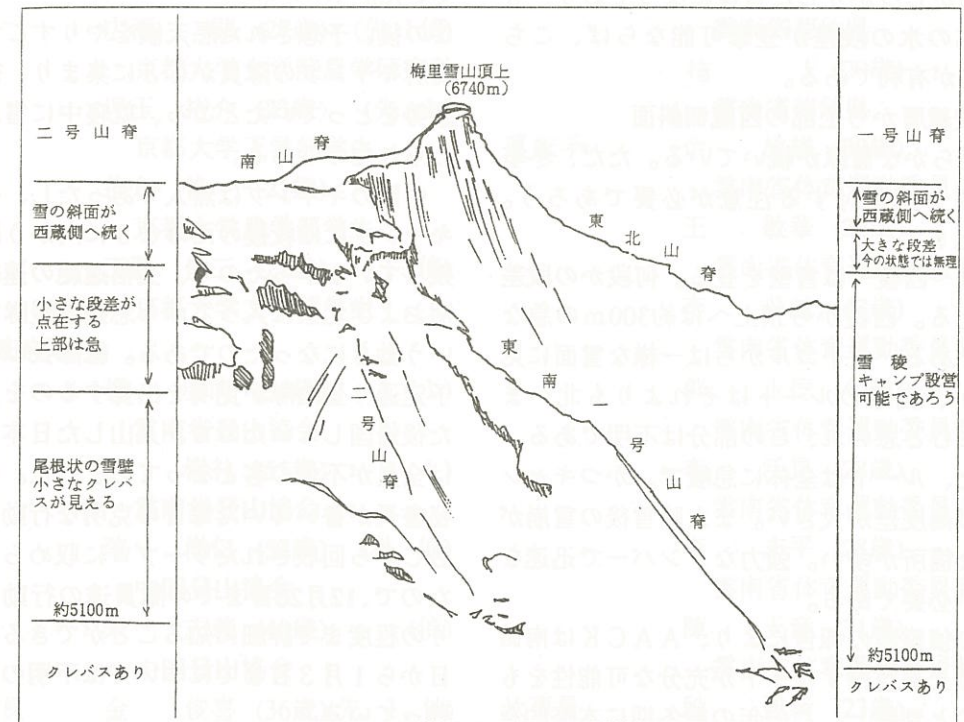


図4 頂上東南面のスケッチ

C2直下の雪壁は非常に急であり、降雪後は表層雪崩が頻発する。しかし雪崩の規模は小さい。また中央部にはブロックの崩壊部がある。

(3)C2からC3へ

C2-C3間は明永氷河上部の平坦な雪原である。積雪多く、クレバスは埋まっている。ちなみに太子雪山北西コルで雪洞を掘った際には、約2.5mまで一様な積雪であった。しかしいったん視界を失うと全く行動できないため、赤旗が多数必要である。

(4)C3からバットレス

C3を予定しているバットレス基部は大きくクレバスが口を開いている。またバットレス基部は大きな雪壁であり、ここからの雪崩を避けられるところにC3を建設する必要がある。3本のバットレスのうち2本目が一番有力に見えたが、下部は急な雪壁、中～上部に氷の段差があり、6100mの肩までキャンプサイトはない。1本目のバットレスは下部がしっかりした雪稜になっており、もし上部の氷の段差が登攀可能ならば、こちらの方が有利である。

(5)主稜線肩から上部の西藏側斜面

なだらかな雪原が続いている。ただ、冬季は低温と風に対する注意が必要であろう。

(6)頂上まで

雪原～西稜へは雪壁を登る。何段かの段差が見える。西稜から頂上へは約300mの急な登りである。太子コルからは一様な雪面に見えたが、実際のルートはそれよりも北へまわりこむと思われ、この部分は不明である。

以上、ルートは全体に急峻で、かつキャンプ間の高度差が大きい。また降雪後の雪崩が危険な箇所が多い。強力なメンバーで迅速な行動が必要である。

この偵察隊の報告により、AACKは南側から頂上を目指すルートが十分な可能性をもつものと判断し、この年の厳冬期に本格的な登頂を目的とする遠征登山隊を送ることを決

定し、井上治郎隊長以下の強力な登攀隊員を集めて、第2次隊を編成した。第一次隊隊員の中から5名が再度の挑戦に名乗りをあげ、ヒマラヤやチベットでの登攀の経験をもつ新しいメンバーも新たに参加してきた。中国側は宋志義が新たに加わったほかにはほとんど異動がない。

帰途に白馬山口が雪で閉鎖される時期を気にする必要がないことがわかったので、過去の徳欽気象台の月別降水量および降水日数のデータから一番天気の良いと考えられる11月と12月を選び、装備、食糧、通信、気象など、諸般の準備も遺漏なきように進められた。

次章は第2次隊の行動の記録である。

7. 梅里雪山峰第2次学術登山隊

この隊は入山以来順調な登高を続け、一度は頂上直下270mにまで到達したのである。この時点まではBCからの連絡が徳欽、昆明を経由して京都の留守本部に国際電話で入っていた。

この後、予想された悪天候をやりすごすため高所キャンプの隊員がC3に集まり、待機の態勢をとっていたところ、就寝中に雪崩に埋められたのである。

中間のキャンプは無人であったし、ベースキャンプには救援のためC3に向かう隊員は残っていなかったため、交信途絶の連絡が昆明および北京に入ってから急遽救援隊派遣という動きになったのである。総隊長は当初の予定通り登山隊が昆明を出発するのを見送った後帰国していたので、入山した日本人隊員は全員が不帰の客となってしまった。佐々木秘書長が書いていた毎日の克明な行動記録がBCから回収されたワープロに収められていたので、12月26日までの隊員達の行動はかなりの程度まで詳細に知ることができるが、27日から1月3日までについては不明の部分が残っている。

7.1 隊の構成

隊の構成は次のとおりである。()内にこれまでの参加歴を付記する。

略字は 先：先遣隊 科：科学隊
1：第1次隊 偵：偵察隊

〔日本側隊員〕

総隊長 左右田健次 (57歳) (1)
京都大学化学研究所教授

学術登山隊長 井上 治郎 (45歳) (偵)
京都大学防災研究所助手

秘書長 佐々木哲男 (38歳)
近畿第一監査法人・公認会計士

医師 清水 久信 (36歳)
メイト北山・医師

登攀隊員 近藤 裕史 (33歳) (1)
財団法人日本気象協会関西本部

米谷 佳晃 (32歳) (先、1)
朝日テクノ株式会社

宗森 行生 (32歳)
共同通信社横浜支局

船原 尚武 (30歳) (科)
神戸大学大学院自然科学研究科

広瀬 顕 (27歳) (先、1、偵)
京都大学大学院農学研究科

児玉 裕介 (23歳) (先、1)
京都大学工学部学生

笹倉 俊一 (21歳)
京都大学農学部学生

工藤 俊二 (21歳) (1、偵)
京都大学文学部学生

〔中国側隊員〕

総隊長 楊 必育 (56歳) (1)
雲南省登山協会

秘書長 李 崇礼 (55歳) (1)
雲南省登山協会

連絡官 陳 尚仁 (52歳) (科、偵)
中国登山協会

隊長 宋 志義 (40歳) (偵)
中国登山協会

登攀隊員 金 俊喜 (36歳)(先、1、偵)
中国登山協会

協力員

運転手

炊事員

孫 維琦 (31歳)(先、1、偵)
中国登山協会

張 俊 (33歳)(先、科、1)
雲南省登山協会

李 之雲 (34歳)(先、1、偵)
雲南省登山協会

王 建華 (37歳)(先、科、1、偵)
雲南省登山協会

余 新華 (21歳)
雲南省徳欽県

松 吉 (22歳)
雲南省徳欽県

斯那 次里 (26歳)
雲南省徳欽県

扎史 吾堆 (26歳)
雲南省徳欽県

扎史 吉才 (25歳)
雲南省徳欽県

羅桑 多吉 (25歳)
雲南省徳欽県

林 文生 (22歳)
雲南省徳欽県

拖 丁 (20歳)
雲南省徳欽県

余 放雄 (30歳)
雲南省体育運動委員会

王 敏華 (26歳)
雲南省体育運動委員会

李 葆誠 (47歳)
雲南省体育運動委員会

郭 玉徳 (40歳)
雲南省体育運動委員会

李 沃昆 (28歳)
雲南省体育運動委員会

李 志平 (28歳)
雲南省体育運動委員会

陳 玉竜 (31歳)
雲南省体育運動委員会

段 建新 (23歳)
雲南省体育運動委員会

張 開雲 (29歳)
雲南省体育運動委員会
李 帆 (20歳)
雲南省体育運動委員会
徳欽県体委 李 世沢 (50歳)
雲南省徳欽県
迪慶州体委 農 布 (37歳)
雲南省中甸県
舒 建華 (32歳)
雲南省中甸県

7.2 行動概要

期間 1990年11月1日～1991年1月3日
(注記のない時間は中国現地時間)

11月1日 先発隊3名(米谷、船原、笹倉)
神戸港発
11月7日 先発隊 昆明着
11月15日 先発隊 昆明発
11月21日 本隊9名(左右田、井上、佐々木、
清水、近藤、宗森、広瀬、児玉、
工藤) 大阪空港発 → 北京着
11月23日 北京発 → 昆明着
11月25日 本隊昆明発 → 下関着
左右田隊長帰国
11月26日 下関発 → 大理 → 中甸着
11月27日 中甸発 → 徳欽着
11月29日 徳欽発 → 西当着
11月30日 西当発 → 雨崩着
12月1日 雨崩発 → 笑農着
[BC建設(3470m)]

12月2日 天気不明

○午後、C1氷河方面へ2時間の足ならし
○夕食後第一回「最高幹部会」。今後は毎
夕開催することとする。

12月3日 天気不明

○終日、隊荷の整理

12月4日 曇り <登攀活動開始>

○船原、宗森、広瀬、笹倉、王、孫、李：
ルート工作
C1氷河左岸沿いの核心部セラック帯
にフィックス工作。氷は土砂混じりで

剥がれやすい。BC帰着19:30

○宋、金：協力員の訓練
○井上、佐々木、児玉、近藤、清水：デポ
地往復
○ガスボンベと気象FAXが輸送上の手
違いで後発便となっていることが判明。

12月5日 快晴

○近藤、児玉、金：ルート工作 アイス
フォールを越え、C1プラトーまで。
C1予定地には届かず。
○米谷、笹倉、張：下部ルート整備 下り
アブザイレン用のザイルを設置。

12月6日 晴れときどき曇り

○宗森、広瀬、船原：ルート工作 ラッセル
が深く、C1予定地まで届かず。
○井上、米谷、孫、李：下部ルートの補修
「滑り台」のフィックス・ロープを補強
する。
○協力員は全員10キロほどの軽荷で井上ら
が補修した「滑り台」を通過。ルート
工作隊の到達点にデポ。

12月7日 晴れときどき曇り

○近藤、児玉、笹倉：ルート工作 初めて
C1予定地に到達。宋が途中で合流。
○工藤、佐々木：ルート補修
○協力員全員で20Kgの荷揚げをおこなう。
宋、王が同伴
晩の幹部会で、翌日のC1入りが決定さ
れる。また今後、ルート工作は日本側が
おこない、協力員の教育および安全の
確保は中国側が責任を負うことが確認
された。

○後発便の一部(EPIボンベ)が到着

12月8日 快晴 [C1建設(4500m)]

○船原、広瀬、工藤、清水：C1入り
○協力員3名：C1への荷揚げ ルートの
危険性を訴えるストライキがおこり、
協力員3名での荷揚げとなる。孫、王
が同伴。
○陳、張(炊事員)：BC入り

後発便は気象FAXを除きすべて到着

12月9日 快晴

○船原、工藤、広瀬、清水：C2ルート工作
高度差で300mほど前進したが、大きな
クレバスに阻まれる。
○児玉、笹倉：C1入り
○協力員5名：C1荷揚げ 李、張が同伴
「滑り台」下で、ひと抱えほどもある落
石に遭う。怪我人は無かった。

12月10日 晴れ、やや強風

○船原、児玉、工藤、笹倉：C2ルート工作
C2コルへの雪壁を突破。C2コルまで
距離にして300mを残す。
○広瀬、清水：C1ルート補修
落石危険地帯を迂回するルートを開いた
が、連日の晴天により、氷の融解が進
んでいるため、毎日の点検が必要となる。
○宗森、宋、孫：C1入り 宗森は元気に

C1入り

○最高幹部会議にて、協力員の危険行動が
問題となり、中国側で指導を徹底する
こととする。

○気象FAXが到着

12月11日 快晴後曇り、終日風あり

○宗森、船原、児玉、笹倉：C2ルート工
作 C2予定のコルに到達。途中、梯子
をかける。コル直下は傾斜がきつい。
コルからC3側へ少し下がった地点に
テント適地がある。
○協力員4名：C1への荷揚げ 宋、孫、
王が同伴
危険行動は、ほとんど見られなくなった。
○協力員4名：C1入り
○井上は快復。梅里雪山の西側に低圧部が
来ており、天気は下り坂との予報
○段(炊事員)が王とともに「滑り台」往復

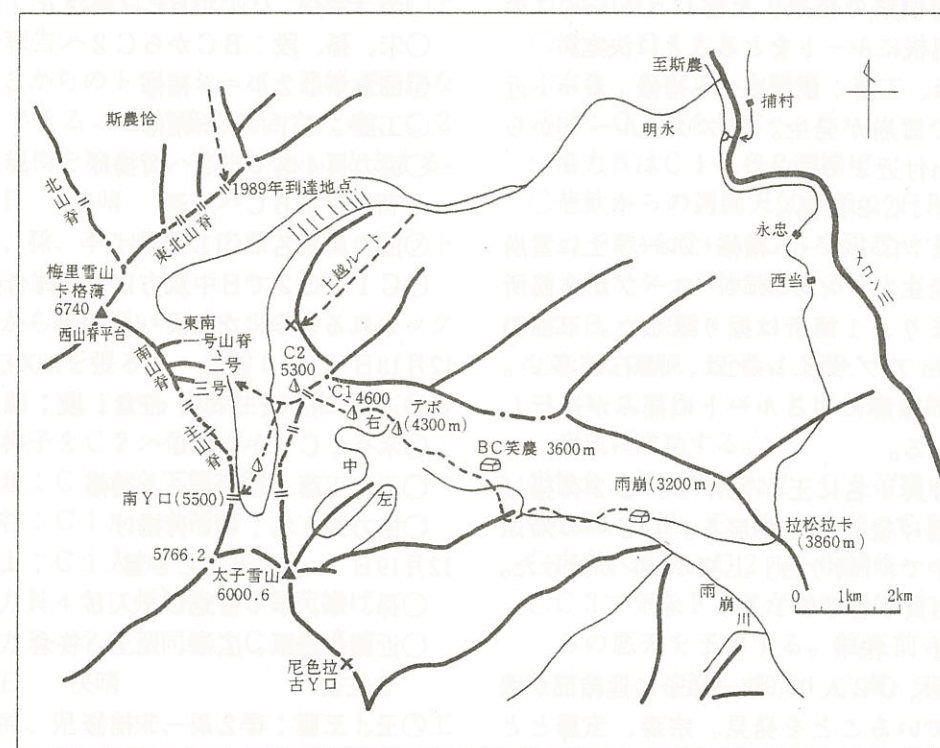


図5 第2次登山隊登攀予定ルート

12月12日 快晴後C1以上ガス

- 宗森、広瀬：C2ルート工作 C2荷揚げ隊に先行してルート整備をおこなう。
- 協力員4名：C2荷揚げ 孫が同伴
- 工藤：C1ルート補修 氷の融解により、ピンが数センチ浮いていた。
- 近藤：C1入り
- 協力員4名：C1荷揚げ 李が同伴

12月13日 晴れ後曇り(C1では視界なし)
[C2建設(5300m)]

- 宋、孫、近藤、船原、広瀬：C2入り C2はガスで風があり、寒い。
- 工藤：C2往復
- 児玉、笹倉：C1ルートデポ回収
- 協力員4名：C2荷揚げ
- 王、李：C1入り

12月14日 快晴

- 宋、孫：上部偵察 C3ルート
- 近藤、船原、広瀬：上部偵察 太子雪山方面偵察の結果、上部バットレスは第2尾根にルートをとることに決定。
- 宗森、工藤：C2ルート補修 ルート近くで雪崩が発生。デブリはルートから20m付近まで届いた。
- 笹倉：C2往復
- 児玉：C1ルート補修 ルート上に雪崩が発生。フィックス・ロープが2箇所埋まり、1箇所は掘り返した。下部の80mアプザイレンは、落石が多い。氷の融解によるルートの痛みが進行している。
- 協力員4名に王が同伴し、C2荷揚げ荷揚げ後、BCへ戻る。BCへの帰還途中で、「滑り台」上部のピンが抜けた。
- 協力員4名：C1入り

12月15日 快晴

- 児玉：C2入り 第一梯子の連結部が壊れていることを発見。宗森、工藤とともに、修理する。
- 広瀬：C2で偵察

○宗森、近藤、船原、宋、孫：BCへ帰還

- 宗森、笹倉、工藤：ルート補修
- 協力員4名に李が同伴し、C2荷揚げ。児玉が発見した連結部が壊れた梯子を強引に渡ってしまう者がおり、破損が大きくなる。
- 最高幹部会議でC3位置に関して合意。C2コルから第2バットレス取り付け点までのあいだの最低所よりC2寄りにもどったところ。

12月16日 晴れ

- 米谷、王、張：C1入り 米谷は、ルートを補修しながら登る。
- 笹倉：C1ルート補修
- 広瀬、児玉：C2で第2尾根観察
- 最高幹部会議にてC1以上の人の動き方を決定

12月17日 快晴

- 近藤、宗森、船原、段：C1入り
- 李、米谷：C1からC2へ
- 宋、孫、段：BCからC2へ
- 笹倉：C2ルート補修
- 工藤：C1ルート補修
- 協力員4名でC2へ荷揚げ荷揚げ後BCへ帰還
- 協力員4名でC1荷揚げ
- C1、C2で日中双方による打合会が開かれるようになる。

12月18日 曇り後雪

- 近藤、船原、宗森、笹倉、段：C2入り
- 米谷：C2からC1へ
- 王、工藤：C1ルート補修
- 協力員8名：C1荷揚げ
- 12月19日 曇りときどき雪
- 孫、宋、李：暫定C3入り
- 近藤、船原、広瀬、児玉、笹倉：暫定C3往復

- 王、工藤：C2ルート補修 梯子の架け替えを目的に出発したが、悪天のため梯子のデポのみとする。

○午前8時の積雪 BC 7cm、C1 25cm、C2 30cm

○積雪が多いため、荷揚げは中止

12月20日 晴れ [C3建設(5100m)]

- 船原、広瀬、児玉、宋、孫、李：C3入り C3の位置について現場で日中隊員の意見が食い違ったが、BCを中継して協議した結果、前日の暫定C3から200mほどバットレス寄りにC3を建設。
- 笹倉、近藤：C3往復
- 米谷、王：C2ルート補修 梯子の架け替え完了
- 張、工藤：C1ルート補修
- 協力員8名：C1荷揚げ うち4名はC1入り。ひと抱えほどの落石が発生。
- C3が第2、第3バットレスのあいだから落ちた雪崩の雪煙をかぶる。「デブリはキャンプからは200mは離れており、あいだに谷もあり、もっと大規模な雪崩でも影響は受けない。大丈夫だ」との報告
- C3からのトランシーバー連絡が問題なくできることが確認できたため、C2は規模を縮小し、常駐しないこととする。

12月21日 快晴

- 宋、孫、李、船原、広瀬、児玉：バットレス工作 膝から腰の深いラッセルの中、フィックス300mを張る。
- 工藤：C1からC2往復 笹倉とともに梯子をC2へ荷揚げ
- 笹倉：C2から下部往復
- 米谷：C1ルート補修
- 井上：C1入り
- 協力員4名に張同伴：C2荷揚げ
- 協力員4名に王同伴：C1荷揚げ

12月22日 快晴

- 船原、児玉、宋、孫、李：バットレス工作 深いラッセルに難渋しながらも、フィックスを400m伸ばす。

○笹倉：C3入り 近藤、段とともにC3への荷揚げもおこなう。

- 宗森：C2からC1へ
- 近藤：C2から下部往復
- 米谷：C1ルート補修
- 協力員4名に王同伴：C2荷揚げ
- 協力員4名に張同伴：C1荷揚げ

12月23日 快晴

- 船原、広瀬、児玉、笹倉、孫、李：バットレス工作 氷壁下部までルートを伸ばす。ラッセルはなし。氷壁は取り付けから約10m。
- 近藤：C2からC3へ
- 工藤：C1からC3へ
- 段：C2からC1へ
- 井上：C1からC2往復
- 協力員4名：C2荷揚げ

12月24日 快晴

- 井上、米谷、王、林(協力員)、斯那次里(協力員)：C3入り
- 清水：C1入り
- 宗森：C1ルート補修
- 段：C1からBCへ
- 協力員はC1、C2荷揚げ
- 徳欽からの週間天気予報(27日以降悪天の予想)を受け、C5を建設せずにC4からアタック体制をとることとする。

12月25日 快晴

- 米谷、船原、近藤、工藤、宋、李：バットレス工作 バットレス最上部の氷壁突破に成功する。
- 笹倉、林、斯那次里：C3荷揚げ
- 広瀬、児玉、王、孫、協力員：C2荷揚げ
- 宗森、清水：C2ルート補修
- C3で気象FAXが稼働開始。30日頃からの悪天を予想する。悪天前の第1次アタック(近藤、船原、広瀬、宋、孫)を決定

12月26日 晴れ

- 宋、孫、近藤、船原、広瀬：バットレス

工作 氷壁上部のルート工作。仮C4を第2バットレスの最上部、氷壁の下に建設。高度は5900m。氷壁の荷物吊り上げは時間がかかりすぎる等の理由から、結局これがC4となった。テントは3張り

○児玉、工藤、笹倉：バットレス荷揚げ

○宗森、清水：C1ルート補修

○協力員：C1およびC2荷揚げ

翌日より荷揚げは、C1までは協力員、C2へは隊員によっておこなうこととする。協力員による荷揚げは28日終了の予定。これでC1以上のストックは1月10日程度までとなる。

○30日から天気は崩れ、規模はBC入りの時のものと同程度であるとの天気予測をする。

12月27日

○晩はよく晴れて、星がたくさん見えた。直接的な記録は残されていないが、この日5名がC3からC4に入ったものと考えられる。

12月28日

○朝はよく晴れていた。はっきりした記録ではないが、10時ころから風が吹き始め、天気が悪くなりだした。雲はだんだん増えた。高い雲だったが、頂上付近だけ雲がかかっていた。

○第1次アタック隊(近藤、船原、広瀬、宋、孫)C4発(8:00)ー雪壁の下(8:40)ー最高到達点6470m(13:30)

天気不良、視界2~3mとなり、宋、孫は撤退を希望。相談の後C3井上と交信

13:30：井上：「ファックスが出る
14:30までその場で待機せよ」

14:30：6470m地点では、さらに天候悪化。井上：「天気が良くなる可能性はないので下れ」全員下降開始

16:00：第2バットレスの上に張ったフィックス終了点(最上端)が見つ

らず。近藤より井上へ状況報告
井上：「ツェルトに入って待機せよ」

17:50：宋志義、孫維琦、フィックス終了点を探すためツェルトを出る。

近藤、この旨を井上に交信報告。井上はあせって、金(BC)に連絡し、宋志義への交信を試みてもらう。

BCからは大型トランシーバー2台で呼びかけたが応答なし。ただし、このとき宋・孫がトランシーバーを持っていたかどうかは不明

18:15：BCー宋志義との連絡がつく。「降り口わからず、もとの地点に戻った。視界2~3m」

BCより宋へ指示「井上も心配している。もとの地点で待機せよ」宋志義、井上にC4の第2次アタック隊員のサポートを要請。

井上：「いずれ救援に行くから、暫時その場で待機せよ」

C4の林が救援に上がることを希望したが、李、日方隊員に止められる。BCも林の行動には反対。井上は、今の天気の状況と林の技術では無理と止めた。林は承服した。

20:00：天候不変。井上「第1次アタック隊の持っている食料を点検せよ」日方、昼食3.5食、コンデンスミルク(チューブ入り)1本、ソーセージ2本、ローソク2本、メタ2個、EPIストープ1組。中方無し。井上、5人平等に配って食べるように指示。さらに日中の意思疎通のため広瀬を宋志義のいるツェルトに入らせた。

22:15：天候回復し、月も出た。下降開始。5名が1本のザイルにつながらって降り口を探した。

22:50：フィックス終了点を発見

23:13：宋志義、雪壁の上に達する

23:22：全員C4へ帰着

井上「天気予報が違ったことは、申し訳ない」

宋「天気のことなので仕方がない。今日の事態は、予報の問題とは関係ない」

翌日以後の予定については、協議せず。

○第2次アタック隊(林文生、李之雲、米谷、宗森、児玉、笹倉、工藤)C3発ーC4入り

○佐々木：BCーC1、金、協力隊員：BCーC1ーBC(荷揚げ)

金は佐々木に同行する予定だったが不調、手がしびれピッケルを持ってないほどになる。雪壁のところで陳と交信、指示を求めた。ここで、佐々木、金、張が合流した。清水に途中まで佐々木を迎えに降りてもらふことになり、金にはすぐに下るように指示した。佐々木は清水の出迎えを受けてC1に入った。

○張俊：C1ーBC。28日に登頂成功すれば、徳欽へいってあとの手配をするため

○清水：C1滞在、佐々木を途中まで出迎える

12月29日 晴れ

○第2次アタック隊員のうち3名(米谷、宗森、児玉)雪壁部分のルート整備、フィックス補修。フィックス・ロープに沿ってしばらく高度順化のために登った。降り口には赤旗が立っていなかった。緑、赤二つの袋を目印に置いた。

○上記3名以外のC4隊員は、全員C3まで撤収(帰着：宋13:00、孫15:59)孫が下降時、李たちにザイル、雪上訓練をほどこす。

C4のテントはたたんで重石に氷塊をのせて降りた。30日も同様にした。

○佐々木、清水、C1に滞在し荷物整理

12月30日 雲多い、風強し

○孫、王、林、斯那次里、近藤、広瀬、船原、工藤、笹倉：C3ーC1ーC3(C1より荷揚げ) C3を9:30発 14:00にC1を出た。荷揚げ量は90kg

○宋は風邪のため休養。李も休養

○米谷、宗森、児玉：C4ーC3(帰着 14:50)

○佐々木、清水：荷揚げ隊とC1で合流し、C3入り

○井上：C3より少し下降し、ルート、地形などを観察してC3に戻る。この日に、日中17名は全員C3に集結した。

12月31日 晴れ、時々強風

全員停滞。今後の方針について会議し、次の事項が確認された。

(1)1月1日は2班に分かれて荷揚げする。

1)井上、清水、米谷、宗森、広瀬、林、斯那次里：C3ーC4ーC3

2)近藤、児玉、笹倉、工藤、王、李：C3ーC1ーC3

(2)1月2日に第1次、第2次アタック隊は、同時にC4に入る。

第1次アタック隊6名(宋、孫、李、近藤、船原、広瀬)

第2次アタック隊5名(林、米谷、宗森、児玉、笹倉)

(3)1月3日

第1次アタック隊：C4ーC5(6300m)建設。C5は西稜上に設ける。

第2次アタック隊：サポート

(4)1月4日

第1次アタック隊：C5ー登頂ーC4

第2次アタック隊：C4ーC5入り

(5)第1次アタック隊は、登頂後C4へ戻り、第2次アタックのサポートをする。

(6)頂上直下の急斜面は、500mフィックスする予定。

(7)C3にある食糧は、1月8日晚までの分量である。

1月1日 曇り、小雪

○井上、清水、米谷、宗森、広瀬、林、斯那次里：C3-C4-C3(9:30発)

○近藤、児玉、笹倉、工藤、王、李：C3-C1-C3(9:30発)

1月2日 大雪(予報では、小雪)、午後より強風

○1月1日午後より降雪が始まった(BCは中雪、C3は大雪)

全員停滞

1月3日 大雪、強風

○全員停滞

BC-C3交信

○登頂日を1月4日、5日から、8日へ延期する。

(1月6日、C3-C4入り)

○アタック隊(宋、孫、李、近藤、船原、広瀬)の6名、1次のみとする。

サポート隊はメンバー未定。

○BCの協力員でBC-C1の荷揚げをおこなう。

C3-C1-C3の荷揚げをおこなう。

最終交信(22:00)

○(徳欽在のドライバーを毎日、气象台に走らせ、飛来寺の中継車経由で天気予報をBCに送っていたが)1月4日の予報の問い合わせ。

——徳欽では、曇り、小雪の返答あり

○BC(張俊)とC3(李之雲)の最後の交信

李「現在C3は降雪多く、視界不良。雪は1.2m積もっている」

張「除雪せよ」

李「2~3時間おきにテントの外へ出て除雪している。このまま明日まで続けば、2mを越えるであろう」

—そのとき、トランシーバーの声に

変調をきたした—

(ワンワンと震えるような音声)

張「トランシーバーの電池不足だから、トランシーバーを替えよ」

李「トランシーバを替えたがどうか」

張「同様である。大雪による、湿気のせいではなからうか」

李「交信を終わりたい。再見」

張「再見」

22:15 交信を終了

1月3日夜の隊員配置は次の通りであった。

C3 17人

(日本隊員)井上治郎 佐々木哲男 清水久信

米谷佳晃 近藤裕史 宗森行生

広瀬 顕 船原尚武 児玉裕介

笹倉俊一 工藤俊二

(中国隊員)宋志義 孫維琦 李之雲 王建華

林文生 斯那次里

BC 12人

(中国隊員)陳尚仁(連絡官) 金俊喜 張 俊

高所協力隊員 6人 炊事員 3人

1月4日 小雪

BCの隊員たちは早朝からC3と無線の交信を試みるが応答がまったく無い。繰り返し呼びかけても返事が無いので、何事か異変が生じたとは考えられなかった。C3には10台以上の携帯用無線機(八重洲無線 FT23)があり、前夜も定時交信をしているので、無線機の故障で応答できない筈はない。17名全員が応答できない状態になっているとしか判断できない。陳尚仁連絡官は、C3との連絡途絶の報告をBCから無線で徳欽へ送り、徳欽から昆明の雲南省登山協会へ電話で伝えられ、さらに北京の中国登山協会へこの報がもたらされた。

京都の留守本部にこの連絡途絶の第一報が入ったのは1月5日正午過ぎであった。緊急召集がかかり、この日の夕方に留守を預かる会員の主だったものがルームに集まって、善

後策を協議した。京都では中国登山協会に頻りに電話連絡をとって情報収集に努めるとともに、隊員家族へ連絡をした。留守本部では救援隊派遣の可能性を探り、救援隊編成のための準備に着手した。

8. 救援隊の活動について

1月4日、C3からの連絡が途絶えた後、日中双方で綿密な協議を重ねながら様々な救援活動がおこなわれた。実際の救援活動には、北京から派遣された中国登山協会の救援隊と日本からの救援隊のほか、チベット登山協会から救援協力の申し出があり、チベット救援隊の3隊が携わった。北京、日本、ラサから救援隊が梅里雪山に向かうことになり、BC到着は別々となるため、救援活動は相互に連絡をとりつつ各救援隊が独自に行動することになった。以下日を追いながら、救援隊の行動および救援活動を報告する。

なお中国登山協会の救援隊、チベット登山協会の救援隊の行動の具体的な様子は日本側としては子細に把握できなかったため、日本からの救援隊の動きを中心に記述することになる。

1月6日

BC：残った中国隊員を中心にC3へ向かうための準備を開始した。張俊以下4名が装備、食料をC1へ荷揚げする。

北京：中国登山協会救援隊(王振華、于良璞、陳建軍、李致新、王勇峰、羅申)が

現地へ向け出発する。于良璞は現地連絡係りとして昆明に残り、他の隊員は

昆明を経て下関に至る。

京都：左右田総隊長、第1次隊の秘書長

倉智清司の北京入りの準備を進めるとともに、横山を中心に日本から送る救援隊の人選と日程の調整を始める。

1月7日

BC：現場は雪崩の危険性が高く、十分な人員がいいため行動を見合わせ、

救援隊の到着を待つこととなる。

北京救援隊：下関から中甸に至る。

1月8日

北京救援隊：中甸から徳欽に至る。王振華は徳欽での現地対策の中心となって

活動する。これによって徳欽、昆明に

登山経験豊富な中国登山協会のメンバーがすべての中継点に配置されたこと

になり、BCから北京、日本への連絡体制が確立される。

1月9日

北京：左右田、倉智が北京に向け出発する。北京で中国登山協会と今後の対応

について協議する。航空写真撮影の飛行機が北京を出発した。しかしC3上空は雲が多く有効な情報は得られな

かった。以後現地の天候を見つつ航空写真撮影をおこなうため、飛行機を常時

待機させることとなった。

1月10日

京都：留守本部を救援対策本部と改称し、連絡体制の整備、強化をはかる。救援

隊の装備食料などの資材の調達、梱包を山岳部現役が中心になっておこなう。

1月11日

北京：中国登山協会主席史占春、張江援、昆明で陣頭指揮にあたるため北京より

昆明入りする。日中の協議により日本から救援隊を派遣することを決定する。

1月12日

チベット：チベット登山協会から救援隊現地派遣の申し出があり、ラサより

レンチン・ピンツォ氏をリーダーとする

ガヤ、アクブ、タンゼン・ドルジ、ラクパ、ミマ・チェリンの6名の救援隊

が出発する。

1月13日

日本救援隊：救援隊第1陣として、横山宏太郎、浅野純一、牛田一成、門田勤、人見五郎、高井正成の6人が大阪を出

発する。北京にて左右田、倉智と合流し、現地の状況、今後の救援活動等について相談する。

北京救援隊：陳建軍ら7人が3900mまでルート工作を行う。

1月14日

日本救援隊：倉智を北京駐在の救援隊秘書長として北京に残し、左右田と横山ら第1陣は北京より昆明に移動する。昆明にて雲南省副省長陳立英氏に接見し、雲南省の全面的な支援を感謝する。この接見の折り、徳欽までの除雪が完了しておらず、依然不通である旨伝えられる。山田和人、毛利尚樹の2名が成田より北京に向けて出発する。

北京救援隊：救援隊8人は2班に分かれ午前BC発、4100mまで達した。天候は降雪がおさまらず、8日に張ったBC～C1間のザイルは雪に埋もれてしまい、4100m付近は雪崩の危険性が高い。

1月15日

日本救援隊：左右田、横山以下6人の救援隊は道路状況悪く昆明で待機することになる。史占春主席と会談し、今後の方針を相談する。日本側としては一日でも早く現場に直行したいのだが、道路状況が許さずいたしかたない。体育委員会の建物へ行き、本隊がデポしていった隊荷をチェックし、救援隊の荷物を整理する。

ハット救援隊：ラサから昼夜を問わず走り続け、早朝2時に徳欽に到着する。

1月16日

日本救援隊：明日出発ということが決まり、本日も昆明待機となった。昨日やり残した隊荷の整理にあてる。山田以下2人が昆明に到着し、救援隊と合流する。

ハット救援隊：徳欽で休養にあてる。

北京救援隊：BCでは、明永氷河を登り

C3を観察するため、李致新、王勇峰、羅申、協力員1名の4人が明永村へ移動する。

1月17日

ハット救援隊：徳欽を登ってBCに至り、北京救援隊と合流する。

日本救援隊：横山以下8人は昆明を出発。大理に向かう。左右田は全体の状況を把握し、意志決定するため昆明に残る。第2陣の救援隊として斎藤惇生、松林公蔵、吹田佳晴、太田岳史、永田龍、小林達明、菅野公一の7人が組織され、北京に向かう。

明永隊：明永氷河を登り始め、ルート工作をおこなって明永村に戻る。

1月18日

ハット救援隊：C1までのルート工作をおこない、BCに戻る。C1のテントは4張りとも約1.5mの雪に埋もれていた。

明永隊：明永村を立ち、明永氷河右岸3250mまで達する。

日本救援隊：横山隊、大理を立ち中旬に至る。斎藤隊、北京を立ち、昆明に至る。

1月19日

ハット隊：協力員を含む12人が3班に分かれ、C1に向け出発する。C1を通過後、視界悪化したため5000m地点で引き返し、C1へ帰着する。テントを掘り出して泊まる。

明永隊：4100m地点を目指して氷河を登る。

日本救援隊：横山隊、中旬を立ち徳欽に向かう。問題であった白馬山口は、北斜面で60cmほどの積雪があったが除雪が完了しており、日本製の4輪駆動車とトラックは比較的楽に通過できる。中国では車両の問題もあると思われるが、積雪に対して必要以上に神経質になるようだ。徳欽では、気温はかなり低い、周囲には雪はほとんどない。軒下の日陰にわずかに雪が残っている

程度である。おそらくこの雪は本隊が遭難したときの豪雪によるものと思われる。徳欽の対策本部は徳欽県の公安の建物の一室に置かれていた。BCとの無線連絡を常時とるとともに、昆明との電話回線も常時開けられているとのことである。この一室で昆明から駆けつけた楊必育本隊中国側総隊長、王振華氏らから現地の状況の報告をうける。斎藤隊は白馬山口通過が難しいとのこと、昆明に滞在する。

1月20日

ハット救援隊：C1滞在の3班のうち2班8人がC1を出発してC2を目指す。午前9時17分C1を出発した後、ほぼ一日中続いた降雪と胸までのラッセルに苦労しながら、17時20分、C2のある5300mのコルに到達する。当初C2を掘り出して、そこに泊まってC3に向かう計画であった。しかしテントが見つからず、日暮れがせまってきたのでやむなく引き返しC1に泊まることとなった。後で判明したことだが、C2のテントは本隊がC3に移動させていたのである。残りの1班はC1のまだ埋まっている残りのテントを雪の下から掘出し、BCに下る。

日本救援隊：横山隊は徳欽を登ってBCに向かう。徳欽を登つ際、梅里雪山を祭っている飛来寺を訪れる。本隊も入山前この寺を訪れており、僧侶も我々とともに本隊の無事を祈願してくれる。西当村まで車で入り、以後徒歩で入山する。雨崩村を過ぎたあたりから積雪があり、BC周辺では30cm以上の積雪がある。白馬山口以降、梅里雪山は厚い雲に覆われており、BCからもC1への氷河の末端が見える程度であった。本隊が使用していた小屋の一つを日本

側救援隊のベースハウスとする。本隊の装備類は残された中国隊員によって丁寧にまとめられている。本隊から参加している中国側隊員、スタッフは、精神的にも肉体的にも憔悴しており、疲労を隠せない状態にある。本隊の中国隊員からこれまでの経過と現在の状況を聞き、これからの方針を協議する。斎藤隊は、現地状況をうけて行動することとし、新たな展開が決定するまで昆明で待機することとなる。

1月21日

ハット救援隊：早朝から16時まで降雪があり、C1では新たに積雪60cmあり、C1の8名は停滞する。救援隊は本隊が各キャンプに残した食料などを見込んで救援活動に赴いたが、C1にあまり食料が残置されておらず、高所協力員4人がBCからC1への食糧補給に荷揚げする。BC～C1間の積雪は腰ぐらいい、新たにルート工作した固定ロープがすでに何箇所かにわたって切断されている。

明永隊：4300mまで達し、天候回復を待ったが視界悪く、現場の様子は見る事ができなかった。

日本救援隊：横山隊は、降雪のためBCで停滞する。時折響く上部氷河の雪崩の音を聞きながら、本隊のデポしていった装備、記録を整理する。

1月22日

ハット救援隊：C1に停滞していた救援隊は、積雪が1mに達し、再度上部へ向かうことは不可能になる。またC1でも雪崩の危険性が高まってきたため、9時C1を後にしてBCへ下る。戻ってきた隊員の報告では、積雪は大変深く行動は極めて困難である。またC1～C2間の標高4600～4700m付近に幅4～5mの新たなクレバスが発生してい

る。22日未明にはC 2付近で大規模な雪崩の音を聞いた、とのことである。

日本救援隊：横山隊は、今後の救援活動のため、装備等のデポのため4200m地点まで荷揚げをおこなう。途中C 1から下ってくるチベット救援隊と出会う。4200m地点は氷河末端になるが、上部がガスでまったく見えず、安全を考えそれ以上の行動は見合わせBCに下る。

明永隊：標高4400m地点まで登り現場の状況を観察する。C 3付近は雲に遮られて見えなかったが、C 3右上方の斜面に発生する雪崩を見る。

1月23日

救援隊：天候と雪の状態が悪いため、救援活動は見合わせ、停滞する。

1月24日

救援隊：悪天のため本日も救援活動はできない。連日悪天が続き、雪の状態も悪いため、救援隊は徳欽の前線基地へ一時退避する。

斎藤隊は、史占春氏と共に昆明を発ち大理に至る。

夜、横山は電話にて大理の斎藤へ現地状況を報告する。

1月25日

日本時間13時、昨夜来日中双方が協議した結果、救援活動の中止を決定する。その理由は、現場は悪天が続き救援隊の安全を確保することが困難になったこと、および、飛行機による空中撮影の写真を分析した結果、C 3周辺に大規模な雪崩の跡が見られることが新たに判明し、隊員が遭難したことは確実とみられることによる。

BC周辺：全救援隊BCを撤収し徳欽へ引き上げる。

徳欽：撤収のための隊荷の整理をする。

徳欽から協力員として参加し、後に隊員としてC 3入りした林文生、斯那次

里の遺児に、隊荷の中から文具や玩具を救援隊の心ばかりの慰めとして差し出す。

1月26日

救援隊：チベット救援隊長のレンチン・ピンツォ氏を含む日中の救援隊は徳欽を発って中旬に至る。中旬で斎藤隊、史占春氏の出迎えを受け合流する。チベット救援隊員は徳欽からラサに向け帰還する。

1月27日 中旬から下関に至る。

1月28日 下関から昆明に至る。

救援活動は、連日の悪天により十分な活動ができず、断腸の思いで山を降りねばならなかった。皮肉なことに徳欽を去る日、梅里雪山は快晴の中神々しいまでに光輝いていた。今回の救援活動では、チベット登山協会の申し出で強力な援軍を得ることができた。彼らは悪天候のなか、危険を承知でC 3へのルートを開き、C 2まで到達した。C 2へ上がる斜面では、スコップを用いて背丈にまで達する雪をラッセルしたという。チベット救援隊のリーダー、レンチン・ピンツォ氏は「チベットの登山家は宋志義をはじめとした中国登山協会によって育てられた。その恩に報いようとしたまでである。」とあくまで謙虚な態度で救援活動に携わってくれた。最後に、彼らの勇気と献身的な行動に感謝と尊敬の念を表したい。

9. 搜索調査活動

AACKヒマラヤ委員会では遭難原因の解明のため第3キャンプの位置まで上がり、現場および周辺を直接調査することが必要であると、中国登山協会と折衝し、その全面的な協力を得て、日中合同で搜索調査隊を派遣することになった。その目的は①第3キャンプ地点の確定、テント等の発見、②遭難原因の調査である。AACKとしては新しい試みであるが、雪の中に埋められているテント等

を発見するために、遺跡や埋蔵物の発見に使われているレーダー探知機、金属探知機をもってゆくことにした。3月中旬に新潟県妙高高原町で探知機のテストをおこない、また会員の紹介で現地に行きしてもらう専門家を探し、隊員として参加してもらうことができた。

派遣の時期は参加できる隊員の条件、準備に要する日数を考えて決定された。気象の面からいえば、月平均降水日数はなお多いが月平均降水量が真夏よりは少ない4月と5月を中心とする時期が選ばれた。また、家族の方々の徳欽訪問団が編成されることになったので、それに合わせるという意味ももっていた。

9. 1. 搜索調査隊の構成

隊の構成は次のように日本側12名、中国側29名の合計41名の大部隊である。昆明では楊必育（雲南省体育運動委員会副主任）、中旬では李樹芳（迪慶州副州長）、徳欽では取扎（徳欽県県長）ほかの地元当局者には、たいへんお世話になった。

〔日本側〕

- 隊長 岩坪 五郎 (57歳) 京都大学農学部教授
- 副隊長 牛田 一成 (36歳) 京都府立大学農学部助手
- 秘書長 伊藤 宏範 (33歳) 株式会社シー・ディー・アイ社員
- 隊員 窪田 順平 (33歳) 東京農工大学農学部助手
- 中川 潔 (33歳) 社団法人京都大学学士山岳会事務局
- 山田 和人 (31歳) 東洋エンジニアリング株式会社社員
- 中山 茂樹 (29歳) 蝶理株式会社社員
- 舟川 晋也 (26歳) 京都大学大学院農学研究科博士課程
- 内藤 望 (24歳) 京都大学大学院理学研究科修士課程
- 藤田 耕史 (22歳)

- 京都大学理学部学生
- 医師 木原 靖郎 (54歳) 京都刑務所医師
- 技師 利岡 徹馬 (32歳) 応用地質株式会社社員
- 〔中国側〕
- 隊長 曾 曙 生 (52歳) 中国登山協会常務副主席
- 副隊長 仁 青平 措 (48歳) 西藏登山協会
- 秘書長 陳 尚 仁 (52歳) 中国登山協会常務委員行政部長
- 副秘書長 張 俊 (34歳) 雲南省体育運動委員会
- 隊員 陳 建 軍 (36歳) 中国登山協会
- 李 致 新 (29歳) 〃
- 阿 克 布 (29歳) 西藏登山協会
- 丹 增 多 吉 (30歳) 〃
- 拉 巴 (26歳) 〃
- 洛 則 (29歳) 〃
- 加 措 (31歳) 〃
- 通 訳 李 豪 傑 (29歳) 中国登山協会
- 炊事員 賀 国 強 (25歳) 昆 明
- 楊 志 (21歳) 〃
- 高所協力員 楊 茂 榮 (40歳) 徳 欽
- 楊 紅 光 (23歳) 〃
- 拖 丁 (22歳) 〃
- 永 青 (23歳) 〃
- 若 旺 (26歳) 〃
- 彭 楚 (21歳) 〃
- 徳欽宿直人員 余 放 雄 (30歳) 雲南省体育運動委員会
- 劉 玉 林 (30歳) 〃
- 運 転 手 傳 忠 (33歳) 〃
- 繆 昆 裕 (40歳) 〃
- 董 斌 (25歳) 〃
- 郭 玉 德 (40歳) 〃

記者 劉文彪 (26歳) 体育報
徳欽滞在 李世沢 (50歳)

徳欽体育運動委員会

雨崩滞在 高虹 (30歳) ♪

9. 2. 行動の概要

日本からは北京を経由して昆明に、ラサからは成都を経由して昆明にそれぞれ入り、4月17日に合流した。ベースキャンプ入りしたのは26日である。

天候が悪く上部工作ができたのは、4月29日、5月7日の2日だけであった。最高到達点は4400m、第1キャンプまで行くことができなかった。雨、雪、雪崩を避けるためにベースキャンプで待機していたところ、雨期に突入したとの气象台からの発表があったので5月15日全員ベースキャンプを後にした。昆明からは香港と北京に分かれて行動し、日本側の最後のメンバーは6月6日に帰国した。

以下、日をおって行動概要を記す。

4月15日(月) 晴れ

日本側隊員10名、大阪空港発北京着。荷物は2100kg。北京空港では王鳳桐、曾曙生、陳尚仁さんら多数の出迎えを受け、天壇飯店に向かう。船便で送った荷物は昆明に到着したが、ガスだけは輸送中とのこと。

4月16日(火) 晴れ

CMAと岩坪、伊藤ら打ち合わせ。西藏登山協会のメンバー6名は成都から空路昆明入り。

4月17日(水) 晴れ

日本側10名、中国側7名、12時北京発、15時昆明着。夕方、馮樹森外事弁公室主任主催食事会。夜には北京、昆明、西藏、京都合同のミーティング。

4月18日(木) 晴れ

中国側に個人装備の配給。ザイル、隊荷、デポの整理。日中合同会議。

4月19日(金) 晴れ

雲南省气象台(昆明)と打ち合わせ。今年の

長期予報は例年より降水量は少なく、雨が降るのは4月末から5月初めに中規模、5月上旬の末から中旬中ごろにかけて小規模、5月下旬中規模、6月上旬中ごろに中規模から大雨。4月24日から6月5日にかけて毎日15時ラジオ放送で全省向けの天気予報をおこなう。徳欽での気象観測時刻は夏時間の3、9、15、21時。雨期予報の参考にしたいので日本から高層天気図のファクシミリを送ってほしいと要請される(結果的には参考にしなかったようである)。午後荷物の積み込み。大型トラック、小型トラックに全部の荷物が載りきらなかったため、食糧の一部を家族団とともに運んでもらうことにする。

4月20日(土) 晴れ

戴文忠主任らの見送りを受けて、9時出発。パジェロ2台、マイクロバス、大型トラック、小型トラック各1台合計5台。昼食を楚雄でとり、20時過ぎ暗くなりかけたところで大理賓館に到着した。ここから先では当分風呂、シャワーなし。

4月21日(日) 晴れのち曇り、中甸は一時雪

8時大理を出発。昼ごろマイクロバスが交通事故に遭う。途中パンクもしたので、予定より遅れて、19時過ぎ中甸に到着。江巴吉才書記ら要人の出迎えを受ける。夜、徳欽以降の日程、輸送についての会議。

4月22日(月) 晴れ

8時中甸を出発。パジェロのタイヤがパンクしていたので1台遅れて出発。奔子欄で昼食。白馬山口には少し雪が残っていた。マイクロバスを押して通す。16時過ぎ徳欽に到着。18時前に徳欽県人民政府を表敬訪問。夜、協力員の紹介がある。その後日中会議。

4月23日(火) 晴れのち雨

朝トラックの荷物をおろして整理。飛来寺への安全祈願、徳欽气象台への天気予報協力要請、西当へ明日の輸送の交渉、手配などいくつかのグループに分かれて行動する。午後には徳欽の大型トラックに荷物を積み込む。

夜には冷たい雨が降る。

4月24日(水) 曇り一時雨

朝、周囲の山の上部は雪で白くなっている。協力員1名と日本側6名は近道を通り、歩いて徳欽から西当まで行く。公路を大きく回る自動車とほとんど差がない。9時出発、12時到着。西当の小屋で李致新とコックが今回初めて料理する。標高は2250m。夜、トランシーバーと背負子を配給する。隊荷を5つに分けておく。西当には大きく分けて5つの集落があるからとか。日本側の荷物は約4トン、177個。中国側は約3トン。

※この日、家族団(BC入りする隊員2名含む)が大阪から中国に向けて出発。

4月25日(木) 小雨

村人の集団の間にはさまれるようにして隊員が分かれて出発。トップは9時、ラストは11時スタート。年齢の高い人は馬に乗る。山田の調子が悪い。標高3760mの拉松拉(峠)では雪が舞う。雨崩(標高3150m)には14時から16時にかけて到着する。小学校に荷物を預け、隊員は民家に泊まる。早々と就寝。

4月26日(金) 曇り一時雪

ベースキャンプの偵察のため、日中6名を先に出し、荷物と同時に後の部隊が出発。しかし、1日では全部の荷物が運べない。先発隊は12時に笑農ベースキャンプに到着。途中高巻き地点には雪が残っている。14時から16時にかけて後発隊が到着。夜、会議(今後毎日開くことにする)。夜になってまた雪がちらつく。昆明からのラジオによる天気予報は入感しなかった。

4月27日(土) 曇り

上部の観察とベースキャンプの整理。午前10時ごろからブロックの崩壊が起こり、午後に多くなる。昨日上がらなかった荷物が届く(いくつか足りなかったため張俊が雨崩まで下って捜すことにする)。

4月28日(日) 晴れのち曇り

昨日に引き続き上部の観察。日中10名で2

隊に分かれて3800m地点まで偵察、8時出発、12時帰着。ルートは2次隊および救援隊がとった氷河の落ち口の右側しかないと判断。ただし前回までのデポ地は雪崩の通り道なので変える必要がある。昨日届かなかった荷物が回収される。夜中に太子雪山からの大きな雪崩がある。北京・昆明、西藏、京都の順でこの日から雪崩の見張りをするために宿直態勢をとる。

4月29日(月) 曇りのち雨

7時、上部ルート工作隊(牛田、中山、藤田、ピンツォ、テンジン、李致新)出発。雪崩を避けるためブッシュ帯を通り時間をとられる。9時30分、荷上げ隊(山田、舟川、内藤、陳建軍、ジャーツォ、ヨンチン)出発。ルート工作隊、4020m地点にある岩の基部をデポ地とする。11時、ルート工作隊「ラッパ口」基部4150mに到着。小雨(上部ではみぞれ)が降り出す。12時、荷上げ隊デポ地に到着し、上部の観察をする。ピンツォ、中山がザイルを3本固定、14時。藤田がアップザイル用のザイル1本固定。14時30分3人とも基部に戻る。16時全員BCに帰着。

90年2月偵察隊の中山、91年1月救援隊のピンツォによると「ラッパ口」の地形はずいぶん変わっており、雪崩の通り道である。午前中の早い時間に通過する必要がある。

雨は次第に強くなる。23時になっても降りやまないため明日の行動は中止となる。

※この日、家族団は徳欽に到着。

4月30日(火) 雨のち雪

昨日からの雨は降りやまず、テントの周りには水浸し、小屋は雨漏り。BCからすぐ上はガスがかかって何も見えない。家族団が徳欽入りし、トランシーバを使っての励ましの声。夕方からは雪にかわる。夜になると降雪が強くなる。明日の行動も中止。

5月1日(水) みぞれのち曇り一時晴れ

昨日からの雪は朝になって小雨に変わる。10時からピンツォ指導の元に安全祈願。岩坪

と曾曙生、観音経を唱える。しばらくすると晴れ上がる。「ラッパ口」のルートは雪がかぶりすっかり変わっている。このころ家族団もそれまで見えていなかった梅里の山なみがきれいに見える。小1時間ほどでまたガスにおおわれみぞれに変わる。夕方から晴れてきたので、無線FAXとチェーンソーの試運転。

降雪量が多いので明日の行動は中止とする。

※この日、徳欽では家族団が慰霊式。

5月2日(木) 雨

夜明け前から雨。午後には強くなる。木原、中川が家族団と分かれ、徳欽を出発、雨崩に到着。

5月3日(金) 雪のち雨

朝昨日からの雨が雪に変わる。午後気温がやや高くなり雨となる。15時、木原、中川らBC入り。これで全隊員が揃った。

5月4日(土) 雨のち雪夜になり晴れ

朝からの雨が午後には雪。夕方雪が上がったので3700mまで偵察する。夜は満天の星空。新雪が多いので明日の行動は中止。

5月5日(日) 曇のち小雨

河原の残雪を利用して、レーダー、金属探知機、無線FAX、ゾンデ棒のテストをする。夕方からまた雨が降り出す。この日から夕食後に、中国人対象の日本語教室を始める。

5月6日(月) 曇りのち小雨

午前中は4000m以上にガスがかかって上部が見えない。午後には雨も降り出す。協力員の楊が高血圧のため下山。医者があるので病気を訴える隊員が次から次へとでてくる。夜になって晴れる。23時、明日の行動決定。

5月7日(火) 曇りのち雨

朝高曇り。6時、ラッセル隊(中川、窪田、山田、舟川、内藤)出発。6時30分、ルート工作隊(牛田、藤田、ピンツォ、テンジン)出発。7時30分荷上げ隊(李致新、ローツォ、アクブ、トーティン、ヨンチン、パンチュー、ルオーワン)出発。9時30分、ラッセル隊、

ルート工作隊前後して「ラッパ口」基部に到着、荷上げ隊はデポ地に着く。ラッセル隊、荷上げ隊は下降する。10時30分、ルート工作隊のピンツォが「ラッパ口」を登り始める。11時、荷上げ隊がBCに帰着。11時30分、ラッセル隊BC着。13時ルート工作隊4本の固定ザイルを取り付ける、4400m。雪が強くなってきたので急ぎ下降開始。13時30分基部に到着、途中数分間、BCからトランシーバーで呼んでも応答がないので心配する。15時BCに帰還する。雪のため明日の行動は中止。

5月8日(水) 雪のち雨

昨日からの雪は降りやまず、夕方になって雨に変わる。

5月9日(木) 雪のち雨

降雪、降雨のため行動中止。

※この日、家族団が北京から大阪へ帰国する。

5月10日(金) 曇りのち雨

天気予報では雨がやみそうになく、气象台によると今年は雨季の中休みがないと判断された。

5月11日(土) 曇りのち雨

4020mデポ地まで上がって荷物の回収をする、7時から10時まで10名が行動。

5月12日(日) 晴れのち小雨

10時、日本からの手紙、酒、たばこを捧げ追悼式をおこなう。午後からは荷物の整理。

5月13日(月) 雨

荷物の整理。

5月14日(火) 曇り一時小雨

早朝、太子雪山の斜面から大きな雪崩が起き、豪音が10分も続く。BCの整理。

夕方雨崩から何人かの村人とヤクが上がってくる。

5月15日(水) 晴れのち曇り

朝から良い天気である。皮肉なことにこんなことBCに入って初めてである。4トンの荷物を次々とし、隊員も彼らに付き添ってばらばらに出発。17時、西当に到着する。

5月16日(木) 晴れ

西当での荷分けに手間どり、出発が14時となる。道路が壊れトラックが使えないため、村人と馬、ロバの背をかりる。飛来寺までの途中で梅里雪山が初めて見えた。飛来寺からは自動車に乗り、徳欽まで。19時に到着。

5月17日(金) 雨

徳欽で荷物の整理。气象台を訪問。

5月18日(土) 晴れ

明け方、満天の星空であったので梅里を見に慰霊碑のところまで行くが、残念ながら山だけが雲におおわれ何も見えない。9時徳欽出発、16時中旬着。

5月19日(日) 晴れ

9時中旬出発、18時大理着。

5月20日(月) 晴れ

大理滞在。

5月21日(火) 晴れ

8時大理出発、途中事故渋滞のため3時間ほど停滞。21時昆明着。

5月22日(水) 晴れ

体育館で荷物の整理。

5月23日(木) 晴れ

木原、牛田、中川、窪田、山田、中国側1名昆明発、北京着。雲南省气象台と懇談。

5月24日(金) 晴れ

木原、牛田北京発、大阪着。中川、窪田北京発、成田着。

昆明滞在の日中隊員は休養。

5月25日(土) 晴れ

山田北京発、成田着。

昆明の隊員は休養。

5月26日(日)~31日(金) 晴れ

昆明滞在。各方面へのあいさつ、荷物の整理。

6月1日(土) 晴れ

中山、舟川、内藤、藤田昆明発、香港着。岩坪、伊藤、利岡、中国側5名昆明発、北京着。

6月2日(日) 晴れ

西藏隊、昆明発、成都着。

6月3日(月) 晴れ

2トンの荷物が昆明から北京に届く。日本側3名北京滞在。

6月4日(火) 晴れ

北京滞在。

6月5日(水) 曇り

懐柔県登山トレーニングセンターで、「山魂」碑の除幕式。

6月6日(木) 曇り

岩坪、伊藤、利岡、1200kgの荷物とともに北京発、大阪着。

以上で捜索調査隊の現地での行動はすべて終了した。天気が悪いのはある程度予想していたところだが、予想をはるかに上回って悪かったのである。BCからC1へあがる途中に右股氷河の左岸寄りの漏斗状の狭い氷壁を登らなければならないが、ここは上部で発生する雪崩の通路になっているので、降雪の直後は通れない。雪が降る日が多かったのでこの部分を乗り越えることができず、結局C1すら作ることができなかった。

この隊は地下レーダーと金属探知器という新兵器を用意して、C3位置の確定に利用することを計画したのだが、C3はおろかC2、C1にも到達できなかったわけで、まことに残念な結果に終わったのである。

12名の隊員が直接梅里雪山の山域を訪れて梅里の姿を自分の目で見てきたことと、同隊に参加した西藏登山協会のメンバーの人となりや山の実力を知ることができたのは、大きな収穫だったといえることができる。

10. 梅里雪山事故調査委員会の活動と調査結果の概要

第2次隊消息途絶の報を受けて急遽編成、派遣された救援隊が帰国した後、2月11日(月・祝)ACKヒマラヤ委員会が開かれ、救援隊の報告を受けたのち、事後対策が種々

協議された中で、事故調査委員会を設置することが決定された。50年余の歴史をもつAACKとしてこの未曾有の重大事故が発生した原因を徹底的に究明することは今の本会に課せられた重大な使命である。犠牲となった隊員たちの無念をはらすためにも、また、大きな関心をもって見ている社会に応えるためにも、事故調査委員会は責任の重い仕事に取り組むことになる。

2月24日(日)委員長を引き受けた近藤前会長を中心に9名が集まって準備会を開き、委員の人選について相談し、おおよその顔ぶれを決めた。その後に補充された委員をも含み、堀会長は次の各氏に委員を委嘱することになった。この中にはごく少数だが会員ではない京都大学山岳部員が含まれている。委員の氏名を当時の所属とともに次に示す。

近藤 良夫 委員長(京都大学名誉教授)
中島暢太郎(京都大学名誉教授)
山口 克(京都府立大学名誉教授)
斎藤 惇生(新河端病院)
平井 一正(神戸大学工学部)
酒井 敏明(帝塚山大学教養学部)
上尾庄一郎(塩野義製薬株式会社研究所)
小浜 維人(日本放送協会)
木村 雅昭(京都大学法学部)
西山 孝(京都大学工学部)
福寫 義宏(京都大学農学部)
上田 豊(名古屋大学水圏科学研究所)
中尾 正義(国立防災科学技術センター
長岡雪氷防災実験研究所)
田中 達吉(応用地質株式会社)
甲斐 邦男(石油資源開発株式会社)
横山宏太郎(北陸農業試験場)
森本 陸世(日本気象協会研究所)
松沢 哲郎(京都大学霊長類研究所)
倉智 清司(アオヤギ株式会社)
神園泰比古(株式会社ユニソク)
平田 和男(三菱京都病院)
牛田 一成(京都府立大学農学部)

幸島 司郎(東京工業大学理学部)
窪田 順平(東京農工大学農学部)
人見 五郎(鹿児島短期大学)
吹田啓一郎(京都大学工学部)
伊藤 宏範(株式会社シーディーアイ)
山田 和人(東洋エンジニアリング株式会社)
小林 正寛(大谷中高等学校)
中山 茂樹(蝶理株式会社)
月原 敏博(京都大学大学院文学研究科)
利岡 徹馬(応用地質株式会社)
内藤 望(京都大学大学院理学研究科)
舟川 晋也(京都大学大学院農学研究科)
睦好 正治(蝶理株式会社)
藤田 耕史(京都大学大学院理学研究科)
阿部 禎之(京都大学農学部学生)

この事故調査委員会は、必要に応じて委員以外のAACK会員に参考人として出席を求められることができることとし、また会員が委員会の聴講を希望するときにはそれを認めることにした。

以下に委員会の開催日時、場所、出席者数、おもな議題をあげておく。

第1回 3月24日(日) AACKルーム 23名出席
梅里雪山合同登山計画の概略、第2次登山隊の登高活動と事故発生以後の救援活動の報告があり、委員会のこれからの作業の進め方について検討を加えた。
第2回 3月31日(日) AACKルーム 24名出席
搜索調査隊の行動計画および調査活動の範囲と方法について検討を加えた。特に、微地形調査と測量、雪氷学的調査、気象データ、キャンプサイトの位置決定と掘出し作業の方法について活発に意見を交換した。
第3回 4月13日(土) AACKルーム 24名出席
搜索調査隊の編成と行動日程、および、

探索、測量、調査の目的と実行計画を決定した。測量・地形調査、雪氷調査方法について前回に続いて検討を加え、第3キャンプの位置が確定できた場合にも、危険が大きすぎるために遺体の搬出は意図しないことを確認した。

第4回 5月11日(土) AACKルーム 5名出席
梅里雪山峰登山許可取得の経緯、雲南小委員会発足時の動きなどにつき、当時の事情をよく知る左右田、倉智の両会員から説明を受け、詳細にわたり確認した。

第5回 6月23日(日) 京大会館 25名出席
4月26日～6月6日におこなわれた搜索調査隊の報告を聞いた。連日の降雪のため第1キャンプの位置にも到達できなかったのであるが、現地における搜索調査活動はこれで打ち切らざるを得ないことを確認した。事故調査は次の6グループで個別に進め、夏休み明けに全体の委員会で報告を聞き、討論することに決めた。①合同計画発端から現在までの経緯、②気象、③雪氷・雪崩、④登攀のタクティクス、⑤搜索調査用機械器具、⑥通信

第6回 9月7日(土) 京大会館 29名出席
前回委員会で編成された6グループが順次報告をし、全員で検討を加えた。登攀のタクティクスについては次回にもう一度することになった。報告書の体裁などについても若干の意見を交換した。

第7回 9月29日(日) AACKルーム 25名出席
登攀のタクティクスについて、計画段階のルート・キャンプ配置・行動スケジュールと実際の行動とを比較検討した。

第8回 10月27日(日) 京大会館 212号室 25名出席
第2次登山隊の行動計画と実際の行動とを詳細に検討して、問題点を整理した。主要な検討事項は次のとおりである。

- (1)第3キャンプの位置を適当と判断したこと。
- (2)前進根拠地を第2キャンプではなく第3キャンプに置き、そこに大半の登攀要員を集中させ、第1、第2の二つのキャンプを無人化したこと。
- (3)第1次アタックが失敗してから、頂上攻撃隊の規模を小さくし、日数の短縮化をはかるべきだと考えられるのに、方針の転換がおくれたこと。
- (4)前半は比較的ゆるやかなピッチで登攀を展開し、中間で一度幹部隊員を第2キャンプからベースキャンプまでおろしたこと。
- (5)ベースキャンプ詰めを予定されていた秘書長が、得意の中国語を活かすためとはいえ、最終局面では第3キャンプまであがったこと。

これら以外の点についても、隊が実際にとった行動のなかには、不審に思われるところがある。そうなった理由はあれこれ想像することはできるが、当事者の口から聞けない以上、われわれは正解を得ることができない。隊の行動自体も状況証拠によって推定することはできても、完全には明らかにし得ないところが残っている。

100パーセントの解明にはほど遠いが、事故調査委員会としてはこのあたりで調査を打ち切り、報告書の作成を鋭意進めることにした。

われわれが整理した記録と調査した結果は、犠牲者となった会員のご家族、友人、関係者の方々、また平生からAACKの事業に理解と支援を与えられている法人と個人の皆様がたに、なるべく早くお届けするべきであると考えたからである。

10. 2. 登攀のタクティクス

梅里雪山登山隊はAACKが北京、昆明の

二つの登山協会と組んだ合同隊であり、登山の経験者が少ない雲南からの参加者を登頂隊に入れるのにそれ相応の配慮をする必要があった。また最近10年間のAACK隊がカンペンチン、ナムナニ、ムスターグアタ、シシヤパンマなどの山で数人ずつの登頂者を出したこともあって、全員またはなるべく多くの隊員に登頂させたいという考えで行動計画を作成していた。登路、高所キャンプの数とそのおよその位置も偵察によってほぼ定まっていた。

第2次隊が実際にとった行動は佐々木秘書長がBCに滞在していた12月27日までについてはかれが克明に記録していた遠征隊日誌により知ることができる。28日から1月3日までについてもBCに留まっていた中国側隊員との無電の交信によって、あらましかわっている。ただし、その目的や意図を正確に知ることができない部分が残るので不審に思うのである。(1)例えば、第2キャンプと第3キャンプの位置の選定について中国側と日本側のあいだで意見の一致を見るのに時間がかかっている。最前線にいた隊員が協議のためにBCまで下りたために日程が数日のびたと思われる。(2)最終段階で秘書長が前進根拠地まで上がった。(3)前進根拠地をC2ではなくC3にしたためにC1とC2がともに無人テントになった。(4)12月26日におこなわれた第1次頂上攻撃が時間切れで失敗に終わったあと、C3で待機中に登頂隊の再編成がおこなわれたが、他に選択肢はなかったのだろうか。

10. 3. 気象と天候

梅里雪山の東約20km、メコン河を隔てた標高3200mのところに徳欽気象観測所がある。先遣隊以来われわれはこの気象站と接触し、月平均気温、月降水量、月降水日数などの気象データを教えてもらうことができた。降水日数が最小なのは12月、これに次ぐのが11月、1月、10月である。第1次隊は白馬山

口が冬に降雪のために閉鎖される前の10月と11月を選んだのであるが、偵察隊はこの峠が閉鎖されたとしても他に撤収路が得られるとの情報をもたらしたので、第2次隊は登山の時期として12月～1月を選んだのである。冬は統計的に降水量が少なく晴天日が多いが、気温は当然低い。冬には偏西風が南下してジェット気流と呼ばれる強風が高山地域に吹く。この地域はヒマラヤ・チベットの巨大高原地帯の東端に位置するので冬にはこの山塊を北と南に迂回した偏西風が合流するところにあたる。このうち南寄りの風はベンガル湾から水蒸気を運搬してくる。深い気圧の谷がチベット高原におつくとコールド・サージと呼ばれるシベリア寒気団からの寒気の流出がチベット高原の北、東縁に沿って起こり、この地域周辺で湿潤な気流と接触することにより異常な低温、降雪をもたらすという。

このような冬季の気候の特徴をつかんで山に登らなければならない。

第2次隊がBCを建設した12月1日から1月4日までの期間晴天の日が続き、顕著な悪天候は3回、すなわち12月1日～2日、18日～19日、1月2日～4日あった。好天を利用して来たから、登高は順調に進められた。事実、12月28日午後1時には頂上直下270mまで肉薄することができたのである。

この隊には井上隊長、近藤隊員と気象の専門家が2人いて、気象ファクスを受信し、徳欽気象站から天気予報が無電でBCに送られる態勢ができていた。天気予報はよくできていたと考えられる。12月25日の佐々木日誌には「悪天は30日ぐらゐから始まり、どのくらい続くかは、現在の情報では不明とのことである。徳欽気象台とは3日ほどちがいがあがある……」また、同じく26日には「(井上の)予想によれば、天気は30日から崩れ、規模は我々のベースキャンプ入り時の悪天程度と予想されるという。ただこの日北京気象台からの予想天気図はどうしたことか白紙で、昨日

のものに基づく予報とのことである。……」の記録がある。

実際には、12月28日第1次アタック隊5名が天候悪化のため6470mから下山をはじめ、固定ロープの場所がわからないためにツェルトに入って待機したりして、C4帰着が深夜の23時過ぎとなり、同日C4に上がった第2次アタック隊7名とともに29日と30日にC4を空けてC3におりたのである。1月1日は午後から降雪、2日と3日は大雪で、2日午後から強風、3日も強風であった。

10. 4. 雪崩

今回の事故原因としては、得られる限りの情報から、雪崩が有力視されている。しかし、われわれは事故に直結した雪崩の発生地点、走路、規模などについての確証となる情報をもたない。また1月に撮影された航空写真も交信途絶後日数を経ているため、その間の積雪におおわれたと考えられ、雪氷学的判断材料としては不十分である。あくまで仮定の域を出ないが、当時の気象・雪氷状況、地形条件、および雪氷学的見地からの考察により検討した。

C3を埋没させた雪崩は、当時の気温が-10～-25度Cの範囲内であったと推測されるので、低温下での完全な乾雪であったはずである。地形や斜面の傾斜からみて、点発生ではなく面発生であったろう。第2バットレスと第3バットレスおよび両者の中間の斜面の急なことからもみて、古い積雪の上に新しい降雪が表層をなし、それが落下した雪崩であると考えられる。つまり、面発生乾雪表層雪崩と分類できる、雪崩の中でも最も高速で速くまで届くタイプである。

一方、登路として使った第2バットレス、その西側に落ちる第3バットレス、両者のあいだの谷、明永氷河上部雪原上の溝状の陥没部、第3キャンプの位置それぞれの地形的特徴および位置関係から、雪崩が発生した地点と推定される走路を検討した。極端にスピー

ドがおそい全層雪崩から抵抗が著しく小さくスピードが早い雪崩まで、慣性の効果がことなる各種の雪崩の走路を推定して地形図上に描いてみると、慣性の効果が極端に大きい場合にはその雪崩はC3の位置にまで届くことがわかった。1938年の黒部峡志合谷の雪崩、1984年の三国川黒又沢の雪崩のように、まさかと思うほど遠距離まで雪崩が到達したり、考えられないほど谷筋から離れた場所まで雪崩が乗り上げてきて、人命や集落に大きな被害を与えたように、上部雪原中央部の陥没した谷状の凹地を乗り越えてキャンプサイトを直撃する雪崩があり得ることを認めざるを得ない。

梅里雪山の事故の原因が雪崩であったとすれば、それは第2、第3バットレス間のルンゼを流下してきた乾雪表層雪崩と考えられる。上部雪原の谷状地形が雪崩を停止させたり、雪崩の走路をそらせたりする効果があるいは過大に評価していた可能性はある。事実12月20日「C3が対岸のバットレス尾根からの(2号尾根と3号尾根の中間あたり)ブロック雪崩の爆風を受け、一瞬雪煙の中に姿を没したのであった。デブリもC3から200mは離れており、間に谷もあり、C3はもっと大規模なものでも影響を受けないと報告してきた……」(佐々木日誌)という経験もしていたのだが、このことがC3位置の安全さについて過信を抱かせた可能性も考えられる。

10. 5. 事故調査委員会の調査結果の要約

(1) 登攀の時期と気象の予測

88年の先遣隊、89年の第1次登山隊、90年春の偵察隊のあとをうけて送り出されたこの第2次登山隊はそれまでの3隊が得た知識と経験を最大限に生かすとともに、入手した徳欽気象台の各種気象データを分析した結果、12月、1月という厳冬期を選んだ。徳欽気象台は梅里雪山の東方約20km、瀾滄江の深い溪谷をへだてた約3200mの高所にあり、ここ以外に参考となる長期観測データはない。登

山隊のベースキャンプは約3500mであり、第3キャンプ以上の登攀は5000m以上の高所でおこなわれる。第2次登山隊は厳冬期の低温と強風に対しては十分に準備をしていた。天気は、少なくとも登山活動の前半は、予想どおりたいへん好かった。12月中は晴天の日が多く、雪が降ったのは3回だけであった。

この隊には気象の専門家が2人いた。ベースキャンプでずっと使用されていた気象ファックスは登山の最終段階に入って第3キャンプに揚げられた。北京からの予想天気図が受信され、天気予報に利用された。また徳欽気象台からの天気予報も受信していた。梅里雪山地域では1月2日から4日にかけて気圧の谷が通過し、大雪が降った。この時の降雪は徳欽県を含め慶慶族自治州のかなりの範囲で8年ぶりの豪雪であったといわれている。一方、徳欽気象台の降水量のデータは90年12月初めのそれよりも少ない数字である。しかし、第3キャンプ周辺では雪は徳欽の2倍または3倍以上降ったものと推定して差し支えないだろう。

なお、ヒマラヤの高峰のほとんどが東西方向の山脈にあるのに対し、梅里雪山は南北方向に連なる怒江と瀾滄江の分水嶺山脈上に位置している。このことは、ベンガル湾からの湿潤な気流をさえぎる障壁がこの地域には存在しないことを意味し、梅里雪山にはこれとほぼ同じ緯度にあるネパールやブータンのヒマラヤの高峰よりも多くの雪が降り、したがって氷河がより低所まで流下していることを説明する。またシベリア寒気団からの寒気の流出、すなわちコールドサージがチベット高原東縁に異常な低温、降雪をもたらすことも、注意すべきであろう。

(2) 登攀ルートと雪崩

明永氷河(ナイノゴル氷河)上部雪原および、主稜から東斜面に懸かる雪稜が登路として有望であることは、第1次登山隊によって報告された。また雨崩谷—雨崩氷河—明永氷

河上部雪原のルートは、偵察隊によって開拓されていた。未知のまま残されたのは、第2バットレスそのものと、主稜線ジャンクションから頂上までの急な雪壁を含む高度差約750mの主稜線の登攀の可能性であった。

明永氷河上の高度約5100mに建設された第3キャンプの位置の選定は大きな問題である。これをどこに選ぶかについて、日本側、中国側の隊員間に意見が分かれ、幹部隊員たちはいったんベースキャンプまで下りて会議を開いた。これは相互に言葉が十分に通じなかったことによる誤解が主な原因で、協議の結果合意に達した。その位置は北流する明永氷河上流部の表面にできた谷状の凹部よりは第2キャンプに寄ったところと説明されているが、正確な位置はいまだにわからない。結果的にいえば、この数日のロスがなければ、悪天候の周期がくる前に登頂が終わっていた可能性が考えられる。

12月20日に第2と第3バットレスのあいだの上部斜面からの氷塊の崩落によって発生したと推定される雪崩が落ちて、その爆風がこのキャンプを襲った。この雪崩のデブリはキャンプより谷をへだてて200m離れた地点で止まった。結果論ではあるが、この経験が、第3キャンプの安全性に対する確信を隊員たちに与えたのではないかという疑問が残る。

1月2日、3日に、隊員の誰もが予想していなかった大量の雪が降り、3日夜から4日朝までの間に乾雪表層雪崩が発生したと推定される。雪の質、気温、風、地形の微細な特徴など、具体的な条件は一切不明であるが、この雪崩が異常に慣性効果が大いものであったために、運ばれてきた雪が第3キャンプまで達し、隊員たちをテントもろとも埋めてしまったと考えざるを得ない。

(3) 各キャンプの位置、登攀隊員の数、頂上アタック隊の編成

当初は日中同数8名ずつの登攀隊員が予定されていたが、北京と昆明の両方を合わせて

6名程度しか参加できないことがわかり、実働人員は4人編成3班の想定で登山計画が作成された。現実には、登山期間の前半には高度馴化が十分にできなかった隊員があり、作戦の修正が必要になった。一方、高所協力員は予定より1名多く参加し、その一部は予定外の第3キャンプまでの荷揚げに従事してくれた。

第1キャンプは雨崩氷河右股の中段にあるクレバス帯の中に建設され、上部への荷揚げが終了した段階で無人化された。雨崩氷河源頭のコルの明永氷河側に建設された第2キャンプは、登攀ルート上半部の見通しが良く、ベースキャンプと第3キャンプ以上との連絡中継点にもなるので、前進根拠地として使うことが予定されていた。しかし、第3キャンプからベースキャンプまでトランシーバーで通話できることがわかってから、必要量の荷物を上部へ揚げてしまったあとは常駐しないことが決定された。ただしルートが第4キャンプから先へ延びた際には、上部キャンプへの指示および連絡用として再び使用される筈であった。

梅里雪山の登山は、ナムナニ登山隊の成功に続く日中友好第2次合同学術登山計画として、企画され実行されたものである。当初から、学士山岳会、中国登山協会、雲南省登山協会の三者は、合同して頂上アタックをする計画であった。中国登山協会から参加した3名は豊富な山歴をもつ優秀な登山家たちである。このうち金俊喜は体調が悪くなかったので、登攀隊員からはずれた。雲南省登山協会の王建华と李之雲は登山の経験はもたなかったが、88年の先遣隊以来すべての隊に参加し、経験を積み、氷雪技術はだんだんと上達していた。張俊は偵察隊には参加せず今回が3度目であるが、第1次登山隊では主に斯農での任務だったので登山の経験が乏しく、登攀には参加できなかった。そのために雲南側の登攀隊員として、徳欽県から参加したチベッ

ト族の高所協力員のなかから優秀な者を隊員に昇格させる予定になっていた。

第2バットレスを登りきった主稜線上の高度約6100mに第4キャンプを建設し、必要があれば主稜線上に第5キャンプを作る計画であった。しかし、バットレス上端に高さ約10mの氷壁があり最後の3~4mがオーバーハングになっていたために、荷揚げに時間がかかりすぎることがわかり、第4キャンプは氷壁の下に建設されることになった。

井上隊長は12月25日の北京からの予想天気図で30日から悪天候の周期が訪れることを知り、28日に日本側3名、北京側2名の第1次アタック隊を送ることを決定した。この日第4キャンプを出発した5名は正午過ぎには6470mに到達したが、突然に天候が悪化した。かれらはガスにまかれて下山路を見失い、深夜近くに第4キャンプに帰還した。この時には第2次アタック隊員7名が第4キャンプに詰めていたが、かれらが第1次隊の下山を直接支援できなかった理由はよくわからない。

この後12名は、年末にくると予報された悪天候をやり過ごすために、第3キャンプに下りた。この時にたてられた作戦は、1月3日に第5キャンプを約6300mに作り、4日と5日に連続して2隊11名を頂上に向かわせるというものであった。実際の天気は、12月30日から1月1日前半まで雲が多く、強風が吹いたが雪は降らず、降雪が始まったのは1日後半もしくは夜であった。雪は2日から3日にかけて降り続いた。悪天候は予報より3日遅れて梅里雪山地域を訪れたわけである。

(4) リーダーシップとタクティクス

梅里雪山の登山が日中3団体の合同計画として実施されたことは、結果としてこの隊の行動に種々の面で影響を与えた。ここでは、主に学士山岳会の立場に立ち、また事故の原因に直接関連しないと思われることは省略して、述べることにしたい。

交通不便な未開放地域内にあり、かつチベ

ット仏教の聖山であるこの山に接近し登攀を試みる企てを、合同計画以外のやり方で成立させることは、いうまでもなく、きわめて困難である。合同計画はいわば所与の条件であり、すべてはここから出発したのである。また具体的に学士山岳会に有利であったこととして、ベースキャンプまでの人員と物資の輸送、高所協力員の選定という難問題が、ともに中国側に全面的に依存することができたことなど、数多くあげられる。

一方、逆に不利であったこととして、登山の経験の少ない雲南側隊員を登頂メンバーに加えるために、大きな努力を払わなければならなかったことがあげられよう。この地域のチベット族は4500mあたりまでの高所を日常生活の舞台にしているので、協力員たちは山での行動力が強い。しかし、ピッケル、アイゼン、ザイルを使う登山はかれらにとっては初めての経験である。氷河上でルートが固定し、必要なフィックス・ロープが張ってあるところでは、隊員1~2名が常にいっしょに行動し、指導、支援する体制がとられた。このうち技術がすぐれ、隊員たちの信望があつかった林文生と斯那次里は最終段階で隊員に昇格した。王建華、李之雲、林文生、斯那次里の4名をいかに上部の登攀活動に参加させるかが、アタック隊の編成を考える際に大きな問題であった。

言葉の問題も重要である。先遣隊以来通訳として参加した王建華は完全な日本語を話す。88年の三国合同チョモランマ隊隊員で、今回が4度目になる孫維琦は、ある程度日本語を聞き、話すことができた。宋志義と李之雲は日本語がわからない。前半の段階では隊員間の意志疎通がうまくゆかなかつたので、井上隊長がいろいろと配慮し、後半に入ったころには良いチームワークができたように思われる。それにもかかわらず、中国語に堪能な佐々木秘書長が最終段階で第3キャンプに上がったのは、頂上アタックをめぐる班の編

成やこまかな作戦の指示に、言葉の面で完璧を期したためであろうと考えられる。

遠征登山隊においては隊長が最終的な責任を負わねばならない。本登山隊の隊員たちはそれぞれがすぐれた資質をもち、得意の分野をもつ。同時にかれらには欠点もあり、苦手とする領域もある筈である。30日間余の登山生活のなかで、精神的にも肉体的にも好不調の波があつて当然である。これらの隊員たちを統率し、各自の能力と知恵をうまく引き出し、登頂という所期の目的に向かって一致協力して努力するために、隊長はきわめて重大な責任を負っているのである。

(5) 登山隊を送りだした学士山岳会

まず登山隊の必要とする資金については、日中合同学術登山隊後援会を作り、各界のご協力を得て計画の実現に努力した。左右田総隊長は日本側の登山隊を現地へ送り込む責任者として、隊員の確保と募金に活躍した。学術登山計画全体の大綱および隊の編成は、理事会の責任において決定された。

現実の登山と学術調査の行動計画、隊員の役割分担、装備、食糧、各種機材の数量的検討や実際の調達作業などは、隊員と隊員候補者からなる隊員会議が策定し、後援会の援助を得て、隊員ならびに学士山岳会会員、京大山岳部部員および京大探検部部員がその実行に当たった。

AACKがこれまでに派遣した、チョゴリザ(1958)、ノシャック(1960)、サルトロカンリ(1962)、ヤルン・カン(1973)、カンベンチン(1982)の各遠征隊の場合には、その行動計画は最重要の問題として、隊員会議ではなく、頻りに開かれたAACKヒマラヤ委員会において、検討と決定がなされていたのである。ところが、同志社大学山岳会、中国登山協会との合同計画として実施されたナムニ遠征隊(1985)では、AACKだけで一義的に決定できないという理由から、行動計画の検討はヒマラヤ委員会の手を離れた。

梅里雪山学術登山計画は1988年以来、合同計画のため、中国側と折衝や協議を頻繁におこなう必要があつたという事情もあり、諸般の検討と決定はもっぱら隊員会議においておこなわれ、必要が生じた場合にだけ、理事会またはヒマラヤ委員会が開かれることになったのである。さらに第2次登山隊では、これと同じ時期にヒマラヤ医学学術登山隊が計画され、順次実施に移されたというこれまでになかった新しい事情があつた。そのため、会員のなかの活動的なメンバーの多くは、いずれかの隊の準備に奔走し、あるいは別の隊の後始末に追われるという状況が生まれていた。ヒマラヤ委員会の開催を考える必要性も感じられず、その余裕もなかつたのであろうか。ともかく、隊員会議がほとんどすべての実行計画の検討と決定をしたのである。できるだけ冷静に第三者の目で問題点を指摘し、代替案を提示することができる機構上の積極的な歯止めを欠いていたと指摘されても、反論の余地はない。

梅里雪山の登山が困難なものになるだろうことは、充分認識されていたと考えられる。登山計画の基本的部分、すなわち、登攀ルート、キャンプの位置と数、頂上アタックの戦術などについては、ヒマラヤ委員会の席で、隊員以外の会員も参加して慎重に検討を加え、議論を尽くした上で決定するべきであつたと思われる。

おわりに

『事故調査報告書』にも述べられているのだが、まだ調査は完結するに至っていない。第2次隊が何故遭難したのか、気象の変化を的確に予知できなかったのか、第3キャンプの位置が雪崩に対してどの程度に安全でありまたは危険であつたのか、幾つもの解答が得られない問題が残っている。1990年12月末から91年1月4日までの天候の推移を正確に復元するのは不可能である。しかし、C3を作

つたと推定できる地点を訪れることができたならば、また、第2バットレスや主稜線の状態に近い場所に立って観察することができたならば、事故に結びつく問題点を明らかにすることができるに相違ない。

搜索調査隊はこの期待をもって現地に向かったのだが、いかんせん、あまりにも天気が悪すぎて雨崩氷河右股に登路を切り開くことができなかつた。このルートは90年春の偵察隊が開拓したものである。かれらは2月28日にBCを建設し、3月18日同地を離れるまでの17日間の期間に、C1、C2を作り、第2バットレスを観察し、さらに南の太子雪山のコルに達して頂上からチベット側へ落ちる西稜上部を遠望することができたのである。

搜索調査隊は4月26日にBCを建設、5月15日同地を離れるまでの19日の期間に毎日のように雨、みぞれ、または雪が降り、C1の位置まで登ることもできなかつた。まことに時期を選ぶのが大きな問題なのである。

AACKが梅里雪山をくわれわれの山>と考へ、梅里雪山がわれわれに特別な意味をもつ山と見ても、それは至極当然なことである。サルトロカンリやヤルンカンのように、登山許可申請を毎年出し続け、現地にたびたび交渉係を送って苦心折衝の末やっと取得した許可ではなかつた。許可そのものはふとした偶然で舞い込んだような印象を捨てることができない。しかし、そうではあつても、AACKが北京、昆明の両団体と対等の立場で編成した合同登山隊であり、事前の協議や議定書作成のための詰めの交渉には双方の代表者がたびたび往来した結果、やっと結実した苦勞の連続であつた。

先遣隊、科学隊、第1次登山隊、偵察隊の各隊が切り開いた道を、第2次隊は万全の準備を整え、総仕上げの意気込みで山に入ったのである。そのあと不慮の事態が発生し、救援隊が駆けつけ、搜索調査隊も現地を訪れた。今、煩をいとわずに梅里雪山各隊の日本側隊

ブータンその後

栗田靖之・月原敏博

員の人数をあげてみよう。先遣隊は5名、科学隊は12名（報道4名を含む）、第1次隊は14名、偵察隊は4名、第2次隊は12名、救援隊は17名、捜索調査隊は12名で、合計76名の多きにのぼる。これはもちろん延べ人数であり、4回出かけた広瀬、3回出かけた米谷、児玉、工藤など2回以上参加した隊員を差し引いても、実人数は50名に近い筈である。

AACKが再び梅里雪山に挑戦するとすれば、それはいつのことになるのだろうか。

〔付記〕 はじめにお断りしたように、本稿は既刊の報告書（下記文献の1と2）に発表された文章から適切なものを選び出して配列し、取舍選択したものをベースとしている。全体の流れがよくわかるように、書き加えた部分も多い。もともとなった原稿を執筆した関係者、特に、事故調査委員会の各委員にお礼を申し上げる。

文 献

- 1) 京都大学学士山岳会梅里雪山事故調査委員会編『梅里雪山事故調査報告書』183pp., 1992.01.30.
- 2) 京都大学学士山岳会日中合同梅里雪山学術登山隊編『日中合同梅里雪山学術登山隊報告書』237pp., 1992.10.31.
- 3) 酒井 敏明 「梅里雪山峰の登攀と遭難」『山岳第86年』 pp104~111.
- 4) 斎藤 清明 「梅里雪山に消えた一七人」『山と溪谷』1992年2月号, pp179~186.
- 5) 京都大学学士山岳会梅里雪山追悼文集編集委員会編『梅里雪山』471pp., 1992.11.30.

1. はじめに

AACK会員、堀了平隊長のもとに、京大山岳部が組織した「京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊」が、マサ・コン峰に初登頂（1985年）してから9年が経った。3年ほど続いた計画の、最初の踏査隊（1983年）から数えればもう10年にも余る。「その後どうなっているのか」、そんな声も聞かれるようになった。そこで、マサ・コン以後の同隊隊員とブータンとの関係、その後のブータン事情を執筆者らの知る範囲で記す。

2. カルマ・ドルジ氏の来日とドチュ・ラ双眼鏡設置

まずはじめに、遠征が終わった1年後の1986年12月には、『偉大なる獅子マサ・コン峰登頂』（堀了平）が講談社から刊行された。この本は、公式記録というよりも、我々の活動を支援していただいた方々に報告することを目的として、刊行されたものである。幸い評判もよくいろいろな書評にも取り上げられ、好評を博した。なお文末に書評として取り上げられた雑誌名を掲載した。

マサ・コン隊とブータンとの、その後の公式の関係として記録すべきは、1986年の年末から1987年正月にかけてカルマ・ドルジ氏を京都へ招待したこと、そして1987年夏にドチュ・ラに双眼鏡を設置したことだ。2つの行事は、ともに隊側の負担による「マサ・コン登頂記念事業」といえ、マサ・コン隊ひいては京都大学からブータン側、より正確にはブータン観光公社（BTC）へと贈られた「御礼」といえるものだ。2つの行事とも、その実現はマサ・コン隊事務局長人見五郎の手腕によ

るところが大きい。

京都へ呼んだカルマ・ドルジは、マサ・コン隊がもっとも世話になったブータン人だ。彼は、他の国でならリエゾン・オフィサーに相当する同隊のガイドだったが、こちらが雇ったシェルパ・サダーのごとく、可能な限り隊に奉仕してくれた。また同時に、唯一のブータン人登山隊員として一緒にマサ・コン峰の氷壁に取り付いた仲間でもあった。ブータン旅行では、一般にガイドは高圧的に振る舞いはしないが、その手本のような人といつてよい。

彼は、山岳部の笹ヶ峰スキー合宿を挟むかたちで2週間ほど来日し、京都では人見の計らいでYMCA地塩寮の一室に生活した。訪日目的は、親善と登山研修であった。マサ・コン隊隊員や山岳部現役部員が接待にあたり、金毘羅山での岩登り・アイゼントレーニングのほか、笹ヶ峰でのスキー・雪山生活技術トレーニングのメニューをこなした。飛行機に乗っての海外旅行は初めてだったが、日本では驚きの連続だったようだが、ブータン人初の登山家として登山技術にはたいそう自信をつけたらしい。また、こちらの用意した小遣いでビデオ一式を秋葉原で購入し、それを家族への土産として持ち帰った（このビデオには後日談がある。初めは家族皆大喜びだったが、カルマの家にはビデオを見に来る人がひっきりなしにやって来たため、それに参った彼はついにビデオを売り払ったのだ）。

さて、その年の夏に、ブータン・ヒマラヤを一望できるドチュ・ラという峠（標高約3000m）に双眼鏡を設置する目的で、人見五郎と吹田啓一郎が短期間ブータンを訪れた。

双眼鏡本体は人見が交渉して日本光学工業(株)から安く分けてもらい、その架台(鉄柱)と、双眼鏡に取り付ける記念プレートは吹田が準備した。この時の2人のブータン国内滞在費は、ブータン側(BTC)が負担したという。

双眼鏡は、観光公社が運営するドチュ・ラのレストハウス内に設置された。床の一部を切り取ってコンクリートで堅固な基礎工事を施した上に、大きな双眼鏡が据え付けられた。双眼鏡から覗く方向はガラス窓も開閉できる。完成を祝った様子は週刊新聞「KUENSEL」(1987年12月12日)にも大きく報道された。晴れていれば、ブータン・ヒマラヤの大パノラマが楽しめる場所だから、京大関係者ならずとも訪ブの際には是非行ってほしい名所だ。レストハウス(木造)には、寝袋等持参すれば宿泊も可能のはずだ。そこからは、独立峰マサ・コンはとりわけ大きく見える。

3. ブータンの登山情勢

以上の公式行事以外でも、マサ・コン関係者とブータンとの関係はとだえていない。マサ・コン登山から5年ほどの、80年代後半から90年頃に限っても、ブータンを学問のフィールドとしてきたマサ・コン隊副隊長の栗田靖之がJICAなどの関係で、また人見が西遊旅行の関係などで何度か訪れている。しかし、京大の山グループとしての活動は、国家としてのブータンの国際化が大幅に進むのとは反対に、やや低調なままで今日に至る。

周知のように、ブータンは、80年代を通じて国連関係機関やインド以外の国との2国間関係を大幅に強化し、日本とブータンとの関係をも、1986年には国交関係が結ばれ、現在日本国内にも名誉総領事館がある。また、1987年からは青年海外協力隊隊員の滞在も始まり、その隊員数は現在では数十人に達する。援助関係でブータン国内にいる外国人の数

は、驚くほど増えている。

山グループとしての活動が低調だった背景には、最高峰ガンカー・プンスムが未踏のまま再び閉鎖され、チベット国境沿いの高峰の新たな登山許可が得られないことや、寺院内部の見学が以前より難しくなったことに象徴されるように、あえて観光拡大を図らない国家政策がある。また、こちらも他の山のプランで忙しかった。マサ・コンのメンバーだけでいっても、崑崙(1988年:人見五郎・伊藤宏範・毛利尚樹)、チョモランマ(1988年JAC隊:神園泰比古)、ムスターグ・アタ(1989年:中山茂樹)、シシャパンマ(1990年:堀了平・松林公蔵・中山茂樹・高井正成・月原敏博)、梅里雪山(1989-90年:栗田靖之・横山宏太郎・中山茂樹・月原敏博)、という具合だ。

マサ・コン以後に解禁されて登られた山には、マサ・コンの南東に位置するツェンダ・カン(高度計で標高約6300m 千葉大学隊が1991年に初登頂)があるが、ほかに特にめばしいものはない。1993年夏、現地で聞いたところでは、マサ・コンにもその後幾つかの登山隊がトライしたが、いまだに第2登はされていない。このように、ブータン・ヒマラヤの高峰は、ジチュ・ダケ、マサ・コン、ツェンダ・カンなど、ブータン側が国境より内側にあると確信している既登峰数座を除けば明確な解禁の見通しもなく、マサ・コン当時とさほど状況は変わっていない。

これには中国との国境確定交渉も関係している。1984年より、ブータンと中国は毎年代表団を交互に派遣しながら交渉を進めており、ブータン-チベット「国境」上の高峰を解禁しない点では、中国側もブータンと同じ政策をとっている。中国が開放済みのクーラカンリなどの山は、明らかに「国境」よりチベット側に位置するのだ。

中国にとっては、ブータン国境は、インド国境を除く最後の未確定国境である。1968年

桑原隊の報告書「ブータン横断紀行」(講談社)にも記されたように、かつてはチベット領内にもブータンに属する飛び地の領地があった。また、中印紛争頃から、一部の領土が頻りに中国側に侵されるとブータン側は主張している。この交渉がどのような結論をみるのか、例えばネパールのように、国境付近の精密な地図を中国と合同で作成するのか否か、といった点は興味深い、すでに交渉は10年目に入っている。国交を結ぶほどではなくとも、そろそろ何らかの妥結をみるかも知れない。そうすればもちろん、ガンカー・プンスムなどの再解禁もありうる(インドの協力を得てブータン側が作成している地図について言えば、ティンプーのSurvey of Bhutanでは、ほぼ全土にわたって、Topographical Map Series (1/50,000)とSatellite Image Map (1/50,000)が完成している)。

ただし、ガンカー・プンスム解禁については否定的な意見も聞かれる。それは、「最高峰が登られると国が滅びる」というブータン風の考え方だ。ブータン人の中には、「シッキムは、最高峰カンチェンジュンガが登られたのちに崩壊した。ブータンでも、最高峰が登られると国が危うくなる」という人がある。たしかに、例えばチベットでも、チョモランマが登られた4、5年後には、ダライ・ラマが故国を脱出せざるをえなかった。この説は、偶然であれ当たっているのかも知れない。だが、かの山がまさしく境界線上に位置する形で国境確定され、中国側がいつ開放してもおかしくない状況になれば、ブータン人として安閑とはしていられなくなるはずだ。

平井一正氏ら神戸大のクーラカンリ隊が撮影した写真を見せてもらっても、ガンカー・プンスムには北面からでも容易なルートはなさそうだ。だが、この山も「未踏の最高峰」という変わり映えもしない理由で注目され、超人的登山家に登られてしまうのかも知れない。永遠に未踏の聖山があってもよい、と私

は思うのだが・・・。

ところで、ブータンの登山・観光情勢に関する重要な変化に、観光公社(BTC)の民営化がある。「マサ・コン」当時、観光を扱っていたBTCはほぼ国営組織だったといつてよく、ホテルなどは国のもの、スタッフはほとんどみな公務員だった。しかし、「マサ・コン」の頃から、経験を積んだ有能なスタッフほど他の業種に転業する傾向があり、政府に対しても、民間の旅行者を認めよという運動が内部から起こっていた。

結果として、かつてのBTCは近年民営化が進み、多くの民間旅行者ができた。その最大のもは、BTCの大部分を引き継いだBTCだが、経験のある有能な者たちは、より小さな会社を作った。例えば、ダゴ・ベダ、ジョチューらはエトメト(Etometo)、ドミニクらはマンダラ(Mandala)、「マサ・コン」のカルマ・ドルジヤゴバ(イシ・ウォンチュック)、カルチュン・ウォンチュックらはロメン(Lhomen)という会社を作った。

現在ブータンへ旅行する場合、外国の旅行者や旅行者は、これらの業者に連絡してヴィザ取得等を頼むことになる。業者を監督したり、登山許可を与えたりするのはTourism Authorityと呼ばれる少数の役人たちである。

4. ブータンの政治情勢

栗田が現地で聞いた話によれば、この観光部門の民営化は、1989年頃に勃発した南部での騒乱と関係する。軍隊の動員などで国庫が逼迫した。そのために政府の一部門であった観光公社を民営に移して公務員の数を減らし、その企業体から徴税を行って財源確保の政策をとったのだという。

周知のように、ネパール系住民の人口増加に危機感を抱いたブータン政府は、詳細な人口センサス調査の実施に併せて、居住民が「国民」であるか否かを再調査した(1988年)。また、これに前後して、ブータンの民族衣装

の着用奨励やゾンカ語教育の強化など、一連の文化政策を推進した。こうした政策に反対するネパール系住民の運動は、南部ではブータン軍との武力衝突（1989年）にまで発展した。現在は沈静化しているものの、新聞にはいまだに散発的なテロ事件の記事が絶えない。

政府側は、ネパール系住民の人口増加には、近年まで続くネパールからのFresh Migrationがあると確信する。例えば、「サムチ県では、10年間で人口が2倍に膨れあがった。中には10人も養子にとっていた例がある」という。

移住してくるネパール人からみた場合、ブータン国内では、職が得やすく、給料が高い、また税金が安く、医療・教育サービスが無料で受けられる、場合によっては政府から土地が与えられる、などのメリットがある。逆に、ブータンでは古くからの人手不足があり、特に近代化に必要なマンパワーはネパール系住民らにかなり依存してきた経緯がある。インド-ネパール国境とインド-ブータン国境がオープンボーダーになっているように、インドとは両国が特別の関係にあることも、この問題を2国間関係以上のものにしていく。

事件の発端となった識別調査とは、1958年、1977年、1985年と改定されてきた公民権法（Citizenship Act）、および1980年婚姻法（Marriage Act）に基づき、厳密には7つのカテゴリーに住民を仕分けする作業だったが、そのおもな目的はまっとうな国民と違法滞在者の識別にあった。国民として認める直接の証拠は1958年の納税証であり、従来のIDカードは認められなかった。つまり、1958年以前からブータンに居住して納税していた証拠を示しうる者（とその子孫）にのみ完全な公民権を認めたのだ。南部住民の反発は、まず調査担当者らを襲撃する形であらわれ、騒乱に拡大した。また、ネパールに逃れた元政府高官らは、ブータンの人権擁護や民主化を叫ぶ政党活動を開始した。

政府側発表では、初期の調査で違法滞在者と認定された者は約1.5万人であったが、1990年から92年にかけて、これらの者には国外退去命令が出された。ブータンから逃れた住民はネパールに帰還したが、ネパール政府は彼らをネパール国民とは認めず、Jhapaなどのネパール-インド国境地域には難民キャンプが出現した。国際的には、アムネステイなどによる人権侵害キャンペーンもはられ、「ブータン国王は暴君。ブータンはエスニック・クレンジングの国」とも報道された。難民のすべてが国外退去命令を受けた者なのではないが、ネパール国内で出版された資料によると、とにかく1993年5月までの累積で8.5万人もの難民が発生している。

5. ブータンの国家開発と環境保全

ところで、1989年から91年にかけて、シシヤンマ隊人文班を構成していた河合明宣・古川彰・米本昌平・月原敏博らは、チベットやネパール、ラダックなどで、環境利用の変化や政治経済の近代化に関する資料を収集していた。また、月原は、1992年には私費で1週間ほど西ブータンを訪れ、ブータンの近年の変化を観てきた。この顔ぶれの中で議論を進めるうちに、「いろいろな意味で、ブータンには注目すべきだ」という意見が生まれてきた。それは、国家としてのブータンの貴重さによる。

現在、「途上国」の抱えるさまざまな問題や地球環境問題は、経済援助のような南北関係のあり方や、「先進国」をも含めた、工業化を基軸とする近代化そのものの再考を促しているが、ブータンは、豊かな自然林を残し、自然のみならず住民の心性・社会体制までを含めても「中世的な平和、自然と人間の調和」とでもいえるものを残す。一周遅れのトップランナーにすぎぬといえなくもないが、今のところ開発と保全のバランスはとれており、政情不安と経済や環境の悪化がセットになっ

て、近年まで急速に進んできた一般の「途上国」とは対照的である。故桑原武夫氏も古くに指摘しているが、国家経営として見たとき、この国の指導者のセンスは優れたものにみえる。

さかんに報じられる南部問題にしても、その反政府運動はインドやネパールにおける民主化運動の延長であり、大きくみればブータンもまた、インドやネパールにおける巨大な文化運動の中に巻き込まれているという性格をもっている。それ故、この運動が急速に展開されるととてつもなく大きな混乱が予想される。

考えてみれば、今日の国際社会で先進国からの援助を必要としている国家は、政権の不安定さ、国民階層の個別の要求の調整の失敗、民族主義の助長といった要因のために国家権力が不安定になっている。そのために、国際社会が西洋的価値で「人権」や「民主」だけを強調して片方だけを支持したりすれば、かえって混乱を助長し、現存する唯一のチベット仏教国の滅亡に手を貸すことにもなる。むしろいまブータンから学ぶべきは、①環境保全を実現してきた独自の環境利用技術・社会体制、②環境保全と近代化政策・外交政策を調和させる知的センス、③地理的・人的規模に応じた政策の決定過程、④国家開発における仏教倫理の生かし方、といったものである。

こうした点に基本的合意を見ながら、河合、米本、月原がブータン事情に詳しい栗田と語らった結果、栗田を研究代表者とするブータンの研究プランをトヨタ財団に申請することになった。その研究題目は、「地球環境という視点から見たブータンの国家開発と環境保全」であり、河合、古川、栗田が申請書の作成に当たった。研究内容は、日本の援助によって灌漑用水、道路等の整備が進んでいるパロ谷（パロ谷総合開発計画）地域を中心にしたフィールド調査と、政府高官などとの集中的な面談を並行することで、ブータンの国家

開発と環境保全の実態、特に、援助プロジェクトの採用過程や、その実施に伴う農村社会の対応などについて広く探求することであった。

研究メンバーと申請時（1992年）の所属、各自の主な研究分担項目は、以下のとおりだった。

栗田靖之（国立民族学博物館教授）

研究総括、対外政策、民族問題

河合明宣（京都大学農学部講師）

地方行政の展開過程と農村経済

古川 彰（中京大学社会学部助教授）

環境観、自然観

月原敏博（京都大学大学院）

環境利用技術、ネパールとの比較

藤村美穂（関西学院大学大学院）

学校教育の展開

大島義幸（School of International Training）

援助、国際関係

ところで、1964年以来、永年にわたってブータンの農業指導に尽力されてきた西岡京治氏（AACK会員）は、1992年3月、惜しくもブータンにて病に倒れられた。西岡氏は、外国人として初めてダシヨーの称号を得た「名誉市民」であった。また、西岡氏の師匠であり、ブータン研究の先人であった中尾佐助氏も翌年他界された。故桑原氏を含め、これら、ブータンと日本との関係を作ってこられた先輩がたへの思いも、この計画の背景にあった。「ブータン人が国家存亡のときと認識する今、何らかのかたちで彼らの主張に耳を傾けたい」ということである。

さいわいにも、研究計画はトヨタ財団「1993年度試行・準備研究」として採用され、月に1回程度の研究会を始めた。そして、1993年8月には予備調査を行うことができた。以下、細かな調査内容を離れ、その見聞から得た感想を簡単に報告するが、今回の調

査対象となったパロ谷総合開発計画は大日本土木(株)によって進められているため、山の先輩のおひとり、安田隆彦氏を通じ、同社現地スタッフの方々にもパロ谷総合開発計画地域の視察等でお世話になったことを特記しておきたい。安田氏には、日本国内におけるパロ谷総合開発計画関連資料の収集に際しても、大変お世話になった。

なお、今回の現地調査は、各メンバーの都合と入国資格—予算の関係から、当初の予定は大きな変更を余儀なくされた。

メンバーでは、河合、古川が本務との関係で、また、大島がアフリカ調査のため参加できなくなり、古川のかわりに生物学者(昆虫学)の三枝豊平(九州大学教授)が加わった。さらに、月原は、職を得たため当初予定していた2、3ヶ月のブータン滞在は不可能になった。一方、この研究計画に強い関心を持ってきた米本が同行を望み、時期をあわせて訪ぶることになった。

入国資格に関しては、開発大臣C. ドルジ氏、農業副大臣レキ・ドルジ氏と栗田が事前に交渉したが、調査を前面に押し出してはブータンのヴィザは得にくく、最終的には、「ブータン側に負担をかけない」との判断から観光ヴィザで入国することになった。従ってブータン国内経費が高くつき、予算の関係から、ブータン国内滞在日数は希望していた3週間程度から13日程度へと縮めざるを得なかった。結局今回は、5名の団体旅行というかたちで、「マサ・コン」の友人、カルマ・ドルジ氏らのLhomen Tours & Trekkings という旅行業者を通じて、ブータン入りすることになったのである。そこで今回は、ブータン国内ではほぼ全員が一緒に行動することとし、パロ谷フィールドワークは大日本土木(株)現地スタッフの案内による視察にとどめ、政府関係者からの面談と資料収集を中心とする予備的な調査となった。

6. ブータン1993年

8月10日、栗田がデリー、藤村・月原がカトマンズよりDruk Airでパロに到着。十数人乗りの双発機で入国した80年代半ばに比べると、80人乗りの英国製ジェット旅客機(1988年より就航)がパロ谷に急降下するのは、周囲の農村景観とは不釣り合いな気もする。いまや、ブータン国営Druk Airは、デリー、カトマンズ、カルカッタ、ダッカ、バンコクとパロを結んでいる。

空港では、旧友カルマ・ドルジ氏と大日本土木(株)の現地スタッフに迎えられた。各自ヴィザ代に20ドル払うが、栗田のヴィザだけは「Gratis」と判が押されてブータン政府負担だ。ブータン滞在ができるよう交渉していた事前のやりとりでも、農業副大臣のレキ・ドルジ氏は「来られる目的は素晴らしいが、パロ谷開発はまだ全計画3フェーズのうち2つまでしか終了してないため、いまのところは見るべきものはありませんから」とやんわり受け入れを断ってきた。しかし、栗田に対して「Gratis」のヴィザを出しているところは、腑に落ちない。大日本土木(株)の現地スタッフのL.B.プラダン氏らにも、「できるだけサポートをするように」と日本から連絡が行っているようだ。

2日ほど後にバンコクより米本、三枝が到着し、ブータン国内でのおおよその日程が決まった。まずティンブーからプムタンを車で往復し、その後、主にティンブーで政府関係者との面談・資料収集と、パロ谷の農業開発地域の視察を行うことにした。栗田は、先代の国王の博物館をトンサにつくる件について、内務大臣ダゴ・ツェリン氏に建物の下見を依頼された。

ブータンに着いての印象だが、ティンブーやパロの農村の景色はさほど変わっていない。80年代半ばに比べ、電線と電柱、トタン屋根が目につくようになったが、例のブータ

ン風の散村的な景観はそのままだ。

ところが、農業中心のこの国でも、ゆっくりだが都市化は着実に進んでいるようだ。80年代半ばには数軒しか常設商店のなかったパロにも大通りのバザールが作られ、道の両側に大きな建物が並んで商店街ができた。ティンブーだともっと変化が大きい。驚いたのは、ティンブーの市街地・住宅地の規模が以前の倍ほどにもなって、おまけに電灯が増えたために美しい夜景まで出現したことだ。市街地では、3~4階建ての「高層ビル」も増えている。「マサ・コン」の頃、毎日のように通った喫茶店、スイスパーカリーは、いまや「高層ビル」の谷間に沈んでみえる。ホテルやレストランの数もかなり増え、朝夕には交通渋滞すら見られるようになった。

1983から85年の間にも、決して小さくない変化が毎年起こっていた。だがそれ以降も急速に、この国は変化してきたのだ。チュカ発電所が本格的に稼働し始めて農村部への電力供給も徐々に進み、車両台数がうなぎのぼりに増えてきたことは大きい(トラクターなどを含めた車両台数の統計では、国全体で1980年にはたったの700台だったものが、1989年には7,664台にまで増えている)。

変化が大きいのは、景観などより社会の方も知れない。明らかなことの一つは、首都ティンブーなどではホワイトカラーの都市生活者が増えてきたことだ。開発大臣C. ドルジ氏や栗田、米本によると、インドからの道路が通じて街路が作られた1960年代には、ティンブーの町も都市人口としては僅かなもので閑散としていた。だが、いまやそれは約3万人に達し、近年、小中学校も急増している。ブータンでも、農村生活を知らないホワイトカラーの子弟が急増している。

伝統的なブータン社会では、宮仕えこそが出世であり、昔流のやり方に従えば、仕事のために首都に出ている、年を取って引退すれば故郷の村に帰って老後を送るのが当たり

前だった。今引退の時期を迎えている世代の人には、引退後には村に帰る人も多い。だが、現在小中学校に通っている「新世代」の子供たちやその親の世代だと、これも変わってしまうだろう。近年は、一家の働き手がティンブーに住んでいるために、田舎の村から老人が都会に出てくるという人口移動すら現れ始めている。これは、近頃の日本で比較的顕著だった人口移動のパターンではなかったか。

開発大臣C. ドルジ氏に聞くブータン政府の考え方は、たしかにさわやかで説得力がある。

「ここ数十年のブータンの近代化には、Over Developmentといえる面もあった。そこで、10年働いたから1年間まるまる休息をとるというような感覚で、援助の受け入れもスローダウンさせることを考えている。ありがたいことだとはいえ、先進国の政権が交代しただけで頓挫するような援助なら迷惑だ。ブータンがめざしているのは、GNPの増加ではなくGNH(Gross National Happiness)の増加だ。欲望、物質主義、消費主義をあおることは、幸福の増進にはつながらない。この意味では、西欧諸国や日本などの先進国も狂っている。こうした国づくりのために、ブータンでは、民衆生活に古くから根付いている仏教倫理を生かすことができる」

「政府は、公害を出す産業は導入しないし、工業立国をはかるつもりもない。ブータンの人口でなら、主たるエネルギー源を水力発電で得た電力に求めれば、近代的生活に必要なエネルギーは確保できる。豊富な自然が残っている今の段階でも、植林の推進、自然保護区の設定、エコ・ツーリズムの奨励、都市のごみ問題への対処など、環境の問題に注意を払っているのは、それは、病気と同じで、取り返しのつかないダメージを受けてから治すのは大変だが、予防にかかる金は少なくて済むのと同じ性格のものだからだ」

C. ドルジ氏によると、こうした考え方は

やはり国王の意志によるというのが、ブータン政府は、明らかに一種の近代批判というスタンスをとり始めているといえる。自信に満ちた彼の言葉は、近代化に邁進してきた日本に対しての痛烈な批判にも聞こえる。

一般の人たちが、これまでのように仏教をあつく信仰して国王に忠誠を誓いつづけるなら、宗教を前面におしたてて近代化に痛烈な批判を加える政府高官たちの言は正しく、この国も当分は安泰なのかも知れない。だが、この国が援助依存の経済体質であり、自立できていない国であることには変わりはないし、当の一般の人たちは、高官たちほど自信を持っているわけでもない。

なにより、首都への人口集中やその近傍の環境の悪化といった都市化の問題や、民族問題など、「途上国」により普遍的な問題に関しては、ブータン側にもまだ明確な答えがあるとは思われない。C. ドルジ氏のいうような考え方でブータンがうまくやっていたとしても、他の国には決してまねができないのなら、ブータン方式は、一つの特殊解でしかあり得ない。

このように考えてくると、ブータンの特徴は結局のところ人口密度が低い（1平方キロ当り13人）という前近代的な条件に集約され、この国の強みがあるとしたら、この小人口という条件をいかに有効活用するかにかかっているという気もしてくる。これに関連して印象深かったのは、たとえば次のようなことである。

日本の援助により灌漑水路が整備されたことによって、パロ谷には水田化が可能となった荒れ地が一部現れた。問題の場所は、1アールにも満たないわずかな土地なのだが、これをめぐって農民の間に深刻な争いが生じた。村には伝統的な水利システムもあり、村長もいるが、彼らは村内で事態を收拾しようとはせず、農民の争いは直ちに県庁（ゾン）に報告された。県庁でも、この問題を押さえ

込んだりはせず、直ちに中央政府に判断を仰いだため、もめ事は速やかに国王や政府高官の知るところとなったという。

このもめ事は未だに未解決で荒れ地はそのままだが、たとえばネパールであれば、こんなことはまずあり得ないだろう。つまり、よく統治されているブータンでは、何事かあれば、国王と農民が直ちに通じあえるような仕組みがあり、問題が重要であるほど、間にたつ官吏が偉そうな顔をしてさい配を振るようなことはしないのだ。

国王は、地方をよくまわって住民の声には耳を傾けているし、南部での騒乱の激しかった4、5年前には、北部の住民はこぞって国王に「志願署名」を出して一朝事あらば戦場で戦う意志を表明し、学校では自主的に軍事教練すら行われたらしいが、人口密度も国土の規模も大きなネパールなどでは、このような「国王－農民」の一体感は醸成しがたいだろう。この、農民が直接国王とつながっているような体制こそ、ブータンに、立憲君主制ながら意外に「民主的な」性格をもたらしているのだろう。ブータンは、これまで小人口という条件をうまく生かしてきたと思われる。

農村－森林の生態学的関係においても、ブータンとネパールとの間には大きな違いがある。

ネパールの中央部では、農村にはウシや水牛が多いが、その飼料は飼料木から得られる飼料葉に極端に依存しており、耕地への肥料はこれらの畜糞の厩肥に依存している。農－牧－林が高度に連関した有畜農業システムといえ、農業生産を維持するには、農村近傍の森林へも一定のストレスがかかっている。ところが、ブータンの中央部の場合は、（飼養可能な高度ながら）水牛はなく、ウシやヤクが飼養されていて、その主たる飼料は高山の野草である。ブータン中央部の農業も一種の有畜農業でウシの糞は肥料として不可欠だ

が、ブータンの場合、ネパールでは農村近傍の森林にかけられているストレスは、高山の不可耕地へ逃がしているのではないかと思われる。このことは、近年徐々に明らかとなってきた農業統計からも強く推定される。

これには文化的事情も絡んでいる。ネパールでは、ヒンドゥー化が進んでいることによって、カーストランクを上昇させようとする指向があり、その結果ウシの数の増加がある。また逆説的には、それを飼えない者にとって便利な家畜としての（必ずしも神聖でない）水牛を飼育する傾向がある。実際、ネパールではこれは宗教や法の規制を伴う文化・経済変化として進んできた。それに対し、チベット文化の流れを汲むブータンでは、ヤクを好む傾向があり、蓄財はウシよりもヤクの頭数によっている。だから蓄財につとめたとしても、ヤクは農村近傍の森林へ飼料を依存することにはならないのである。

強引に筋道を立てれば、この違いからブータンに比べてなぜネパールではあれほど森林の過開墾や土地の荒廃、土壌の流出が生じたのかを説明することもできそうだ。とはいえブータンの場合も、小人口という条件に助けられていることは明らかで、ネパールと同程度に人口や家畜が増えれば、その結果はどうなるかはわからない。

今回、聞き取りの途中で会った若きブータン人官僚、Nedup Tshering氏（National Environmental Commission）との話の中でも同意したことであるが、社会を含めて考えると、ヒマラヤは一つのものとしてみるよりシッキム以西の人口の多いヒンドゥー文化圏と、ブータン以東の人口が少ないチベット－ビルマ語系民族の地域の二つにわけて考えた方がよいことはたしかだ。しかし、ブータンを含め、東部ヒマラヤでも今や人口は増加しつつあり、発展する都市を中心に、彼らが予想だにできなかった社会変化が起こる可能性は大きいように思われる。

民族問題にしても、今のところは「ブータンのような小国では多民族国家のように各民族を平等には扱えない」という論理で政府は切り抜けてはいるが、ブータン国内にはネパール系住民のほかにもチベット人がおり、またブータン東西の文化・民族の差も存在している。ネパール問題が、更に別の亀裂へとつながる可能性も全くないわけではないのだ。

ブータンは、これまで小人口という条件を巧妙に生かしてきたが、自国の労働力不足を他国の労働者に依存するという悪い性癖をも、歴史的に身につけてきたように思われる。ネパール人問題はその顕著な現れだろう。「宗教を前面におしたてて近代化に痛烈な批判を加えてきた国ブータン」の正念場は、まだまだ続くのであろう。

7. おわりに

昨年の予備調査で得た見聞を含め、マサ・コン以後のブータン事情を報告した。マサ・コン以後、登山やトレッキングというかたちでは、京大からブータンへの隊は出ていない。だが、踏査可能な場所・ルートは以前より増えているので、関係者の今後の活発な活動を期待したい。

後半に述べた調査の継続については、その後、1994年度分についても、新たに生態学者2名を含めてトヨタ財団に申請したが、好意的評価は得られながらも採用を見送られ、また現在は、各メンバーともそれぞれの研究計画に忙しいため、研究会は一時休止中である。しかし、上述の研究視角からのブータンウォッチングは、長期に続けていく予定である。一つ付記しておけば、すでに、国内でもブータンの文化と自然を守る目的でチベット学者の今枝由郎氏らを中心に作られた「ブータンの文化と自然の会」（1992年設立）が活動を始めており、栗田はその会長をしている。京都に限らず、日本の山関係者とブータンとの

関係が、さまざまな次元で深まることに期待したい。

付記1.
参考までに、カルマ・ドルジ (Karma Dorji) 氏の連絡先は以下の通り。
Lhomen Tours & Trekkings Co., Norzin Lam,
P.O.Box 341, Thimphu, Bhutan.
TEL/FAX 00975-2-23243 FAX 00975-2-23108

付記2.
「京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊」の公式報告書は、大変遅れていたが、伊藤宏範の努力で、年内に刊行される予定である。

【参考文献】

堀 了平 1986 『偉大なる獅子マサ・コン峰登頂』(211頁) 講談社

『偉大なる獅子マサ・コン峰登頂』の書評が掲載された刊行物

『月刊宝石』 1987年3月号

『クライミング・ジャーナル』No.28

1987年3月号

『岳人』477号 1987年3月号

『山と溪谷』 1987年2月号

『雪と岩』 121号

Climbing to Giant Castle 23rd-30th December, 1989

K. SAKAMOTO

GIANT CASTLE - 3314m, is the 5th highest mountain in South Africa and is located in the CENTRAL NATAL DRAKENSBERG. I have been trying to climb to the top of this beautiful mountain for the last two years. Unfortunately on my first attempt, during the 1988 Christmas holidays, I was forced to retreat just 200m from GIANT CASTLE PASS due to bad weather.

This time I took along a strong partner, MR. Andrew Ballard, and we booked a bungalow at the GIANT CASTLE CAMP from the 23rd to 30th December, 1989. This spot was used as a base camp to reach the summit.

We left Johannesburg around 07:00 on 23rd December, 1989, and reached the GIANT CASTLE CAMP around 13:00. The bungalow was clean, and consisted of bath, toilet, and refrigerator.

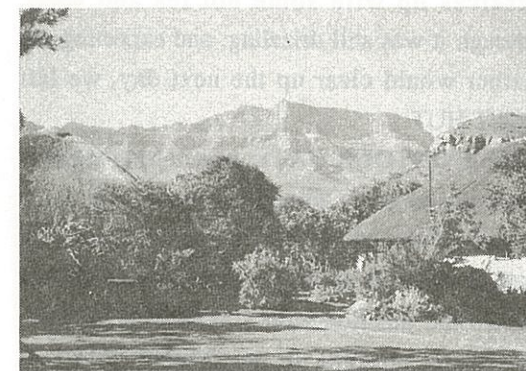
We spent that afternoon and the following day, enjoying trout fishing in the BUSHMAN RIVER. Andrew was excited at catching two trout about 32-33cm in size. He caught these fish using the new Japanese style fishing rod.

We arose at 04:20 on the 25th December, in very misty condition. We decided to continue and departed from the base camp at 05:00.

We took the ORBI RIDGE TRAIL which took us in front of the Wardens House and continued until we reached GIANT HUT.

It started to drizzle and visibility was only 300-400m, as we walked along the grassy, wet open ridge of LITTLE BERG.

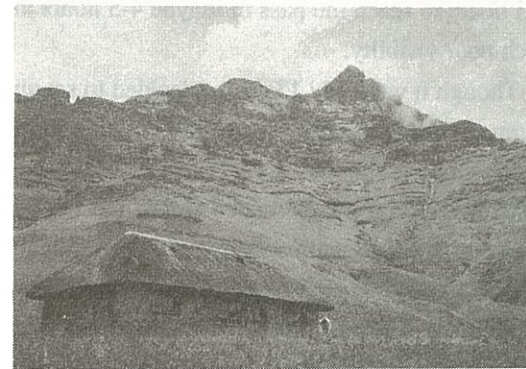
ORBI RIDGE is a very scenic trail, with a splendid view of the widespread escarpment, GIANT CASTLE and LONG WALL. The



GIANT CASTLEのふもとにあるナタール州立公園バンガローよりGIANT CASTLEを眺める



GIANT PASS



GIANT CASTLE 3314m

weather compelled us to just walk up the grassy wet ridge, in the deep mist. By this time our feet were so wet and swimming in water. We eventually reached GIANT HUT at 09:30 and decided to take a well earned rest and warm ourselves up with some hot tea and soup. Although it was still drizzling, and expecting the weather would clear up the next day, we left GIANT HUT.

The CONTOUR PATH was a long monotonous trail of going around the small ridge at the bottom of the big escarpment and crossing through several small streams. At 12:00 we reached the junction with UMTSHEZI RIVER, which goes straight up the GIANT CASTLE PASS.

UMTSHEZI RIVER is still very wide there and difficult to find which one is the main stream. From here, there is no clear trail. We went up a small stony, grassy ridge with short bush along the left hand main stream. But the mist was getting deeper and deeper and visibility was almost down to 40-50m. We then realised that we had walked too far right and traversed to the left side again to find the main stream.

It was not easy walking up the steep slope, covered by grass or bushes, and surrounded by rocks.

I estimated that we might need at least another 2-3 hours to reach the pass or maybe 4-5 hours in such poor visibility.

Though it was only 13:47 we decided to set up camp to avoid any risk. We tried searching for a good camping site, but the terrain was stony and there was also a 15-20 degree slope. We finally made up a small camp site by cutting grass and bushes and taking away some of the stones.

Andrew was not happy with this spot, but there was no alternative place to go to. Once settled we spent a lazy afternoon drinking hot

tea and eating and lying down in a wet tent. The soft drizzling rain continued until mid-night. At 04:20 on the 26th December, we were awakened with the tent flapping by a strong wind and a blue sky with gleaming stars.

We quickly had a light breakfast and packed up, ready for the next stretch. Our departure time was 05:20. Within one pitch from our camp site, bushes disappeared and many stones and sand appeared on the steep bed of the stream.

We were now surrounded by the big rock walls of GIANT CASTLE on the left side and of LONG WALL on the right side. This overwhelming site gave us the feeling of being trapped in the bottom of a deep well. This steep gully goes straight up to GIANT CASTLE PASS, which looks like a window from heaven. We walked slowly up the steep gully, some places almost 30-35 degrees, at the center and then on the right side grassy slopes mixed with stones.

We gasped to climb this steep gully. However, both Andrew and I were in good condition and reached the pass at 07:30. The breathtaking view from GIANT CASTLE PASS was incredible. We could see the wide DRakensberg range from LOTENI to LESOTHO, and also the NORTHERN EASTERN BUTTRESS AND SENTINEL could be seen over the sharp dropping gully. From the pass we could not see the peak of GIANT CASTLE.

We traversed to the east of the wide and grassy slope at the foot of rockband coming round from 3225m PEAK, and then we walked up to the main ridge between 3225m and GIANT CASTLE. The rock pinnacle of GIANT CASTLE was still 2kms away from us, but now we were walking pleasantly looking at beautiful flowers and long Drakensberg mountain waves.

The final stage of GIANT CASTLE has about a 15m knife ridge and then a 10m rock pinnacle

stood up. Though both side escarpments the drop is directly about 600-800m, there are plenty of holds and stances on the pinnacle rock to climb up.

I climbed to the Peak without the use of the rope, very easily and stood on the concrete block, maybe there was a beacon there several years ago.

After first having lunch at the neck of the Peak, we departed at 09:20.

I stopped at the corner of 3225m and had a last glimpse of GIANT CASTLE'S pinnacle, thinking that I might never have another chance to go there in my life. The downward walk was very fast. We came back to the pass at 10:30. Andrew suggested we stay one more night on the beautiful flower meadow just below the pass, but I insisted that we had better go down today while the weather was still fine, as the steep gully is so dangerous once the rains start and stones come down. The gully was so steep when we stood on the pass, like a starting point of a downhill ski race slope. We walked down cautiously and slowly in the steep gully.

Around 12:00 midday we were at the CONTOUR PATH, and walked the monotonous Trail again to GIANT HUT and then took the TWO DASSIE STREAM TRAIL for going down to the main Camp. Our knees got so stiff after the long hours of walking down, but we returned to our bungalow safely at 17:45.

Two days mountaineering to GIANT CASTLE was rather strenuous but we were very happy to reach this beautiful Peak.

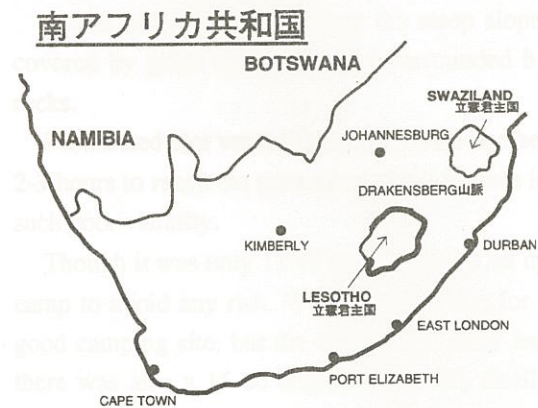
I would like to express my sincere thanks to my friend Andrew, who co-operated and showed signs of good friendship in this programme.

南アフリカの山事情について

阪本公一

私は丸紅(株)の駐在員として、1987年4月より1993年5月まで、6年間南アフリカ共和国のヨハネスブルグに住み、南アでの山登りを楽しんできました。この間、南ア山岳会、ルーデポート・ハイキング・クラブ、ヨハネスブルグ・ハイキング・クラブに所属し、トランスバール州とナタール州の山々を登ってきました。特にナタール州にあるDRAKENSBERG山脈には、片道5~8時間掛けて車で走り、6年間で42回通いました。

DRAKENSBERG山脈は、レソト立憲君主国を「コ」の字型に囲むように、約250kmも連なる3000m級の大山脈です。ヨハネスブルグから登る場合、通常ナタール州側から取っ付きますが、稜線から500~800mは大岩壁の障壁がナタール側になぎ落ちており、稜線へは急峻なガリーを使つての登攀となります。DRAKENSBERGとはDRA-



GONS MOUNTAIN「龍の山」の意で、夏場の12~3月は強烈な雷と雨の多い山脈です。冬場の6~9月は積雪量は少ないですが、気温が零下10~20℃に下がることも珍しくありません。

既述の英文は、このDRAKENSBERG山脈にある南アで第5番目に高いGIANT CASTLEに登ったときの記録です(ルーデポート・ハイキング・クラブ会報)。DRAKENSBERGの稜線には山小屋は殆どなく、また登山道標も完備しておらず、本当に静かな自然のままの山として残っています。明治時代の北アルプスもかくありなんと想像されるような「私だけの山」を楽しむことができました。

南ア山岳会は、1991年に創立100周年を迎え、私も日本山岳会の山田二郎会長の代理として記念パーティーに出席致しました。南ア政府のアパルトヘイト政策に対する制裁として、世界各国が南アに対し経済制裁とスポーツ・文化交流を禁止していましたが、1992年に、それも解除され、南ア山岳会も各国の山岳会、山岳団体との交流の仲間入りをすることが可能になりました。DRAKENSBERGには未登攀の岩壁も数多く残されています。南ア山岳会では、日本の登山家の来アを大歓迎しています。

南アでの登山に興味のある方には、南ア山岳会の友人を御紹介致しますので、遠慮なくお申下下さい。

キリマンジャロ登山旅行メモ

井上潤

1993年8月14日、成田を出て、マニラ、バンコック、カラチ、ドバイを経て、8月15日アフリカ・ケニア・ナイロビ空港へ着く。パキスタン航空での長い空の旅であった。ヒルトンホテルでチェックイン、夕方市内を散歩する。街を歩くアフリカ人の男女が一様にスリムで足が長くスタイルが良いのに驚く。歩く姿勢が良い。大腿に颯爽と歩く黒人の姿が実に美しく感ぜられた。これがアフリカ上陸の第一印象である。街は市庁舎や議事堂など近代的な建築が立ち並び、広場やメイン道路も立派である。日曜日の午後とて若いアベックや着飾った家族連れを多く見掛けた。露店の土産物屋でさっそく木彫りの小さなマサイの像を買う。

翌16日、サファリカー、2台に分乗してタンザニア・アルーシャの町へ向かう。草原の中を一直線に道が走る。草は枯れていて、アカシヤの棘のある灌木が、僅かに緑の葉を残している。車は猛スピードで走る。左右にキリンや、ガゼル、ダチョウが現れる。バッファローとおぼしきものや、群れをなしているシマウマも見掛ける。マサイが赤や黄色の鮮やかな布を身に纏い、槍を持って草原を歩いている。点々と大きな茶色の蟻塚が見える。広大な自然の中で、アフリカ的なものを見て少なからず興奮して写真を撮る。

タンザニア国境近くなると、山が見え起伏が現れる。木が増え緑が多くなるのを見てホッとした気分になる。途中、マサイの住家に立ち寄り、10ドルを払って写真を撮る。マサイの家は壁も屋根も木で編んだ骨組みに、牛ふんを塗り固めたもので出来ている。内部は採光が乏しく、天井が低くひどく不衛生に思

われた。国境で車を乗り換える。変わり映えのしないサバンナは、ケニアに較べ雨が多いせいかな、木の緑が増える。草原がところどころ耕作され、トウモロコシやヒマワリが植えられているが、いずれも育ちが悪く貧弱である。我々一行は、アフリカを肌で感じようと、車窓からしっかりと外を眺める。

アルーシャは花と緑の多い感じの良い町である。ホテルでシャワーを浴び、街へ出てコーヒーショップでキリマンジャロのコーヒー豆を買う。

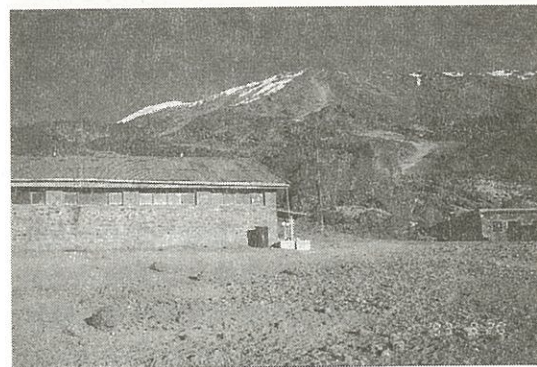
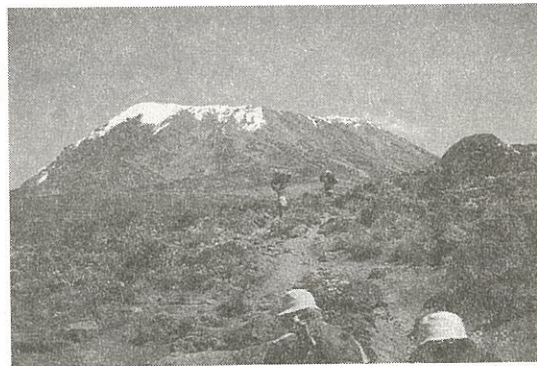
17日早朝ホテルを立ち、マランゲートへ向かう。道の両側の畑はよく耕され、トウモロコシやヒマワリも大きく育っている。植民地時代のプランテーションの名残のある西洋風の立派な屋敷やキリスト教会の建物が目につく。町を離れ山道にかかると、バナナ園とコーヒー園が多くなる。車は山道をぐんぐん登り、登山基地マランゲートへ着く。標高は1550m。ここからガイド、ポーターを付けての登山が始まる。

ユーカリの並木を過ぎると直ぐに樹林帯に入る。インド洋からの湿気が山に当たって雨を降らせ、鬱蒼とした多雨林帯を作っている。高木の下にも雑木が密生し、髭のようなこけ、サルオガセが枝から一面に垂れ下がっている。いつのまにか降りだした雨の中を歩きマンダラハット標高2727mへ着き、そこで1泊する。小屋での食事はキャベツやニンジン炒め、小粒のジャガイモ、鶏肉等である。野菜が多く好みに合う。鶏肉は少々堅いが味は良い。水炊きにすれば旨かろうと思う。

18日マンダラハットを立ち、ホロンボハットへ向かう。樹林帯を抜け小高いクレーター

へ出る。そこから初めて雪をいただいたキリマンジャロを遠望する。感激して写真を何枚も撮る。草原と小高い山が重なり合うような、なだらかな風景の中を隊列を組んでゆっくと進む。日本で見るのと同じような高山植物の花を数多く見掛ける。小さな涸れ沢を何回か横切り、右手にマウエンジー峰標高5148mの急峻な岩峰を見ながら歩く。山道は火山灰の黒土で、歩くたびに夥しい埃になって舞い上がる。夕方ホロンボハット標高3720mに着く。ここで再び雪で白く光るキリマンジャロの頂きを見る。夜空の星は美しい。サソリ座が天頂を占め、白鳥座は北東の空にかかる銀河で静かに輝いている。期待を込めて南十字星を探したが分からなかった。

19日ホロンボハットからキボハットへ向かう。この行程は変化があり面白い。出発地点はジャイアントヒースが茂り、巨大なサボテン・ロベリアがあちこちに突っ立っている。マウエンジー峰の西南の側腹を歩くルートは、沢には水が流れ、湿地の岩には苔がびっしりと付き、遠くから見ると、木の緑と錯覚した。綺麗な水場のラストウォーターを過ぎると、直ぐに乾燥地帯に入る。砂礫の斜面には、まるでドライフラワーのような草花、銀色の葉と、銀色の花を付けたキク科の植物の群れが点在する。左のキリマンジャロと、右のマウエンジーを眺めながら、緩やかな傾斜を登る。両山の鞍部に出る。この辺りは風が強く、砂塵が舞い上がる。駄々っ広い砂漠荒地だ。とくにマウエンジーの裾を吹き抜ける風が強い。360度のパノラマ写真を撮る。今日は天気が良いので、さほど寒さを感じないが、雨のときは相当こたえるであろう。ポレポレ（ゆっくり）歩いてキボハット標高4703mへ着く。キボハットからのキリマンジャロ山頂は指呼の間である。この高度では、やはり軽い頭痛がするようであった。新井夫妻が、高度順化の目安となる動脈血酸素飽和度の数値がわるく、ガモウバッグに入る。今



夜も星を見る。

20日午前1時小屋を出発。ライトを頼りにゆっくりと頂上を目指して登る。途中6時30分、雲海から出る御来光を拝む。火口壁のピークは、ギルマンズポイントで標高5682m。6時45分に着く。更にウフルピークへ足を伸ばし、9時に最高点標高5895mに立つ。登頂者は寺本、酒井、原田、能田、井上と、ピー

クすぐ手前で自分の体調と相談して断念した宝田である。山頂から火口や氷河の写真を撮る。遠くケニヤ山が雲の上に頭を覗かせている。ヤッホーを叫びパイカンを開けて皆で食べる。私は幸い体調も良く高山病の症状もない。後は一気にキボハットを経て更にホロンボハットへと下りる。

21日ホロンボハットを発ち、キリマンジャロに別れを惜しみながら、登りと同じ道を下る。登山口マラングゲートから、車で今日の宿泊地モメラロッジへ向かう。途中優雅な姿のメルー山の横を走り、閉門直前のアルーシャ国立公園に入る。ゲートで、尻尾の白いコロブス・モンキーの群れの歓迎を受ける。キリンが道路に立ちはだかたり、また幸運にもレパードの親子に出会ったりして、公園内のモメラロッジに着く。ニッパヤシで屋根を葺いた円錐形の白壁の小屋で、なかなかシャレている。この離れで、シャワーを浴び、山の埃を落とす。食堂に集まり、全員でキリマンジャロ登山の祝盃を上げる。

後記 日頃気張らずに生活しているつもりでも、気付かないままに色々な垢が溜まり、ストレスで身体も心も多少固くなっている。今回酒井オシメ隊長からお誘いを受けて、OKKの愉快的仲間とキリマンジャロへ登って、芯底まで楽しみリラックス出来た。これはキリマンジャロの自然の面白さや、初体験のアフリカ大陸の風物の魅力もさる事ながら、パーティーの皆様方の御陰であると感謝している。高度順応と同じ様にこの気分を長く保ちたいと思っている。

(編集部注) 参加者：寺本 巖 井上 潤
酒井敏明 新井 浩 新井幹子 潮崎安弘
原田道雄 宝田克男 能田 成 前田 司
前田保美 伊藤宏範 博田祐美子

中国での登山食糧見聞

齋藤 惇 生

1. はじめに

1980年から中国は外国登山隊を受け入れることを決定した。そして政治的、経済的に関係の深い日本にチョモランマ、西ドイツにシシャパンマの登山許可を与えた。許可の通知は79年夏に日本山岳会に伝えられた。日本山岳会(JAC)は、その秋偵察隊をチョモランマに派遣した。私が中国の山に足を踏み入れたのは、この偵察隊に参加したのが最初であった。その後80年のチョモランマ本隊、85年のナムナニ、88年のチョモランマ、90年のシシャパンマ、92年のナムチャバルワと中国づいてしまった。

79年の時は中国の国内事情、山の情報は社会主義体制の竹のカーテンに隔てられて本当に乏しかった。今では笑い話だが、中国登山協会から派遣されてくる協力隊員を王同志、張同志と言わねばならないのではないかと真面目に論議した。協力隊員の食糧について中国登山協会(CMA)に問い合わせると日本側の用意したものを食べる。BCでは中国人コックが中国式食事を作る。チベット族(藏族)隊員については、彼等の主食であるツァンパ(青稞=チンコウ 裸麦を炒って粉にしたもの、麦こがし、ハッタイ粉)、ヤクのバターのギーなどは別に用意するとのことであった。

2. 初めてツァンパを食べて放屁に驚く

ネパールのヤルン・カン遠征の時に藏族系のシェルパと一緒に登ったので、藏族の食事がツァンパ、バター茶、肉類が主であることは知っていたが、食べたことはなかった。79年の時、BCの炊事テントに行ってみると、

藏族隊員のロランが昼食にツァンパをバター茶でこねて食べていた。私が食べてみたいと言うと喜んで食器のボウルにツァンパを入れ、バター茶をそそいでくれた。ハッタイ粉は日本でも携帯食、おやつとして使われていた。石川出身の友人と北アルプスを歩いた時、彼が持参したハッタイ粉を谷の冷たい水で溶き、砂糖を入れて飲んだ。のど越しが冷たく甘く渴きも疲れもすぐ回復したことを覚えている。

それほど美味しいものではないなと思いつつながら、こねたツァンパをボウル半分も食べると、漢族の汪鉄銘がもう食べるな、あとで腹が張って苦しいぞと言う。まさかと思ってボウル一杯全部平らげてしまった。さてその夜シュラフに入ったところから腹が張ってきて屁がプープー出はじめた。5分おきぐらいに2、3発景気よく出る。ひつてもひつても出る。それが明け方まで続いて全く眠れない。よくもまあ出るものだと呆れてしまった。汪が言ったとおりだ。ひりながら考えた。これは小さい時から食べ続けている食物には、それに対する腸内細菌がいて消化し、異常醗酵しないようになっているのだろう。日本人には牛乳を飲むと必ず下痢をする人がいる。牛乳不耐症というのだが、これは日本人が牛乳を飲み始めてから歴史が新しいことを意味する。牛乳の成分の乳糖を分解する腸内細菌が欠けているといわれている。それに屁は口から飲み込む空気がもとになっていると言った医学者がいるが、これは全く間違いだと、出ても出ても止まらない屁の音を聞きながら思った。しかし、ツァンパの屁は幸い臭くなく、シュラフから出ずに済んだ。

3. バテたときは食べ慣れたものが一番

80年の本隊の時に、東北稜のノースコル下のC3(6500m)から体調を崩した藏族のザンプを連れてBCに下りたことがある。高度障害で、頭痛、食欲不振がひどい。休憩のたびに、いろいろすすめるが、首をふるばかり。やっとチョコレート2片と、これはチュル(チベット語でチーズ)だと言ってすすめたプロセスチーズを少し食べる。スポーツ飲料のエクセル1を渡すと、ちょっと匂っていやいやする。

C1に着いて、ミルクを作って飲んでいると、BCから荷揚げのヤクが到着、ヤク工は親分格のペマだ。ヤクの乾糞を敷きつめたヤク工テントでペマとザンプは喋っている。ヤクの糞は燃料にすることは知っていたが、敷物にも使うことは知らなかった。チベット牧畜民にとってヤクの乾糞は、日本人農民の稲藁と同じ感覚のようだ。不潔などは全く思っていない。

しばらくしてザンプが帰ってきた。コッヘルに一杯の茶と羊の干した片脚をペマから貰ってきた。お茶をコンロにかけてやる。彼は羊の脚をナイフで削りクチャクチャと食べ、茶をフウフウと吹きながら飲む。私にもすすめるので茶を飲む。煉瓦状に固めた磚茶を削って煎じ、岩塩を入れたものである。これにギーを加えて攪拌するとバター茶になる。干し肉は味もしゃしゃりもない。ザンプは肉を削っては、肉は勿論、筋も、そして骨膜まで食べてしまう。下りる時、私のすすめた食物に対する反応と大違いだ。

我々日本人にとって、酸素不足の高所で口に合うのは米飯、餅、ラーメンである。餅を焼いて醤油をつけて海苔を巻いたものならどんなにへばっていても食べられる。子供のときから食べ慣れたものは偉大なものだと私はザンプの口許を見ていた。

漢族の隊員で日本の餅が好きだと、食べ

られない人がいる。これはどうも出身地が関係しているようだ。日本の植民地時代を経験している東北出身の人達は好んで食べる。日本人との接触が多かったためか、日本的な食べ物に慣れている。長江流域の米作地帯出身の人もこれに似たものがあると言って抵抗なしに食べた。拒否反応を示した者は北方の小麦地帯(甘肅など)の人であった。

日本人の食習慣に大きな比重を占めてきたのがラーメンである。登山食糧にも必ず使われている。85年ナムナニ登山の時、カシュガルから崑崙山脈を越え、4000~5000メートルの荒涼としたチベット高原を1800キロメートルも車で走った。高度障害、感冒等で体調を崩した隊員が5~6人であった。宿舎は全て国境守備の中国兵舎で、夕食は乾麺を茹でて、ゆすがずそのまま味付けしたうどんで粉っぽくて不味かった。食欲のない病人は勿論食べられない。そこで病人だけにカップラーメンを食べてもらうことにした。これは皆美味しそうにするすると食べたのでほっとした。ラーメンが今や米の飯と同じぐらい日本人の民族食になっていることを改めて認識した。

4. チベット人の食生活

藏族は山でもツァンパ、バター茶、肉(干生)が欠かせない。これがないと馬力がでない。極端にいうと朝も昼も晩もこれだけで済む。日本側の用意した高所食ではラーメンが好まれる。米の飯もよく食べる。漢族との接触が密なので中国料理には抵抗がない。四川省と境を接しているため、チベットの中国料理は唐辛子のきいた四川風味である。ナムチャバルワのBCで藏族のコックが作る料理も、ABCで藏族隊員が作る中国風の料理も辛く四川風であった。しかし藏族隊員にとっては、ツァンパ、バター茶、肉がどうしても必要でありその他にタバコも必需品であった。この点から考えると藏族のみの登山隊は、食糧計画は簡単で便利でないかと思う。日本

人や漢人の山での食糧は複雑でややこしく面倒である。

ナムチャバルワ隊は日中合同と言っても、登山隊員も協力隊員も藏族で、本当は日藏合同であった。肉は羊、ヤクがBCで屠殺、解体され、上部キャンプに送られた。羊の片腿がC5(7000m)まで届いていた。ナムチャバルワが位置する東部チベットは湿潤ヒマラヤであり、年間雨量2000ミリメートルにもなるそうである。森林は繁り、樹木にはサルオガセがまといさがっている。ジャガイモ、カブラ、カリフラワー、なっば類が下の部落よりBCに上がってきた。大きく美味なジャガイモはABCへも届けられた。紅ジャガイモがあったが日本では見掛けたことがなく珍しかった。

最初のアタックの時、最終キャンプで何を食べたかと尋ねたら、ラーメンとツェンパ、バター茶を食べたと言っていた。バター茶は木の筒に入れて棒で攪拌しバターをホモゲナイズするのが正式の作り方である。上部キャンプでは、それができないので、茶を煎じ岩塩とギーを入れてかき混ぜた簡易な作り方をしている。高地に生活する藏族は、このバター茶を一日に4000ミリリットルぐらい飲むらしい。高所で必要な水分と、バターによる栄養の補給になっている。

この他に藏族にとって、なくてはならない酒がある。ツェンパを作る裸麦(チンコー)を醗酵させ、醸造したものでチャンと言う。アルコール分は2~3%位でビールより弱い。薄く白く濁っていて、やや酸味がある。醗酵し過ぎると酸味が強くなり不味い。このチャンを藏族は何かと言っては飲む。山から下りてくると歓迎は先ずチャンで井大のお椀になみなみと注いでくれる。三口一杯と言って、一口ずつ三回飲んで、後は一気に飲み干すのが礼儀である。飲み干してファーとしていると、また注いでさあ飲みなさいと言う仕草をする。もう駄目だと逃げるか、お椀を素

早く横の者に渡さないと何杯も飲まされる。薄い酒でも沢山ドンドン飲むと酔っ払ってしまう。前後不覚になり吐いたり下したりして酷い目に遭う犠牲者がいつも出る。

5. 終わりに

この文章は、京都熊笹会創立40周年記念誌に掲載されたものです。今回、編集者のお勧めにより、投稿したことをお断りしておきます。

〈編集後記〉

- ・今回も時期遅れの発行となりましたが、本号にて遅延解消し本来の軌道に修正できると思います。改めてお詫び申し上げます。
- ・「シシャパンマ医学報告」は94年5月の総会時、スライドを駆使して報告されたもので出席会員の好評を得たものです。山を通じての新しい学問分野のバイオニア活動に皆様とともに応援したいと思います。
- ・「梅里雪山学術登山」は、今までの集大成レポートです。残念至極の思いを込め総括していただきました。尚、再征の芽生えがあることを附記しておきます。
- ・「ブータンその後」はタイムリーな展望スケッチでした。秘境ブータンも先輩会員中尾佐助氏の逝去と共に、過去形になりつつある事を知りました。
- ・会員の動きとして、阪本・井上両氏の寄稿を掲載しました。皆様からのご投稿をお願い致します。
- ・この場を借りて今西錦司元会長のレリーフについてご報告します。日本山岳会京都支部(斎藤惇生支部長)の肝煎りで京都北山の直谷の岩にブロンズ板が設置され、94年6月12日に除幕式が行われました。今秋、11月5~6日、全国的に披露される手筈になっています。
- ・最後になりましたが、本号執筆各氏に対し、厚く御礼申し上げます。

(新井 浩)

AACK時報12号 1994年9月30日発行
発行者：社団法人京都大学学士山岳会
〒606 京都市左京区吉田本町 京都大学内
TEL 075-771-2500 FAX 075-771-4410
代表：会長 高村 奉樹
編集：酒井 敏明, 新井 浩, 伊藤 宏範
印刷：株式会社土倉事務所
〒603 京都市北区小山西花池町1-8
TEL 075-451-4844 FAX 075-441-0436

